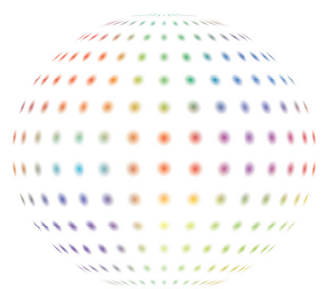


社会福祉学専攻



1. 総合人間学研究科社会福祉学専攻 博士前期課程(2022年度)授業科目表

授業科目の名称		配当 年次	単 位 数			開講 状況	担当教員
			必修	選択	自由		
基礎 研究 科目	キリスト教社会福祉・いのち学	1・2		2		前期1	石 居 基 夫
	社会福祉援助方法総論	1		2		前期1	福 島 喜代子
	社会福祉法政策論	1		2		後期1	金 子 和 夫
	社会福祉調査法Ⅰ	1		2		通年	山 口 麻 衣
	社会福祉調査法Ⅱ	1		2		通年	浅 野 貴 博
専 門 科 目	高齢者福祉研究	1・2		2		後期1	市 川 一 宏
	司法福祉研究	1・2		2		前期1	西 原 雄次郎
	社会的弱者の自立支援研究	1・2		2		休講	
	障害者福祉研究	1・2		2		前期1	高 山 由美子
	児童家庭福祉研究	1・2		2		後期1	加 藤 純
	地域福祉研究※(隔年開講)	1・2		2		休講	市 川 一 宏
	コミュニティワーク研究※(隔年開講)	1・2		2		休講	和 田 敏 明
	精神保健福祉研究	1・2		2		前期1	倉 本 英 彦
	スーパービジョン研究	1・2		2		後期1	福 山 和 女
	家族支援コンサルテーション研究	1・2		2		集中	福 山 和 女
	非営利組織における人材育成管理研究※(隔年開講)	1・2		2		集中	市 川 一 宏
	国際社会福祉研究	1・2		2		前期1	原 島 博
	社会福祉における経営管理研究※(隔年開講)	1・2		2		前期1	和 田 敏 明
	実践評価・実践研究	1・2		2		後期	山 口 麻 衣
専 門 演 習	演習 A(社会福祉の制度と政策)	1		4		通年	市川一宏/金子和夫/ 原島 博/山口麻衣
	演習 AⅡ(社会福祉の制度と政策)	2		4		通年	市川一宏/金子和夫/ 原島 博/山口麻衣
	演習 B(社会福祉方法と技法)	1		4		通年	福島喜代子/高山由美子
	演習 BⅡ(社会福祉方法と技法)	2		4		通年	福島喜代子/高山由美子
実 習	実習	1・2		3		前期	高 山 由美子

	日本語論文の書き方(留学生対象)	1			2※	通年	ドイル 綾 子
--	------------------	---	--	--	----	----	---------

※留学生のみ履修可能 卒業要件単位には含まれない

キリスト教社会福祉・いのち学

2単位：前期1コマ

1～2年

石居 基夫

【科目補足情報】

キリスト教福祉といのちの倫理

【到達目標】

聖書とキリスト教の福祉的働きの実践と研究し、対人援助の専門職に必要な人間理解と倫理の基本、特に、いのちと尊厳を守るための包括的な人間理解におけるスピリチュアルな視点について学ぶ。

【履修の条件】

特になし

【講義概要】

キリスト教の人間理解の本質、特に対人援助に必要な包括的な人間理解におけるスピリチュアリティーについて、聖書と福祉的働きの実践や思想の歴史に学んでいく。

■授業計画

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 キリスト教の人間理解の基礎
- 第3回 聖書における対人援助
- 第4回 キリスト教と対人援助（実践と思想）①
- 第5回 キリスト教と対人援助（実践と思想）②
- 第6回 いのちの倫理①
- 第7回 いのちの倫理②
- 第8回 いのちの倫理③
- 第9回 いのちの倫理④
- 第10回 実践研究①
- 第11回 実践研究②
- 第12回 実践研究③
- 第13回 実践研究④
- 第14回 まとめ
- 第15回 -
- 第16回 -

【成績評価】

試験（0%）、レポート（100%）、小テスト（0%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（0%）

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

課題となる聖書や文献について事前に学び、一人ひとりが関係する対人援助の現場での実践と経験に基づいてテーマについての予習・復習を行い、授業参加に備える。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

各授業においてのフィードバックを行う。

【ディプロマポリシーとの関連性】

ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身

につけている」に該当する。本学の「建学の精神」に基づき、ホーリスティックな人間理解、特にスピリチュアル・ニーズを持つ実存についての理解を深め、対人援助の専門性を養うことが期待される。

【テキスト】

藤井美和他編著『生命倫理における宗教とスピリチュアリティー』晃洋書房

【参考文献】

その都度、授業内で紹介するが、たとえば阿部志郎『福祉の哲学』（誠信書房）、糸賀一雄『福祉の思想』（NHK出版）、熊澤義宣『キリスト教死生学論集』（教文館）など。

社会福祉援助方法総論

2単位：前期1コマ

1年

福島 喜代子

【到達目標】

ソーシャルワークの理論と方法を学び、高度な専門職業人として、ソーシャルワークを実践できるようになる。多様なレベル（個人・グループ・地域）において、ソーシャルワークの実践理論に基づき、包括的な理解・アセスメントができる。ソーシャルワークの理論、モデル、アプローチと結び付けて、実践を計画、実施できる。

【履修の条件】

ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科在学生・研究生・科目等履修生。社会福祉専攻課程協議会加盟校大学院生が履修できる。＊認定社会福祉士の認証研修の共通科目である。

【講義概要】

ソーシャルワークの理論と方法について講義と演習を通して学ぶ。ソーシャルワークの実践理論、モデル、アプローチとソーシャルワーク実践を結び付ける。理論・モデルに基づく対象の理解・アセスメントと支援計画をたてる。

■授業計画

- 第1回 ソーシャルワークの定義と理論（講義と演習）
- 第2回 ソーシャルワークで活用する理論、モデル、アプローチ（演習）
- 第3回 包括的アセスメントの実践。身体的・心理的・社会的アセスメント、（講義と演習）
- 第4回 包括的アセスメントの実践。身体的・心理的・社会的な支援計画、（演習）
- 第5回 認知行動理論と認知療法的アプローチ（講義と演習）
- 第6回 認知行動理論と行動療法的アプローチ（演習）
- 第7回 システム理論と家族システムズアプローチ（講義と演習）
- 第8回 システム理論と家族システムズアプローチ（演習）
- 第9回 生態学モデル、ストレングス視点、ナラティブアプローチ（講義と演習）
- 第10回 生態学モデル、ストレングス視点、ナラティブアプローチ（演習）
- 第11回 グループの力動とグループ支援（講義と演習）

- 第12回 グループの力動とグループ支援（演習）
 第13回 個別支援、グループ支援、組織支援、地域支援の
 実践（講義と演習）
 第14回 チームアプローチ（演習）
 第15回 —
 第16回 —

〔成績評価〕

試験（0%）、レポート（30%）、小テスト（0%）、課題提出
 （30%）、その他の評価方法（40%）

〔成績評価（備考）〕

授業に出席をして、演習に積極的に参加することを求める。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

本科目では各授業回あたりおよそ200分の準備学習（予習・復
 習等）を必要とする。定められたテキストの該当ページを讀ん
 で予習をする。また、各自担当となった回については、課題をも
 とに発表をする。そして、最後にレポートを課す。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

レポートについては、発表時にコメントを行う。発表時のコメント
 をもとに最終レポートの提出を求める。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術
 を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身
 につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会
 福祉学分野における広い学識と、高度な専門的知識や技術を
 備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身に
 つけることとなる。

〔テキスト〕

『ダイレクト・ソーシャルワーク ハンドブック——対人支援の理論
 と技術』ディーン・H・ヘブワース（著）、ロナルド・H・ルーニー
 （著）。翻訳本。明石書店。2015年。

ISBN-10: 4750341711 ISBN-13: 978-4750341712 を使用す
 る。教科書の利用方法については、授業で説明する。

〔参考文献〕

適宜紹介する。

社会福祉法政策論

2単位：後期1コマ

1年

金子 和夫

〔到達目標〕

高度な専門職として相談援助に必要な福祉サービス、社会保
 障制度にかかる法的構造を理解し、利用者の権利擁護と権利
 侵害への対応について説明できるようにする。また、研究者を
 目指して博士後期課程に進むに当たって必要な法政策に関す
 る知識、研究方法を修得する。

〔履修の条件〕

特になし

〔講義概要〕

本講義は、現代社会保障制度・社会福祉サービスにかかる法
 政策、とりわけ、権利擁護制度を検証し、その創設・展開、
 意義、役割、問題点、課題などについて講義するとともに、そ
 れに関連する法律文献、判例、白書などを読み、講義内容に
 ついて質疑応答を行い、その内容を深める。

授業の展開は、基本的には、担当教員がわが国の社会保
 障・社会福祉法政策の展開、とりわけ、社会保険制度や権利
 擁護制度の動向・課題などについて、文献や統計資料などから
 制度内容や実態を理解する。その後、事例研究や判例研究
 を行うことによりさらに理解を深め、各受講者は利用者への権利
 侵害の対応や意思決定の支援など個別の法課題について、分
 析・検討・発表を行うこととする。

■授業計画

- 第1回 「少子・高齢社会」「人口減少社会」の社会保障・
 社会福祉法政策への影響（講義と演習）
 第2回 社会保障・社会福祉法政策の展開（講義と演習）
 第3回 権利擁護制度の動向（講義と演習）
 第4回 憲法等に見る権利論の動向（講義と演習）
 第5回 権利能力・行為能力（講義と演習）
 第6回 成年後見制度の内容と実際（講義と演習）
 第7回 契約と消費者保護制度（講義と演習）
 第8回 損害賠償制度（講義と演習）
 第9回 夫婦関係とDV防止法（講義と演習）
 第10回 親子関係と児童虐待防止法（講義と演習）
 第11回 扶養・相続と高齢者虐待防止法（講義と演習）
 第12回 行政処分と不服申し立て（講義と演習）
 第13回 社会保障・社会保険関係の判例研究（講義と演習）
 第14回 社会福祉サービス関係の判例研究（講義と演習）
 第15回 レポート提出
 第16回 —

〔成績評価〕

試験（0%）、レポート（80%）、小テスト（0%）、課題提出
 （0%）、その他の評価方法（20%）

〔成績評価（備考）〕

成績評価の「その他」は、質疑応答の状況により評価する。
 習得度は、毎回の授業の中で、文献・判例などにより制度や
 事例検討の理解力を確認し評価する。最終レポートは、学習し
 た理論・制度・判例などの知識が実践において活かせるか、
 また、問題の発掘と解決策の検討などを確認のうえ評価する。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

社会保障・社会福祉法政策に関しては、毎日のように新聞や
 TV等で取り上げられている。それを自分の問題関心の範囲内
 で収集するように心がける。また、授業や報告での不明・疑問
 等については、各自で文献や資料にあたり、受講者間で議論し、
 明らかにしようとする姿勢が大切である。本科目では各授業回
 におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

授業中の質問については、その都度口頭および資料等によりフィードバックしていく。また、課題レポートについては、次の授業の際、または授業終了後にメール等でコメントを行う。

【ディプロマポリシーとの関連性】

2.全人的なヒューマンケアに必要な高度な専門性、および、3.総合的・実践的な学習能力に該当する。本科目を学ぶことにより、福祉の高度な専門職に必要なとされる価値、知識、技術を身につけ、人権と生活を守り、人間性豊かな人生が送ることができるよう援助できる、また、ものごとの本質を把握し、問題点の発見、分析、事態の改善、改善策の提言・実行等ができるようになる。

【テキスト】

必要に応じて資料を配布する。

【参考文献】

『厚生労働白書』『国民生活白書』『高齢社会白書』等の白書
『社会保障統計年報』等の統計資料
『保険と年金の動向』『国民の福祉と介護の動向』等の定期刊行物
『ジュリスト』『法律時報』『社会保障判例百選』『民法判例百選』『家族法判例百選』等の法律雑誌
『社会保障法学会誌』『社会福祉学会誌』等の学会誌
『成年後見』等の専門雑誌
その他社会保障・社会福祉法政策、権利擁護関係の文献は多数あるので、講義に際して紹介する。

社会福祉調査法Ⅰ

2単位：通年

1年

山口 麻衣

【科目補足情報】

前期と後期の開港時間が異なる。

【到達目標】

- ①多様な社会福祉調査の方法や分析に関する知識を高める。
- ②量的な調査の多様な方法や分析について学び、分析手法スキルを高める。
- ③ソーシャルワーク実践に役立つ調査研究方法（実践の効果測定、プログラム評価、実践研究、サービス評価の考え方と方法について、理解し、説明できる。

【履修の条件】

条件は特にないが、受講者はⅠとⅡの両方を履修が望ましい。

【講義概要】

社会福祉調査の方法や分析に関する知識を高め、社会福祉調査を理解し、実際に調査を担えるソーシャルワーク専門職となるための基礎を養うこととする。社会福祉調査法について体系的に学び、社会福祉調査を行う上での量的調査と質的調査の活用可能性と限界やミックス法を理解する。主に量的調

査の学びを深め、統計解析ソフト（SPSS）を用いた分析方法や多変量解析の方法を学ぶ。さらに、ソーシャルワーク実践に役立つ実践の効果測定、実践研究、ニーズ分析、評価研究、サービス評価、プログラム評価の考え方と方法を学ぶ。

■授業計画

- | | |
|------|---|
| 第1回 | 社会福祉調査の概要 調査方法（量的調査・質的調査）とミックス法、社会福祉調査の目的・意義・課題、アクションリサーチ、エビデンス・ベースド・プラクティス（EBP）と社会福祉調査の関連について学ぶ。 |
| 第2回 | 実践効果測定、実践研究、ニーズ分析、実践評価、社会福祉実践と調査研究について学ぶ。集団比較実験計画法、単一事例実験計画法について学ぶ。 |
| 第3回 | 評価研究・サービスの質の評価、プログラム評価（構造、プロセス、アウトカムの評価）について学ぶ。 |
| 第4回 | 量的調査における仮説構築と検証、統計的検定・サンプリング、測定、変数と尺度、質問紙作成について学ぶ。 |
| 第5回 | 統計ソフトの活用方法と実際について学ぶ。一変数の分析（単純集計、記述統計）について学ぶ。 |
| 第6回 | 二変数の分析（クロス集計 χ^2 検定）について学ぶ。 |
| 第7回 | 二変数の分析（平均の差t検定、一元配置分散分析F検定）について学ぶ。 |
| 第8回 | 二変数の分析（相関分析・単回帰分析）について学ぶ。 |
| 第9回 | 多変量解析方法の概要、重回帰分析について学ぶ。 |
| 第10回 | ロジスティック回帰分析について学ぶ。 |
| 第11回 | 因子分析について学ぶ。 |
| 第12回 | その他の多変量解析（分散共分散分析など）について学ぶ。 |
| 第13回 | その他の多変量解析（クラスター分析、テキストマイニングなど）について学ぶ。 |
| 第14回 | その他の多変量解析（共分散構造分析など）と多変量解析まとめについて学ぶ。 |
| 第15回 | レポート提出 |
| 第16回 | — |

【成績評価】

試験（0%）、レポート（50%）、小テスト（0%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（50%）

【成績評価（備考）】

レポートは調査研究計画・データ分析・研究課題を学期末にまとめる。その他の評価はリーディング課題/担当分の報告・レジメ提出、毎回のフィードバック、授業の積極的な参加。面接授業の出席100%。やむを得ず欠席の場合はレポートで代替できる（3回まで）。30分を過ぎた遅刻は欠席（遅刻3回で欠席1回）とする。

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

リーディング課題は全員、事前に読む。テキストの予習・復習、統計分析の自習や統計個別指導の活用を薦める。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

リアクションペーパーに対するフィードバックを次回の講義において行う。課題レポートについては、レポート返却時に個別にコメントを行う。

【ディプロマポリシーとの関連性】

ディプロマポリシーの「高度な専門的知識や技術を備える」に該当する。この科目を履修することで、研究するうえで不可欠な社会福祉調査方法に関する、高度な専門的知識や技術を身につけることとなる。

【テキスト】

テキストは指定しない。

【参考文献】

浦上昌則・脇田貴文（2008）『心理学・社会科学研究のための調査系論文の読み方』東京図書、2,940円。
村瀬洋一・高田洋・廣瀬毅士編（2007）『SPSSによる多変量解析』オーム社、2,940円、笠原千絵・永田祐編著（2013）『地域の〈実践〉を変える社会福祉調査入門』春秋社、2625円、その他の参考文献は授業で紹介する。

【備考】

担当部分のレジメ作成・発表を求める。

社会福祉調査法Ⅱ

2単位：通年	1年
浅野 貴博	

【到達目標】

- ①社会福祉調査法の基礎を学び、研究計画書の作成に向けて各自の研究デザインを描けるようになる。
- ②修士論文の作成に向けて、論文の書き方等の基礎的な知識と技術を習得する。

【履修の条件】

本講義はⅠとⅡに分かれているが、実際は通年科目と同様であるため、ⅠとⅡの双方を履修すること。

【講義概要】

社会福祉調査法について体系的に学び、実際に調査を担えるソーシャルワーク専門職となるための基礎を養うこととする。社会福祉調査法における質的調査について、その前提の考え方をきちんと踏まえた上で、質的調査の様々なアプローチの概要を学ぶ。

■授業計画

- 第1回 研究の“問い”を育む
- 第2回 質的調査法とは？
- 第3回 質的データの集め方①
- 第4回 質的データの集め方②
- 第5回 質的データの集め方③
- 第6回 質的データの分析①
- 第7回 質的データの分析②

- 第8回 質的データの分析③
- 第9回 質的調査法のアプローチ①
- 第10回 質的調査法のアプローチ②
- 第11回 質的調査法のアプローチ③
- 第12回 質的調査の評価
- 第13回 研究の倫理・ルール
- 第14回 研究発表・報告の仕方
- 第15回 —
- 第16回 —

【成績評価】

試験（0%）、レポート（0%）、小テスト（0%）、課題提出（50%）、その他の評価方法（50%）

【成績評価（備考）】

研究計画書の作成に向けて、授業の進行に沿って課題を課す。詳しくは授業時に説明する。

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。参考文献の読み込み等、各自で主体的に学びを進めることが期待される。

【試験・レポート等のフィードバック】

課題に対するフィードバックは授業時に行う。

【ディプロマポリシーとの関連性】

ディプロマポリシーの「高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、研究する上で不可欠な社会福祉調査法に関する高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけることとなる。

【テキスト】

特定のテキストは使用しない。必要に応じてレジメおよび資料を配布する。

【参考文献】

- ・日本ソーシャルワーク学会監修（2019）『ソーシャルワーカーのための研究ガイドブック』中央法規出版
- ・笠原千絵・永田祐編（2013）『地域の〈実践〉を変える社会福祉調査入門』春秋社
- ・ウヴェ・フリック（2011）『新版 質的研究入門』春秋社
- ※その他の参考文献は授業で紹介する。

高齢者福祉研究

2単位：後期1コマ	1～2年
市川 一宏	

【到達目標】

疾病や認知症、うつ病に関する基礎理論、高齢者を取り巻く生活課題を把握する調査理論、社会福祉士が活用する社会福祉制度の成立要因、現状と課題を分析する福祉政策理論、

高齢者へのソーシャルワークの知識、方法を学び、実際の現場に適用し、その検証を行い、社会福祉士として実践の水準の向上を図る。そのため、事例研究や、受講生の職場等を通じた課題を報告させ、スーパービジョンを行い、個別支援の他、職種連携及び地域福祉の増進を行うことができる能力を養成する。習得度は、(1) 文献・事例に対する理解度、(2) 最終レポートの内容により判断する。疾病や認知症、うつ病に関する基礎理論、高齢者を取り巻く生活課題を把握する調査理論、社会福祉士が活用する社会福祉制度の成立要因、現状と課題を分析する福祉政策理論、高齢者へのソーシャルワークの知識、について習熟度を確認する。

【履修の条件】

ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科在学生・研究生・科目等履修生。社会福祉専攻課程協議会加盟校大学院生

【講義概要】

高齢者がもつ医療、福祉、生活環境等の理論的学習とともに、高齢者および家族介護者支援に関する基礎理論、ソーシャルワーク理論等に基づくアプローチの方法等を研究し、社会福祉士としてより高度の理論、実践知識、技術を習得できるようにする。

■授業計画

- | | |
|-----|--|
| 第1回 | 高齢者福祉政策の分析視角（講義）：社会福祉基礎構造改革以降、担い手が多様化し、社会福祉士、ケアマネジャー等の様々な専門職が登場してきた。そして、自立支援と予防、地域包括ケアとまちづくりを目指す福祉が強調されている。今日の介護保険制度を比較検討し、現状と課題を学習する。 |
| 第2回 | 高齢者福祉の歴史、高齢者福祉施設の史的展開と現在の機能（講義）：明治期より今日に至る高齢者福祉の歴史をふまえ、日本における施策の展開を検討する。具体的には、貧困者対策、入所施設を中心とした対策が、在宅福祉へと移行し、さらに地域福祉型へと移行する過程を振り返り、今日の高齢者福祉の位置づけを明らかにする。 |
| 第3回 | 高齢者問題の所在（講義）：今、日本は超高齢社会にある。しかし、急激な人口の高齢化と家族の核家族化による老々介護の問題、また認知症高齢者、孤立の問題等、統計資料や実際の事例等を用いながら学習する。 |
| 第4回 | 老親を扶養する家族が直面する課題（講義）：認知症の高齢者を介護する3世代世帯の介護力を検証する。 |
| 第5回 | 地域における施設の機能（講義）：①機能の社会化（施設の専門的機能を活用した相談事業、デイサービス等の地域への提供、意識化された職員の地域活動への参加、緊急一時保護、②生活・処遇の社会化：ボランティア活動・施設内における施設利用者と地域住民との交流、買い物・外食・旅行等のプログラムの実施、町会等の地域活動への利用者の参加、施設の枠を越えた地域での地域住民との交流、③運営の社会化：理事会・運営協議会への住民参加、④課題の社会化：ソーシャルアクション |
| 第6回 | 入所施設における処遇（講義）：「地域からの隔離」 |

「保護と収容」施設から、利用者主体の「生活の場」にしようとする多くの取り組みを検証する。

- | | |
|------|---|
| 第7回 | 在宅を支援する仕組みの検討（社会資源と地域ネットワーク）（講義）：社会資源と地域ネットワークについて、具体的事例を通して検証する。特に、情報伝達もしくは情報収集を目的とした会議、意思決定を目的とした会議、問題解決のための発想とその集約を目的とした会議等、会議の目的は多様であり、定期的な会議、日常的な連絡（電話、個別面接相談等）、緊急会議等、形態も多様である。会議の内容を具体的な検証し、今後の進め方を模索する。 |
| 第8回 | 高齢者の権利保障と援助の専門性（講義）：契約時代における高齢者の権利保障として、選択の保障と利用支援、地域福祉権利擁護事業と成年後見制度、苦情対応システム、第三者評価事業における質の担保等があげられる。しかし、それらが援助に十分組み込まれているかは、疑問の点も少なくない。そもそも援助の専門性とは何か、踏み込んで考察することをめざしたい。 |
| 第9回 | 高齢者福祉計画の検証とまちづくり（講義）：地域包括ケアシステムに代表とされる近年の改革、高齢者保健福祉計画、介護保険事業計画、地域福祉計画は、高齢者福祉が従来の日常生活動作能力を軸としたケアから、生活者の視点からの「生活の質」（QOL：Quality of Life）を尊重した援助への移行を迫っている。さらに、地域ケアのあり方を検証することが不可欠であり、保健医療福祉だけでなく、まちづくりや環境との協働が具体的な検討課題である。総括として、これから高齢者福祉のあるべき姿を考えたい。 |
| 第10回 | ケアマネジメント、ケア計画の作成（演習・事例検討）：事例を通し、ニーズの発見、調査・情報収集、ニーズ評価、ケアプラン、サービスの開発・提供、モニタリング、再評価と続くケアマネジメントの一過程を検証する。 |
| 第11回 | ケア会議の実践（演習・事例検討）：地域包括支援センター等が主催するケア会議の事例を通し、医療、介護等の多職種が協働、介護支援、自立支援にどのように取り組むか、検証する。 |
| 第12回 | 在宅高齢者の虐待、孤立予防（演習・事例検討）：虐待と孤立は、相互に関連している。本講義では、従来のイギリスの高齢者虐待と対応について紹介し、その定義、また対応策について検討する。また孤立の問題を分析し、総合的日常生活支援の視点から、フォーマル、インフォーマルケアの現状と相互の連携モデルについて検証したい。 |
| 第13回 | 施設の社会化を目指す実践（事例検討）：①機能の社会化（施設の専門的機能を活用した相談事業、デイサービス等の地域への提供、意識化された職員の地域活動への参加（再掲）、緊急一時保護、②生活・処遇の社会化：ボランティア活動・施設内における施設利用者と地域住民との交流、買い物・外食・旅行等のプログラムの実施、町会等の地域活動への利用者の参加、施設の枠を越えた地域での地域住民との交流、③運営の社会化：理事会・運営協議会への住民参加、④課題の社会化：ソーシャルアクション |

第14回 高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画の策定の
検証（演習・事例検討）：各自治体の計画を検証す
る。

第15回 レポート

第16回 —

〔成績評価〕

試験（0%）、レポート（70%）、小テスト（0%）、課題提出
（20%）、その他の評価方法（10%）

〔成績評価（備考）〕

面接授業の出席100%。ただし、やむを得ず講義に出席できな
い場合はレポートで代替できるが、代替を認めるのは研修全体
のうち3回までとする。やむをえない遅刻は授業開始から30分ま
でとする。30分を過ぎた場合は、欠席とする。遅刻3回で欠席
1回までとみなす。30分以上の早退も同様とする。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習）を必要とす
る。なお、シラバスにあるテーマに関して授業ごとにレポートを分
担する。分担したレポートだけでなく、関係文献もしくは自分が
関わる実践現場を通して学習しておくこと。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

レポート・課題に関しては、完成前の構想もしくは作成段階で
報告を義務づけ、コメントを行う。その上で、レポート・課題を
完成させる。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術
を備え、専門性を必要とする 職業を担うための優れた能力を身
につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会
福祉学分野における広い学識と、高度な専門的知識や技術を
備え、専門性を必要とする 職業を担うための優れた能力を身
につけることとなる。

〔テキスト〕

各テーマに即したレジメを配布する

〔参考文献〕

各テーマに即したレジメと資料を紹介する。

司法福祉研究

2単位：前期1コマ

1～2年

西原 雄次郎

〔到達目標〕

- ①司法福祉の歴史と現状の全体像を理解する。
- ②成人・少年の刑事事件への福祉的関与の現状を理解する。
- ③更生保護制度の概要と司法福祉の関係を理解する。
- ④民事事件・家事事件への福祉的関与の現状を理解する。
- ⑤高齢者・障害者による犯罪とこれへの対応におけるソーシャ
ルワークの貢献と課題を理解する。

〔履修の条件〕

ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科在学生・研究生・
科目等履修生

社会福祉専攻課程協議会加盟校大学院生

〔講義概要〕

三権の一つである司法制度の全体像を理解し、その中で模索
されてきた福祉的取り組みの歴史と現在の諸課題を、主として
文献と事例を通して展望する。

また、ソーシャルワーカーとしてどの様にこれらの課題に取り組む
べきなのか、具体的な多くの事例を用いて学習する。

■授業計画

- | | |
|------|--|
| 第1回 | 司法福祉とは1（講義）
・規範的解決と実態的解決
司法的判断だけでは「解決できない問題」を通
して考える |
| 第2回 | 司法福祉とは2（講義）
・司法と福祉の連携の必要性
犯罪白書にみる「わが国の犯罪の現状」と福
祉の視点を考える |
| 第3回 | 司法福祉とは3（講義）
・司法と福祉の連携の実際
司法にソーシャルワークが関わる意味と意義につ
いて考える |
| 第4回 | 司法福祉の歴史的概観1（講義）
・先駆者による実践例から学ぶ1 |
| 第5回 | 司法福祉の歴史的概観2（講義）
・先駆者による実践例から学ぶ2 |
| 第6回 | 刑事司法と社会福祉1（講義）
・捜査過程と福祉的配慮 |
| 第7回 | 刑事司法と社会福祉2（講義）
・裁判過程と福祉的配慮 |
| 第8回 | 刑事司法と社会福祉3（講義）
・刑務所・少年院等の刑事施設における福祉的
実践 |
| 第9回 | 刑事司法と社会福祉4（講義・演習）
・更生保護と福祉的視点1 |
| 第10回 | 刑事司法と社会福祉5（講義・演習）
・更生保護と福祉的視点2
累犯障がい者支援と更生保護 |
| 第11回 | 刑事司法と社会福祉6（講義・演習）
・更生保護と福祉的視点3
累犯高齢者支援と更生保護 |
| 第12回 | 犯罪予防、再犯防止に関する取組と課題（講義・
演習）
被害者支援の現状と課題 |
| 第13回 | 民事・家事司法と社会福祉1（講義・演習）
・家事審判・調停事件と福祉的視点1 |
| 第14回 | 民事・家事司法と社会福祉2（講義・演習）
・家事審判・調停事件と福祉的視点2
総括：司法福祉の課題 |
| 第15回 | 課題提出 |
| 第16回 | — |

〔成績評価〕

試験 (0%)、レポート (50%)、小テスト (0%)、課題提出 (0%)、その他の評価方法 (50%)

〔成績評価 (備考)〕

- ①授業時に行う議論に積極的に参加してもらいたいことと、各授業ごとに、その授業で学んだこと・考えたことを、その都度メール等で提出する。その内容の評価を含めて50%とする。
- ②最終レポートの評価を50%とする。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

- ①認定社会福祉士養成講座として必要な諸条件を別途提示する。
- ②各自の専門職としての知識には大きな差があると思われるが、直接この分野と関わって来なかった受講者は特に事前・事後学習に努めてもらいたい。
- ③本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

- ①各授業毎に学んだこと、考えたことを成績評価の欄に記したように、担当者にメール等にて提出する。
- ②最終課題は最終授業時に提示する。
- ③授業ごとに提出されたメールに対するフィードバックは、次回授業時に応答する。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

この科目は、本学のディプロマ・ポリシーとして示されている「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身に付ける」という点の一翼を担うものである。

〔テキスト〕

毎回担当者が作成・配布する資料を基に授業を展開する。

〔参考文献〕

- ①『犯罪白書』『犯罪被害者白書』『司法統計年報』等の各年版、及び、法務省、厚生労働省、最高裁判所等のホームページに掲載される最新情報をその都度活用する。
- ②新聞等に掲載される司法福祉に関わる記事も参考にする。

障害者福祉研究

2単位：前期1コマ

1～2年

高山 由美子

〔到達目標〕

- ①障害者福祉の歴史的経緯を学習し、権利擁護の視点に基づいて、現状における課題とこれからの支援のあり方を分析する力を身に付ける。
- ②障害者支援の実践に必要なソーシャルワークの諸理論、中でもジェネラリスト・ソーシャルワークの視点をベースにしつつ、ICF、ケアマネジメント、エンパワメントの考え方等々を活用して、事例検討が行えるようになる。
- ③これらの学習を通して、自身の実践の省察、評価を行い、

実践課題を明確にし、理論に基づく具体的な支援方法を修得する。

- ④各当事者の疾病・障害を含む全体像と、生活上の困難について把握出来るようになる。
- ⑤各当事者への支援の展開を実際的に検討し、実践に生かせるようになる。

〔履修の条件〕

ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科在学生・研究生・科目等履修生であること、または社会福祉専攻課程協議会加盟校大学院生であること。

〔講義概要〕

- ①障害者の地域生活支援や社会参加支援に焦点を当てて、転換期にある障害者福祉の諸課題を検討し、今後のあるべき方向をさぐるべく各自が自身の意見を形成することを目標とする。
- ②障害者支援に必要な、諸理論に基づく具体的なアプローチの方法を学び、実践に活用できるようにする。
- ③受講者各自が関わる実践現場での各当事者を理解するための知識、理論、支援方法について事例検討を通して学習する。
- ④個々の当事者に対する理解を深め、有効な支援を行えるようになることを目標とする。

■授業計画

- | | |
|------|-----------------------------|
| 第1回 | オリエンテーション/授業のねらい、障害福祉の理念と歴史 |
| 第2回 | 障害の診断と障害受容（講義・演習） |
| 第3回 | 障害児教育と福祉的支援の展開（講義・演習） |
| 第4回 | 障害者の雇用と就労支援（講義・演習） |
| 第5回 | 障害者計画・障害福祉計画と地域生活支援（講義・演習） |
| 第6回 | 障害者の権利擁護と地域生活支援（講義・演習） |
| 第7回 | 障害者の自立生活支援（講義・演習） |
| 第8回 | 障害者の理解と支援の展開における留意点（講義） |
| 第9回 | 身体障害者の理解と支援展開（講義・演習） |
| 第10回 | 知的障害者の理解と支援展開（講義・演習） |
| 第11回 | 精神障害者の理解と支援展開（講義・演習） |
| 第12回 | 発達障害者の理解と支援展開（講義・演習） |
| 第13回 | 触法障害者の理解と支援展開（講義・演習） |
| 第14回 | 高齢障害者の理解と支援展開（講義・演習） |
| 第15回 | － |
| 第16回 | － |

〔成績評価〕

試験 (0%)、レポート (80%)、小テスト (0%)、課題提出 (0%)、その他の評価方法 (20%)

〔成績評価 (備考)〕

授業での発言、発表、協議への参加を求める。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

本科目では各授業会におおよそ200分の準備学習（予習・復習等）が必要となる。授業時に出される課題等に取り組んだ上で、次の授業に出席することを求める。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

授業時の発表等に対してフィードバックを行う。また毎回の授業で提出するリアクションペーパーに対するフィードバックは、必要に応じて次回以降の授業時に行う。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

ディプロマポリシーの「広い学識を身につける」「高度な専門的知識や技術を備える」に該当する。この科目を履修することにより、社会福祉分野における広い学識を身につけ、ソーシャルワーク専門職としての高度な専門知識と技術を備えることとなる。

〔テキスト〕

参考文献を利用しつつ、主として授業時に配布する資料を用いて行う。

〔参考文献〕

1. 全国自立生活センター協議会編『自立生活運動と障害文化…当事者からの福祉論』現代書館
2. 杉本 章著『障害者はどう生きてきたか…戦前・戦後障害者運動史(増補改訂版)』現代書館
3. 田中恵美子著『障害者の「自立生活」と生活の資源…多様で個別なその世界』生活書院
4. 佐藤久夫・小澤温『障害者福祉の世界』有斐閣 他

児童家庭福祉研究

2単位：後期1コマ

1～2年

加藤 純

〔到達目標〕

児童家庭分野の理論・支援アプローチの成り立ちと主要概念について説明する力を養う。

児童家庭分野の理論・アプローチを自身の実践に結び付け省察・評価する力を養い、実践の改善課題について説明できるようになる。

子どもおよび子育てをする家族が直面する多様な課題を捉え、アセスメントし、支援計画を立てられるようになる。

〔履修の条件〕

ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科在学生・研究生・科目等履修生。

社会福祉専攻課程協議会加盟校大学院生。

〔講義概要〕

子どもと家族の支援に関して、ソーシャルワークの基礎理論および実践理論に基づく支援アプローチを学び、実践に活用できるようにする。

児童家庭福祉の対象者を理解するための理論と支援方法について学ぶ。

■授業計画

- 第1回 子どもや家族のニーズの把握と理解 (1): 子育て問題発生機序。バイオサイコソーシャル・アプローチ (講義・演習)
- 第2回 子どもや家族のニーズの把握と理解 (2): 家族システ

ム論・ニーズ論・役割理論 (講義・演習)

第3回 社会問題の社会的構築: 児童虐待概念の歴史的成立過程を例に (講義・演習)

第4回 虐待の法的概念定義と実践での操作的定義。虐待事例の社会的構築 (講義・演習=事例検討)

第5回 養護相談・虐待相談に関する法制度 (講義)

第6回 行政機関における法的権限と介入過程 (視聴覚教材) 家族内の暴力問題に対する公的相談機関によるコンサルテーションの事例 (演習)

第7回 家族システム論の基礎、家族療法系譜 (講義)

第8回 児童養護施設での家族支援の理念と実際 (解決志向アプローチ) (講義・演習)

第9回 児童養護施設での生活支援の意義と方法 (生活場面面接) (講義)

児童福祉施設における多職種連携 (講義)

第10回 入所施設における治療的支援の事例 (ナラティブ・アプローチ) (演習)

第11回 家族支援におけるアセスメントと支援計画策定 (リスク理論) (講義)

第12回 家族再統合に伴うリスクのアセスメントとマネジメント (演習)

家族再統合のための地域資源と連携 (講義・演習) プログラム評価の基礎とロジックモデルの作成方法 (講義)

ロジックモデルを用いた形成的評価の実際 (演習)

第14回 児童家庭福祉の課題と各自の実践や研究の関わり (まとめ)

第15回 —

第16回 —

〔成績評価〕

試験 (0%)、レポート (70%)、小テスト (0%)、課題提出 (0%)、その他の評価方法 (30%)

〔成績評価 (備考)〕

授業には全て出席すること。最終レポートを提出し合格すること。やむをえない遅刻は授業開始から30分までとする。遅刻3回で欠席1回とみなす。30分以上の遅刻・早退は欠席とする。同一コマで遅刻と早退が合計30分以上の場合欠席とする。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

授業中に事例についてグループディスカッションをするので、事前に事例を読むこと。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習 (予習・復習等) を必要とします。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

期末レポートはメールにより提出してください。提出されたレポートにオンラインでコメントします。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする 職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会福祉学分野における広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする 職業を担うための優れた能力を身につけることとなる。

【テキスト】

授業中に資料を配布。授業では、下記の参考文献の内容を紹介する。

【参考文献】

授業では、下記の文献の内容を紹介します。

上野加代子・野村知二（2003）『〈児童虐待〉の構築』世界思想社教学社

中河伸俊他（2001）『社会構築主義のスペクトラム』ナカニシヤ出版

衣斐哲臣（1997）「体罰習慣がある家族に対する助言指導と保母・教師へのコンサルテーション」『家族療法研究』14巻2号

M. Durrant (1991) "Residential Treatment" W. W. Norton. 関連して、下記の文献もぜひお読みください。

Berg, I. K. (磯貝希久子監訳, 1997) 『家族支援ハンドブック』金剛出版

A. Turnell, & S. Edwards (白木孝二他訳, 2004) 『安全のサインを求めて』金剛出版

ロッシ他（2004=大島巖他訳2005）『プログラム評価の理論と方法』日本評論社

W. K. Kellogg Foundation (2001=農林水産政策情報センター2003訳) 『ロジックモデル策定ガイド』

【備考】

やむを得ず講義に出席できない場合はレポートで代替できるが、代替を認めるのは研修全体のうち3回までとする。

評価のポイントは、児童家庭分野の理論と支援アプローチの概念や技法を理解できたか、および各自の実践の省察・改善に活かす道筋がイメージできたか、児童家庭分野の対象者を理解するための理論と支援方法について理解できたか、および各自の実践におけるアセスメントや支援計画立案に活かすイメージができたかである。習得度は、(1) 授業における討議や事例検討への参加状況、(2) 最終レポートの内容により判断する。

精神保健福祉研究

2単位：前期1コマ

1～2年

倉本 英彦

【到達目標】

福祉職・心理職・医療職は協働することが多く、共通の専門的知識を有することが必要である。そのもつとも基礎となる知識体系である精神医学を学び、身体、精神、社会という側面からの多次的なアプローチができるようにする。

【履修の条件】

社会福祉学専攻生・臨床心理学専攻生で、履修登録を行った者。

【講義概要】

精神医学とは何だろうか？臨床心理学や社会福祉学との関連から位置付けてみよう。精神医学の方法論は？生物、精神、心理、社会的次元から探ってみよう。精神科医療の現状とは？日本と世界の精神科医療の実際を知ろう。精神障害とは？異常と正常、

病気と健康、精神の病とは何か。精神障害の歴史や概念、そして原因、症状、疫学、診断、治療、予後、リハビリテーションなど、個々の疾患の特徴を体系的に学ぼう。授業形態については、基本的に講義形式になるが、わかりやすいようにDVD映像を使用したり、トピックに沿った発表形式で行うことにする。

■授業計画

第1回	オリエンテーション 精神医学入門
第2回	異常と正常、病気と健康、素質と環境
第3回	精神症状、状態像、症候群、精神障害の体系、精神疾患概念の歴史
第4回	心因によるもの（1）心身症、神経症とストレス関連障害
第5回	心因によるもの（2）睡眠・摂食・性関連障害
第6回	内因によるもの（1）統合失調症
第7回	内因によるもの（2）気分障害
第8回	器質因によるもの（1）脳の急性障害
第9回	器質因によるもの（2）脳の慢性障害
第10回	器質因によるもの（3）アルコール・薬物関連障害
第11回	児童・青年期精神医学（1）情緒と行動の問題
第12回	児童・青年期精神医学（2）発達障害
第13回	性格のかたより・パーソナリティ障害
第14回	精神保健福祉法 司法精神医学
第15回	－
第16回	－

【成績評価】

試験（0%）、レポート（40%）、小テスト（40%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（20%）

【成績評価（備考）】

専門職に就くものとして授業に対する適切で積極的な取り組みも考慮する

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

予習：シラバスに沿った箇所の教科書や文献をあらかじめ読んでおく

復習：講義内容や発表をよく振り返り、ノートにまとめる

本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。合計14回の授業で45時間となる。

【試験・レポート等のフィードバック】

講義内小テストの解答・解説は、テストの実施日あるいは次回に行う。

発表やレポートについて、授業内に適宜口頭でコメントする。

【ディプロマポリシーとの関連性】

この科目を履修することにより、ディプロマポリシーにある、社会福祉学分野における広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけることができる。

【テキスト】

山下格著『精神医学ハンドブッカー医学・保健・福祉の基礎知識 第7版』日本評論社 2,300円

【参考文献】

倉本英彦著『思春期のこころの問題と予後』ナカニシヤ出版、2,600円
 倉本英彦著『つまり若者たち—思春期臨床の現場から』日本評論社 1,600円

【備考】

毎回、テキストと各自用意した本科目専用のノートを持参すること

スーパービジョン研究	
2単位：後期1コマ	1～2年
福山 和女	

【到達目標】

所属組織におけるソーシャルワーク業務の内容および社会福祉士の役割について系統的に説明できる。組織における後進育成の意味を理解し、自組織の新人研修・実習指導のためのスーパービジョンの方法と技術を習得させる。

【履修の条件】

ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科在学生・研究生・科目等履修生。社会福祉専攻課程協議会加盟校大学院生

【講義概要】

所属組織における社会福祉士の新人研修・実習プログラムの立案方法や指導の留意点を学習し、組織において後進指導の役割を担えるようにさせる。

■授業計画

第1回	新人・実習生指導概要スーパービジョンに焦点を当て（講義・討論）
第2回	新人・実習生導概要、スーパービジョンプロセス（講義・討論）
第3回	新人・実習生指導概要、スーパーバイザーの尊厳の保持（講義・討論）
第4回	新人・実習生指導概要 スーパーバイザーの理論背景（講義・討論）
第5回	新人・実習生の自律性の育成：スーパービジョンのプログラミングの意義（演習）
第6回	新人・実習生のためのスーパービジョン体制と協働体制（演習）
第7回	新人・実習生スーパービジョンプログラミングの実践：目的（演習）
第8回	新人・実習生スーパービジョンプログラミングの実践：目標（演習）
第9回	新人・実習生スーパービジョンプログラミングの実践：実施項目（演習）
第10回	新人・実習生スーパービジョンプログラミングの実践：リスクマネジメント（演習）
第11回	新人・実習生指導のスーパービジョンの限界（演習）
第12回	組織運営管理論—人材確保策、Teal組織論など、（講義と演習）
第13回	スーパービジョンの方法論、モデル、アプローチ（講

義と演習）

第14回	新人・実習生のスーパービジョン体制の必要性（演習） まとめ—理論と実践の関連性
第15回	—
第16回	—

【成績評価】

試験（30%）、レポート（30%）、小テスト（20%）、課題提出（20%）、その他の評価方法（0%）

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

テキストや参考文献から、該当する理論や技術について予習・復習することを薦める。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

レポートなどで、知識や理論の積み重ねの確認を行う。

【ディプロマポリシーとの関連性】

ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。研究倫理の遵守、目的と意義妥当性、先行検討計画・遂能力研究倫理の遵守、に基づき、知識、技術、価値を検証することの必要性を学習させる。

【テキスト】

福山和女（著）（2005）『ソーシャルワークのスーパービジョン—人の理解の研究（MINERVA福祉専門職セミナー）』ミネルヴァ書房 2,940 円＋税

【参考文献】

福山和女編著（2005）『ソーシャルワークのスーパービジョン』ミネルヴァ書房
 Lee, Robert E, Craig A. Everett（原著）, 福山 和女, 石井千賀子, 日本家族研究家族療法学会評議員会（翻訳）『家族療法のスーパーヴィジョン—統合的モデル』金剛出版（2011）3,990円＋税、Kadushin, A. ほか著福山和女監修『スーパービジョンインソーシャルワーク』中央法規（2016）10,000円＋税
 福山和女監訳（2016）『スーパービジョンインソーシャルワーク』中央法規出版 10,000円＋税

【備考】

出席日数、学期中のレポートの提出、試験などで総合的に評価する。
 参加態度、意見交換、フィードバックなどの質と量を加味する。

家族支援コンサルテーション研究

2単位：集中	1～2年
福山 和女	

【到達目標】

機能不全・崩壊の危機に陥っている家族への支援をしている支援者へのコンサルテーションの実践を検討できる。

〔履修の条件〕

ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科在学生・研究生・科目等履修生。社会福祉専攻課程協議会加盟校大学院生

〔講義概要〕

家族システムの捉え方、力動、介入について、様々なタイプの事例を家族療法、ストレス、精神分析、組織論を適用して検討できるように学ばせる。家族支援を実施している支援者に対するコンサルテーションの知識、技術、方法を学ばせる。

■授業計画

第1回	家族システム論（講義）
第2回	コンサルテーション論（講義）
第3回	家族支援に危機介入理論の適用と、コンサルテーションの必要性（演習）
第4回	家族支援の現状と課題（講義と演習）
第5回	支援者が抱える家族支援の困難と、家族ダイナミクスと支援者のストレスとの交互作用現象（講義と演習）
第6回	家族支援の支援者の困難と組織の中の責務と立場によるリーダーシップ論、組織論（講義と演習）
第7回	支援機関における人間関係と家族支援の担当家族と支援者とのアイソモρφイズム（異種同型）について（演習）
第8回	家族支援の事例に対するコンサルテーションの介入計画（演習）
第9回	組織ストレスと支援者のストレスとの関連性と組織で発生しているスタッフの困難性を解決する視点（演習）
第10回	担当する家族における関係上の三角形と組織での支援者とスタッフにおける関係上の三角形の類似性（演習）
第11回	家族構造のなかでも世代間伝承の概念を適用し、家族理解（演習）
第12回	家族の機能不全について分析と支援するためのコンサルテーション計画（演習）
第13回	家族支援のコンサルテーションの実施計画書作成とリスクマネジメントから評価（演習）
第14回	家族支援のコンサルテーションの効果について（演習） 全14回のプロセスを統括させ家族支援のコンサルテーションの意義を理解（講義と演習）
第15回	—
第16回	—

〔成績評価〕

試験（20%）、レポート（40%）、小テスト（10%）、課題提出（30%）、その他の評価方法（0%）

〔成績評価（備考）〕

面接授業の出席100%。ただし、やむを得ず講義に出席できない場合はレポートで代替できるが、代替を認めるのは研修全体のうち3回までとする。

・やむをえない遅刻は授業開始から30分までとする。30分を過ぎた場合は、欠席とする。遅刻3回で欠席1回までとみなす。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

家族療法とコンサルテーションについては理論的背景などについて学習をしておくこと。また、現場で必要とされる知識について、

ある程度の理解ができるように予習をしておくこと。復習に関しては、講義の中で指摘した個所の理解を深め、コンサルテーション実践に適用できるかどうかを点検すること。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

レポートなどで、習得した内容についての確認を行う。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。-研究倫理の遵守、目的と意義妥当性。先行検討計画・遂能力研究倫理の遵守、に基づき、人、組織、地域の尊厳の保持を順守しながら、コンサルテーションの意義を研究する。

〔テキスト〕

『家族療法テキストブック』日本家族研究・家族療法学会編 金剛出版 2013年

・『予防精神医学』新福尚武監訳 朝倉書店 1970年

〔参考文献〕

・『家族評価』藤縄昭・福山和女監訳 2001年 金剛出版

・『組織のストレスとコンサルテーション』武井麻子監訳 2014年 金剛出版

・『精神療法』Vol.46 No.5 『児童相談所よ、がんばれ』2020年

非営利組織における人材育成管理研究

2単位：集中

1～2年

市川 一宏

〔到達目標〕

組織の活性化を図ることができる知識と技術を習得し、中堅・指導的・管理職員として、OJT、人材養成、チームアプローチ、職場における改革等の役割を担うことができる。

〔履修の条件〕

ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科在学生・研究生・科目等履修生。社会福祉専攻課程協議会加盟校大学院生

〔講義概要〕

社会福祉における専門性を前提に、所属する組織において、危機管理・PDCAサイクルによるサービスの質保障等の運営管理、人材活用・育成等の組織性を修得することを目的とする。

■授業計画

第1回	非営利組織におけるマネジメントを必要とする背景（講義）
第2回	マネジメントの概念と方法（講義）
第3回	非営利組織におけるミッションの意味（講義と事例検討）
第4回	組織活動の意義と内容の理解（講義と演習）
第5回	利用者主導のマネジメントの理解（講義と事例検討）
第6回	職場の問題解決システムとPDCAサイクル（講義と演

- 習)
- 第7回 職場の課題形成プロセスの理解と応用 (講義と演習)
- 第8回 危機管理システム等の管理システムの理解と自組織の検証 (職場の課題形成プロセスの理解と応用講義と演習)
- 第9回 業務改善計画の策定と進行管理、評価 (講義と演習)
- 第10回 チームワークとリーダーシップの理解 (講義と演習)
- 第11回 能力開発の意義の理解と実施 (講義と演習)
- 第12回 研修プログラムの理解と企画・運営 (講義と演習)
- 第13回 人事管理システム、労務管理システムの理解 (講義と演習)
- 第14回 自組織における経営戦略の作成 (総括) (講義) (演習)
- 第15回 レポートとするテーマの報告と検討
- 第16回 —

〔成績評価〕

試験 (0%)、レポート (70%)、小テスト (0%)、課題提出 (20%)、その他の評価方法 (10%)

〔成績評価 (備考)〕

面接授業の出席100%。ただし、やむを得ず講義に出席できない場合はレポートで代替できるが、代替を認めるのは研修全体のうち3回までとする。やむをえない遅刻は授業開始から30分までとする。30分を過ぎた場合は、欠席とする。遅刻3回で欠席1回までとみなす。30分以上の早退も同様とする。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

予習に関しては、年間のシラバスにあるテーマに関して授業ごとにレポートを分担する。分担したレポートだけでなく、関係文献もしくは自分が関わる実践現場を通して学習しておくこと。復習に関しては、講義で提示する課題を調べておくこと。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

レポート・課題に関しては、完成前の構想もしくは作成段階で報告を義務づけ、コメントを行う。その上で、レポートを完成させる。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする 職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会福祉学分野における広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする 職業を担うための優れた能力を身につけることとなる。

〔テキスト〕

各時間ごとに、レジメ及び担当講師の論文、各種報告書等を配布する

〔参考文献〕

・『福祉職員生涯研修課程「福祉職員研修テキスト」指導編、管理職編』、全国社会福祉協議会、2002年

〔備考〕

同一コマで遅刻と早退がある場合は合計時間を30分以内とする。

- ・最終レポートを提出し合格すること
- ・授業の第4回から第13回におけるワークシート等に記入し、発表することによって、適切かつ説得力のある説明ができるか、また他の受講生の報告について一定の理解と改善提案ができるか、評価する。
- ・受講生は、上記課題に対して学んだこと、及び自組織においてどのような役割を果たすことができるか、振り返りシートに記入する。そのシートに基づき、理解度が評価され知識・表現力について80 点以上を可とする。80 点に達しない場合は再提出を求める、又は個別に面接指導を行う。
- ・第14・15回の「自組織における経営」

国際社会福祉研究

2単位：前期1コマ

1～2年

原島 博

〔到達目標〕

「国際ソーシャルワーク」および「多文化ソーシャルワーク」の歴史、理論、実際から国際社会福祉について研究することを目標とする。

〔履修の条件〕

配布するテキストを事前に読み、授業に参加することを条件とする。

〔講義概要〕

グローバル化社会の進展により、人々の国際移動が活発化すると同時に人間の安全が脅かされる時代にある。ボーダレス社会のなかで、国際レジームを基に人権が保障され、社会正義が促進される必要がある。そこで、多文化社会および国際主義の中における社会課題を理解し、ソーシャルワークの役割を検討する。

■授業計画

- 第1回 授業の概要についてのオリエンテーション
- 第2回 国際ソーシャルワーク1
- 第3回 国際ソーシャルワーク2
- 第4回 国際ソーシャルワーク3
- 第5回 国際ソーシャルワーク4
- 第6回 国際ソーシャルワーク5
- 第7回 国際ソーシャルワーク6
- 第8回 多文化ソーシャルワーク1
- 第9回 多文化ソーシャルワーク2
- 第10回 多文化ソーシャルワーク3
- 第11回 多文化ソーシャルワーク4
- 第12回 多文化ソーシャルワーク5
- 第13回 多文化ソーシャルワーク6
- 第14回 授業のまとめ
- 第15回 —
- 第16回 —

〔成績評価〕

試験 (0%)、レポート (50%)、小テスト (0%)、課題提出 (50%)、その他の評価方法 (0%)

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

本科目では各授業回に200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

授業の中でフィードバックを行う。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会福祉分野における広い学識と、高度な専門知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけることとなる。

〔テキスト〕

適宜資料を配布する。

〔参考文献〕

1. Lynne M. Healy, 'International Social Work', Oxford Press, 2008
2. Doman Lum, 'Culturally Competent Practice - A Framework for understanding diverse groups and justice issues', Brooks/Cole, 2011
3. ジェームズ・ミツリ「国際社会福祉論」中央法規、1999年
4. 西川潤「社会開発」有斐閣選書、1997年
5. 勝俣誠編著「グローバル化と人間の安全保障」日本経済評論社、2003年
6. 初瀬龍平「国際関係のなかの子ども」お茶の水書房、2009年
7. 石河久美子「多文化ソーシャルワークの理論と実践」明石書店、2012年
8. 宇佐美耕一他「2018世界の社会福祉年鑑－国際ソーシャルワークと社会福祉」旬報社、2018年

社会福祉における経営管理研究

2単位：前期1コマ

1～2年

和田 敏明

〔到達目標〕

所属組織の枠組みを踏まえ、相対化し、サービス管理・改善課題を把握し有効な働きかけかたの力量を向上させる

〔履修の条件〕

・面接授業の出席100%。ただし、やむを得ず講義に出席できない場合はレポートで代替できるが、代替を認めるのは研修全体のうち3回までとする。
・やむをえない遅刻は授業開始から30分までとする。30分を過ぎた場合は、欠席とする。遅刻3回で欠席1回までとみなす。30分以上の早退も同様とする。同一コマで遅刻と早退がある場合

は合計時間を30分以内とする。

・最終レポートを提出し合格すること

〔講義概要〕

アドミニストレーション、ヒューマンサービス経営の理論、福祉マネジメントの理論、社会福祉法人、非営利組織の経営、サービス管理について研究し、組織の意思決定、経営の基本的枠組みの理解、サービス管理の方法とその推進する力量を養成することを目的とする

■授業計画

- | | |
|------|--|
| 第1回 | アドミニストレーションの理論
概説と歩み |
| 第2回 | アドミニストレーションの理論
アドミニストレーション 目的と過程
アドミニストレーション概観、 |
| 第3回 | アドミニストレーションの理論
アドミニストレーション 目的と過程
団体の理解、コミュニティの理解 |
| 第4回 | アドミニストレーションの理論
団体運営の技術
団体の指導 コミュニケーションの確立と改善 |
| 第5回 | アドミニストレーションの理論
団体運営の技術
プランニングと調整、理事会、委員会、会員との協働 |
| 第6回 | アドミニストレーションの理論
団体運営の技術
職員との協働 団体運営の有効性 |
| 第7回 | アドミニストレーションの理論
団体運営の技術
幹部研修 団体運営の新たな局面 |
| 第8回 | 非営利組織の経営
使命、使命から組織へ |
| 第9回 | 非営利組織の経営
成果を上げるためのマネジメント、人事と人間関係、自己開発 |
| 第10回 | ヒューマンサービスの経営
ヒューマンサービスの組織、ヒューマンサービスの環境 |
| 第11回 | ヒューマンサービスの経営
ヒューマンサービスの技術、クライアント関係（1）クライアント支配の構造 |
| 第12回 | ヒューマンサービスの経営
クライアント関係（2）協働関係の形成と維持 クライアント関係（3）バーンアウトとストレス対処 |
| 第13回 | 社会福祉法人の経営 社会福祉法人の基本的性格・仕組み、経営環境の変化社会福祉法人の新たな展開 |
| 第14回 | 社会福祉法人の経営 法人の参入退出、法人単位の資金管理、ガバナンスの確立・経営能力の向上、資金調達、人材育成と確保 |
| 第15回 | — |
| 第16回 | — |

〔成績評価〕

試験 (0%)、レポート (50%)、小テスト (0%)、課題提出

(50%)、その他の評価方法 (0%)

〔成績評価 (備考)〕

習得度は、(1) 講義・文献・演習における理解度、(2) 課題提出の内容により判断する。課題提出のレポートにおいてアドミニストレーションの理論概念を説明でき、理論をもとに所属組織の枠組みを踏まえ、相対化し、サービス管理・改善課題を把握地域介入の目標と方法等が説明できるか等で評価する

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

授業ごとに教科書の章を割り当てるので、読み進みレポートを作成する。

自分が経験した事例を発表しまとめること。

発表後、討議や教員の講評、教科書に書かれていることをもとに、事例の考察を深め、まとめること。本科目では各授業回に200分の準備学習 (予習・復習等) を必要とする。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

課題レポートについては授業の際に議論やコメントを行う

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身に付けている」に該当する。この科目を履修することで社会福祉分野における広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身に付けることとなる。

〔テキスト〕

「新しいアドミニストレーション」社会福祉—コミュニティ・サービスのためのH, B, トレッカー 今岡健一郎 監訳 日本YMCA同盟出版部

「非営利組織の経営」P, F, ドラッカー 上田惇生 田代正美 ダイアモンド社

「ヒューマンサービスの組織」医療・保険・福祉における経営管理 田尾雅夫 法律文化社

「ヒューマンサービスの経営」超高齢社会を生き抜くために 田尾雅夫 白桃書房

「社会福祉法人経営の現状と課題」社会福祉法人経営研究会編 全国社会福祉協議会

「改訂社会福祉法の改正のポイント」全国社会福祉協議会

〔参考文献〕

テーマに沿って、適宜文献を提示する

実践評価・実践研究

2単位：後期1コマ

1～2年

山口 麻衣

〔到達目標〕

①自身の実践の経過、判断・行動の根拠、成果と課題について記述し、説明できるようになる。

②自身の実践について適切な研究方法を用いて評価が出来るようにし、評価から得た知見を発表できるようになる。

〔履修の条件〕

ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科社会福祉学専攻在学生で社会福祉士資格を有する者。

〔講義概要〕

自分自身の実践について、実践の評価、判断・行動の根拠、成果と課題等について客観的に記述・言語化し、検証するための方法を学習する。

■授業計画

第1回	オリエンテーション、実践評価、実践研究の意義と方法 各自実践・研究課題提出と意見交換Ⅰ (演習)
第2回	各自実践・研究課題提出と意見交換Ⅱ (演習)
第3回	各自の課題に則した研究方法の検討Ⅰ (演習)
第4回	各自の課題に則した研究方法の検討Ⅱ (演習)
第5回	各自の課題に則した研究方法の検討Ⅱ (演習) 実践の記録と言語化の意義と方法 (講義と演習)
第6回	各自の実践の記録と言語化の試作報告Ⅰ (演習)
第7回	各自の実践の記録と言語化の試作報告Ⅱ (演習)
第8回	実践の評価と検証の意義と方法 (講義と演習)
第9回	各自の実践の評価と検証の試作報告Ⅰ (演習)
第10回	各自の実践の評価と検証の試作報告Ⅱ (演習)
第11回	研究発表Ⅰ (演習)
第12回	研究発表Ⅱ (演習)
第13回	実践報告会での発表1
第14回	実践報告会での発表2
第15回	レポート提出
第16回	—

〔成績評価〕

試験 (0%)、レポート (50%)、小テスト (0%)、課題提出 (0%)、その他の評価方法 (50%)

〔成績評価 (備考)〕

授業へは100%の出席が必須である。

別途提示する認定社会福祉士養成講座の諸条件を完全にクリアすることが条件である。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

授業以外に個別指導を行う。授業と並行して実践を続けていることが前提である。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習 (予習・復習等) を必要とする。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

リアクションペーパーに対するフィードバックを次の講義において行う。課題レポートについては、レポート返却時に個別にコメントを行う。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

ディプロマポリシーの「専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身に付ける」に該当する。この科目を履修することで、自身の実践について適切な研究方法を用いて評価し、評価から得た知見を実践に活かす能力を身に付けることとなる。

〔テキスト〕

特に定めない。

【参考文献】
授業時に適宜紹介する。

演習A（社会福祉の制度と政策）

4単位：通年

1年

市川 一宏、金子 和夫、原島 博、山口 麻衣

【到達目標】
(ねらい)

この演習では、参加者個々人の関心を基本において社会福祉の制度・政策上の問題点について、時間的な変化・発展を縦軸とし、国際比較を横軸として、深くまた広い視野を持った研究を行い、参加者の社会福祉制度、政策についての見識の深化、発展を目指す。

【履修の条件】
なし

【講義概要】
この演習では、上記4人の教員が原則として個別に指導、助言にあたるが、必要に応じて合同ゼミを持つ。

■授業計画

第1回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第2回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第3回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第4回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第5回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第6回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第7回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第8回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第9回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第10回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第11回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマ

マに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第12回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第13回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第14回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第15回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第16回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第17回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第18回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第19回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第20回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第21回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第22回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第23回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第24回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第25回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第26回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第27回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第28回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第29回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

第30回 ―
第31回 ―
第32回 ―

〔成績評価〕

試験 (0%)、レポート (70%)、小テスト (0%)、課題提出 (0%)、その他の評価方法 (30%)

〔成績評価（備考）〕

レポートは各自十分な準備をして行うこと。メンバーはレポートに対し活発な検討ができる準備をすること

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

院生の修士論文指導として行うものであり、ゼミでの指導のもとに、院生は修士論文指導担当教員から個別指導を受け、課題の達成に努める。自己学習⇒修士論文指導担当教員からの指導⇒自己学習⇒ゼミでの発表と教員からのコメント⇒修士論文指導担当教員からの指導⇒自己学習という学習サイクルに位置づけられる。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

報告の際にレジュメを提出し、コメントを受ける。さらに上記学習サイクルに基づき、院生は学習を進める。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする 職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会福祉学分野における広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする 職業を担うための優れた能力を身につけることとなる。

〔テキスト〕

必要に応じて随時示す。

〔参考文献〕

必要に応じて随時示す。

〔備考〕

特になし

演習A II（社会福祉の制度と政策）

4単位：通年	2年
市川 一宏、金子 和夫、原島 博、山口 麻衣	

〔到達目標〕

(ねらい)

この演習では、参加者個々人の関心を基本において社会福祉の制度・政策上の問題点について、時間的な変化・発展を縦軸とし、国際比較を横軸として、深くまた広い視野を持った研究を行い、参加者の社会福祉制度、政策についての見識の深化、発展を目指す。

〔履修の条件〕

なし

〔講義概要〕

この演習では、上記4人の教員が原則として個別に指導、助言にあたるが、必要に応じて合同ゼミを持つ。

■授業計画

第1回	順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第2回	順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第3回	順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第4回	順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第5回	順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第6回	順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第7回	順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第8回	順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第9回	順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第10回	順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第11回	順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第12回	順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第13回	順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第14回	順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第15回	順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
第16回	順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める

- 第17回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
- 第18回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
- 第19回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
- 第20回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
- 第21回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
- 第22回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
- 第23回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
- 第24回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
- 第25回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
- 第26回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
- 第27回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
- 第28回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
- 第29回 順番（各回1名程度）に院生が各自の修士論文テーマに基づく研究発表を行い、評価研究を行い研究を深める
- 第30回 —
- 第31回 —
- 第32回 —

〔成績評価〕

試験 (0%)、レポート (70%)、小テスト (0%)、課題提出 (0%)、その他の評価方法 (30%)

〔成績評価（備考）〕

レポートは各自十分な準備をして行うこと。メンバーはレポートに対し活発な検討ができる準備をすること

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

院生の修士論文指導として行うものであり、ゼミでの指導のもとに、院生は修士論文指導担当教員から個別指導を受け、課題の達成に努める。自己学習⇒修士論文指導担当教員からの指導⇒自己学習⇒ゼミでの発表と教員からのコメント⇒修士論文

文指導担当教員からの指導⇒自己学習という学習サイクルに位置づけられる。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

報告の際にレジュメを提出し、コメントを受ける。さらに上記学習サイクルに基づき、院生は学習を進める。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする 職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会福祉学分野における広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする 職業を担うための優れた能力を身につけることとなる。

〔テキスト〕

必要に応じて随時示す。

〔参考文献〕

必要に応じて随時示す。

〔備考〕

特になし

演習B（社会福祉方法と技法）

4単位：通年	1年
福島 喜代子、高山 由美子	

〔到達目標〕

ソーシャルワーク研究について、基本的な姿勢を身につける。自らのテーマに関する先行研究をまとめる力を身につける。自らのテーマに関する調査研究を遂行する力をつける。自らのテーマに関する調査結果について、分析し、考察を深める力をつける。ソーシャルワーカーとしての実践力をつける。

〔履修の条件〕

ソーシャルワークに関する研究テーマを有する者であれば履修できる。特に、ソーシャルワーク、権利擁護、社会的弱者（障害者、母子、子ども、高齢者等）やその家族の支援、ソーシャルワーク専門職等に関するテーマであればなおよい。

〔講義概要〕

発表や討議を通して、ソーシャルワーク研究をすすめ、ソーシャルワーク研究の理論や実践の理解を深める。特に論文執筆に向けて、討論や指導を行う。

■授業計画

- 第1回 ソーシャルワークと社会科学
- 第2回 研究の背景と意義
- 第3回 先行研究のまとめⅠ（対象者）
- 第4回 先行研究のまとめⅡ（対象者）
- 第5回 先行研究のまとめⅢ（制度・政策）
- 第6回 先行研究のまとめⅢ（制度・政策）
- 第7回 先行研究のまとめⅣ（ソーシャルワーク）

- 第8回 先行研究のまとめⅣ（ソーシャルワーク）
 第9回 概念 概念整理 Ⅰ
 第10回 概念 概念整理 Ⅱ
 第11回 研究の目的
 第12回 リサーチクエスションや仮説
 第13回 調査の計画Ⅰ 対象 サンプリング
 第14回 調査の計画Ⅱ 方法
 第15回 調査の計画Ⅲ 質問 質問紙 尺度
 第16回 調査の計画Ⅳ 分析方法
 第17回 調査の計画Ⅴ 倫理審査 倫理的配慮
 第18回 調査結果と分析Ⅰ（量的調査）
 第19回 調査結果と分析Ⅱ（量的調査）
 第20回 調査結果と分析Ⅲ（質的調査）
 第21回 調査結果と分析Ⅳ（質的調査）
 第22回 考察Ⅰ（調査結果についての分析、考察、解説）
 第23回 考察Ⅱ（先行研究との比較）
 第24回 考察Ⅲ（先行研究との比較）
 第25回 考察Ⅳ（調査の限界と課題）
 第26回 考察Ⅴ（ソーシャルワークへの示唆）
 第27回 考察Ⅵ（ソーシャルワークへの示唆）
 第28回 研究推進の評価
 第29回 —
 第30回 —
 第31回 —
 第32回 —

〔成績評価〕

試験（0%）、レポート（70%）、小テスト（0%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（30%）

〔成績評価（備考）〕

レポートは各自十分な準備をすること。メンバーはレポートをもとにした発表に対して、活発な検討ができるよう準備すること。長期休みの前後に進捗状況についての短いレポートの提出も求めるので、必ず提出すること。修士論文執筆に向けて、主体的に研究をすすめ、指導教員に指導を求め、すすめていくこと。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

本科目では各授業回あたりおよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。本授業は、院生の修士論文指導を中心に行う。院生は修士論文指導担当教員から個別指導と、ゼミでの指導を受け、課題の達成に努める。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

ゼミでの発表の後にレポート（レジュメ）を提出し、それに対してコメントをする。また、個別指導の際にも、用意したレポート（レジュメ）等に対して、個別にコメントを行う。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

ディプロマポリシーの「研究者として自立して活動し、あるいは指導的な高度の専門業務に従事するために必要な能力や知識を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会福祉学分野における研究者として自立して活動し、あるいは指導的な高度の専門業務に従事するための能力と知識がつくことになる。

〔テキスト〕

必要に応じて随時示していく。

〔参考文献〕

必要に応じて随時示していく。

演習BⅡ（社会福祉方法と技法）

4単位：通年

2年

福島 喜代子、高山 由美子

〔到達目標〕

ソーシャルワーク研究について、基本的な姿勢を身につける。自らのテーマに関する先行研究をまとめる力を身につける。自らのテーマに関する調査研究を遂行する力をつける。自らのテーマに関する調査結果について、分析し、考察を深める力をつける。ソーシャルワーカーとしての実践力をつける。

〔履修の条件〕

ソーシャルワークに関する研究テーマを有する者であれば履修できる。特に、ソーシャルワーク、権利擁護、社会的弱者（障害者、母子、子ども、高齢者等）やその家族の支援、ソーシャルワーク専門職等に関するテーマであればなおよい。

〔講義概要〕

発表や討議を通して、ソーシャルワーク研究をすすめ、ソーシャルワーク研究の理論や実践の理解を深める。特に論文執筆に向けて、討論や指導を行う。

■授業計画

- 第1回 ソーシャルワークと社会科学
 第2回 研究の背景と意義
 第3回 先行研究のまとめⅠ（対象者）
 第4回 先行研究のまとめⅡ（対象者）
 第5回 先行研究のまとめⅢ（制度・政策）
 第6回 先行研究のまとめⅣ（制度・政策）
 第7回 先行研究のまとめⅤ（ソーシャルワーク）
 第8回 先行研究のまとめⅥ（ソーシャルワーク）
 第9回 概念 概念整理 Ⅰ
 第10回 概念 概念整理 Ⅱ
 第11回 研究の目的
 第12回 リサーチクエスションや仮説
 第13回 調査の計画Ⅰ 対象 サンプリング
 第14回 調査の計画Ⅱ 方法
 第15回 調査の計画Ⅲ 質問 質問紙 尺度
 第16回 調査の計画Ⅳ 分析方法
 第17回 調査の計画Ⅴ 倫理審査 倫理的配慮
 第18回 調査結果と分析Ⅰ（量的調査）
 第19回 調査結果と分析Ⅱ（量的調査）
 第20回 調査結果と分析Ⅲ（質的調査）
 第21回 調査結果と分析Ⅳ（質的調査）
 第22回 考察Ⅰ（調査結果についての分析、考察、解説）
 第23回 考察Ⅱ（先行研究との比較）
 第24回 考察Ⅲ（先行研究との比較）
 第25回 考察Ⅳ（調査の限界と課題）

- 第26回 考察Ⅴ（ソーシャルワークへの示唆）
 第27回 考察Ⅵ（ソーシャルワークへの示唆）
 第28回 研究推進の評価
 第29回 —
 第30回 —
 第31回 —
 第32回 —

〔成績評価〕

試験（0%）、レポート（70%）、小テスト（0%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（30%）

〔成績評価（備考）〕

レポートは各自十分な準備をすること。メンバーはレポートをもとにした発表に対して、活発な検討ができるよう準備すること。長期休みの前後に進捗状況についての短いレポートの提出も求めるので、必ず提出すること。修士論文執筆に向けて、主体的に研究をすすめ、指導教員に指導を求め、すすめていくこと。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

本科目では各授業回あたりおよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。本授業は、院生の修士論文指導を中心に行う。院生は修士論文指導担当教員から個別指導と、ゼミでの指導を受け、課題の達成に努める。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

ゼミでの発表の後にレポート（レジュメ）を提出し、それに対してコメントをする。また、個別指導の際にも、用意したレポート（レジュメ）等に対して、個別にコメントを行う。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

ディプロマポリシーの「研究者として自立して活動し、あるいは指導的な高度の専門業務に従事するために必要な能力や知識を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会福祉学分野における研究者として自立して活動し、あるいは指導的な高度の専門業務に従事できるための能力と知識がつくことになる。

〔テキスト〕

必要に応じて随時示していく。

〔参考文献〕

必要に応じて随時示していく。

実習	
3単位：前期1コマ	1～2年
高山 由美子	

〔到達目標〕

1. 各自の研究テーマや実践課題との関わりで実習先を選択し、大学院生として実習に取り組む意味を考える。
2. 実践現場や教育の場で実習指導を担当する場合も想定して実習を行う。

〔履修の条件〕

実習は選択科目であるが、大学院ならではの実習体験ができるので、積極的な履修をすすめる。本科目を履修する場合は、修士論文等の執筆との関係もあるので、できるだけ1年次に実習を終えることが望ましい。

前期の授業と、各自の実習先確定までは実習主任が担当する。

〔講義概要〕

履修学生は1年の前期に行われる実習準備のための授業に出席しなければならない。この授業では、高度の専門性を備えたソーシャルワーカーとして、必要な知識・技術・職業倫理・支援態度等々を再確認し、さらにその資質の向上を目指して、講義・討議・事例検討等々を行う。実習時の指導教員は実習先や実習内容によって決められる。

■授業計画

- | | |
|------|---|
| 第1回 | オリエンテーション/社会福祉教育と実習の意義、実習先希望調書の配布 |
| 第2回 | 実習報告会（前年度に実習を修了した院生の実習報告を聴く） |
| 第3回 | 個別相談1（実習希望調書をもとに実習先確定へ向けての個別相談） |
| 第4回 | 本学での実習のプロセス
提出書類（実習計画書、身上書、評価表等）について |
| 第5回 | 実習とスーパービジョン
スーパーバイザーとスーパーバイザー |
| 第6回 | 実習目標の設定と実習計画の立て方 |
| 第7回 | ソーシャルワーカーとしての支援姿勢と職業倫理 |
| 第8回 | 個別相談2（実習先確定へ向けての個別相談） |
| 第9回 | 米国の大学院での社会福祉実習教育 |
| 第10回 | 実習生と実習先や利用者との関係構築の理解 |
| 第11回 | 実習における記録の意義 |
| 第12回 | 模擬記録の発表と意見交換 |
| 第13回 | 実習計画と身上書の作成 |
| 第14回 | 実習計画の発表 |
| 第15回 | — |
| 第16回 | — |

〔成績評価〕

試験（0%）、レポート（0%）、小テスト（0%）、課題提出（50%）、その他の評価方法（50%）

〔成績評価（備考）〕

授業時の討議や発表による貢献度、実習先でのおおよそ10日間（80時間）の実習と日々の実習記録の提出、さらに実習報告会での実習報告により総合的に評価する。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

実習前の準備として、実習分野について情報収集すること。また、授業時に与えられる課題に取り組んだ上で、次の授業に出席することを求める。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

授業時の発表等に対してフィードバックを行う。リアクションペーパーに対するフィードバックは、必要に応じて次回以降の授業時

に行う。さらに実習記録については指導担当教員がフィードバックを行う。

【ディプロマポリシーとの関連性】

ディプロマポリシーの「高度な専門的知識や技術を備える」「専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につける」に該当する。この科目を履修することにより、ソーシャルワーク専門職として高度な専門知識と技術を備え、専門職としての優れた能力を身につけることとなる。

【テキスト】

各授業時に必要な資料を配付する。

【参考文献】

実習報告会での報告資料等を参考にする。

【備考】

成績評価の「課題」とは、毎回の授業時に提示される課題や必要資料の作成である。これらを全て提出することによって、実習を行うことができる。実習報告会への出席及び、実習報告会において報告を行うことを求める。

日本語論文の書き方(留学生対象)

2単位：通年	1～2年
ドイツ 綾子	

【到達目標】

- ①日本語の学術的文章作成に必要な技能、知識を習得する。
- ②自分や他者の文章を批判的に読む力をつける。

【履修の条件】

これから修士論文や博士論文を執筆する予定であること。

【講義概要】

本授業では、日本語で学術的文章を書く上で必要な技能を、講義と演習によって身につけていきます。毎週、授業で扱う技能を使って小論文を書く課題が出されます。対面授業の場合には、翌週の授業において、課題文章を他の受講生と検討し合います。遠隔授業になった場合には、講師が提出された文章に対してコメントを入れ、返却します。

対面授業であれ遠隔授業であれ、「書く」課題と授業への積極的な取り組みを期待します。

■授業計画

第1回	ガイダンス 講義の進め方、授業で使用するテキストや参考文献の紹介 学術的文章とは何か
第2回	学術的文章にふさわしい日本語-講義-
第3回	学術的文章にふさわしい日本語-文章検討-
第4回	一文一義で書く-講義-
第5回	一文一義で書く-文章検討-
第6回	文と文の関係を明示する-講義-
第7回	文と文の関係を明示する-文章検討-
第8回	明確な語句を使う-講義-

第9回	明確な語句を使う-文章検討-
第10回	「マップ」を使って書く-講義-
第11回	「マップ」を使って書く-文章検討-
第12回	全体を構成する-講義-
第13回	全体を構成する-文章検討-
第14回	全体を構成する-文章検討-
第15回	論点を整理して書く-講義-
第16回	論点を整理して書く-文章検討-
第17回	数え上げて書く-講義-
第18回	数え上げて書く-文章検討-
第19回	パラグラフを作る-講義-
第20回	パラグラフを作る-文章検討-
第21回	抽象度を調節する-講義-
第22回	抽象度を調節する-文章検討-
第23回	参考文献を示す-講義-
第24回	参考文献を示す-参考文献リスト検討-
第25回	ブロック引用をする-講義-
第26回	ブロック引用をする-文章検討-
第27回	要約引用をする-講義-
第28回	要約引用をする-文章検討-
第29回	—
第30回	—
第31回	—
第32回	—

【成績評価】

試験 (0%)、レポート (0%)、小テスト (0%)、課題提出 (100%)、その他の評価方法 (0%)

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

テキストの指定箇所を読む。

毎週習った技能を意識し、文章を作成する。

本科目では各授業回に約50分の準備学習を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

対面授業の場合→対話によって文章を検討しながら行う。

遠隔授業の場合→講師が文章にコメントを入れ、返却する。

【ディプロマポリシーとの関連性】

4. 他者理解と自己表現のためのコミュニケーション能力に該当する。

学術的文章の書き方を学ぶことを通して、自己の考えを深化し、その考えを他者に端的に伝えることができる能力の獲得を目指す。

【テキスト】

佐渡島紗織・吉野亜矢子 (2008) 『これから研究を書くひとのためのガイドブック-ライティングの挑戦15週間』 ひつじ書房 2160円

【参考文献】

浜田麻里・平尾得子・由井紀久子 (1997) 『大学生と留学生のための論文ワークブック』 ころしお出版 2700円

博士後期課程

履修要項／授業科目表／研究指導概要／
講義内容

〈別表1〉

2018年度以前入学者博士後期課程授業科目表

授 業 科 目	研 究 領 域	担当教員(五十音順)
社会福祉学特殊研究		市川 一宏 金子 和夫 福島 喜代子 山口 麻衣 高山 由美子 原島 博 石居 基夫

博士後期課程研究指導概要

授 業 科 目 名	研 究 指 導 概 要
社会福祉学特殊研究	市川 一宏 今日の高齢者福祉政策を、1. サービス供給システム(サービス提供主体の多元化、ガバナンスという公民協働システム、セーフティネット)、2. 権利保障システム(地域福祉権利擁護、成年後見、苦情対応、情報公開とプライバシー保護)、3. 関連領域を含む総合的生活保障(保健医療福祉、教育、雇用、住宅等)、4. 日常生活圏域におけるフォーマル・インフォーマルケアシステム(住民参加による福祉コミュニティづくり)、5. サービスの専門性と専門職制、専門教育、6. 国際比較等の視点から検討する。 各自は、指導の下に、課題を設定し、それぞれが継続的な文献研究を軸に、理論的な研究を進める。 金子 和夫 わが国の少子高齢化社会の急速な進展の中で、社会保障・社会福祉制度・政策の創設、改正も著しい変化がみられる。とりわけ、契約制度への転換において、利用者の権利擁護のみならず、福祉従事者の労働条件、雇用環境など、外国人を含めた労働者の権利擁護の研究も、福祉サービスの量的・質的向上を図る上で重要な課題となる。 本研究系においては、こうした内容を心に、広く社会保障・社会福祉法制度・政策に関する知識の習得、研究発表、論文執筆についての指導を行う。 福島 喜代子 わが国では、社会福祉の現場で、制度・政策の充実が進む一方、少子高齢社会、人口減少傾向の折り、財政面での制約もあり、サービスを効果的、効率的に提供する必要がありますがますます高まってきている。 このような中、ソーシャルワーク専門職の理論や方法のさらなる発展が求められ、社会福祉現場での相談援助の理論や方法についての研究に対するニーズも高まってきている。また、近年、根拠に基づくプログラムの提供や実践の必要性の認識が高まってきており、高度な質的・量的な研究が求められている。 そこで、この研究系では、ソーシャルワーク、専門職スキル、精神保健福祉、権利擁護、家族支援などをキーワードとする研究について研究指導を行う。 山口 麻衣 人口減少・少子高齢化社会の我が国におけるケアに関する課題は生活支援における実践課題でもあり、政策課題でもある。フォーマルなケアとインフォーマルなケアがどのように関連しつつ、地域において包括的なケアを作り上げることができるのだろうか。専門職としてのソーシャルワーカーの役割は何か。この研究系では、高齢者福祉研究やケア研究に関するテーマを中心に、社会福祉調査研究法についても体系的に学びを深め、各自のテーマで実証研究論文が執筆できるよう研究指導を行う。 高山 由美子 ノーマライゼーションの理念が障がい福祉のみならず、社会福祉の営みを支える重要な理念として認識される中、地域共生社会の実現を目指した様々な施策や支援のあり方が模索されている。しかし、誰もがその人らしい暮らしを築く権利があるとされながら、その権利の実現が難しい状況におかれている人々の存在がある。 人々が直面する生活上の課題は多様であるが、その解決においてはより一層、ソーシャルという視点が不可欠であることが認識されつつある。そして、地域社会における権利擁護という視点を前提として、社会福祉専門職はどのようにソーシャルワークに取り組むのかといった研究の必要性が高まっている。障がい福祉、地域包括ケア、利用者支援の仕組み、社会福祉専門職支援等の視点から研究指導を行う。 原島 博 グローバル化の流れの中で、国際的相互関係が進展し、経済格差による貧困をはじめとする社会問題から人々の移動による生活課題が増加している。国際主義の立場から国際条約、人間の安全保障論から SDGs にかかわり、国際福祉および国際的脈絡の中で生じている国内福祉に焦点をあて、国際協力、社会政策、社会福祉制度・サービスの在り方を検討する。 この研究系では、社会開発、国際協力、国際ソーシャルワーク、多文化ソーシャルワークなどをキーワードとする研究について研究指導を行う。 石居 基夫 地域包括ケアシステムの実現が目指される中、単に高齢者福祉の分野のみならず、福祉の様々な分野において生活者(対象者およびその家族も含め)の全人的ケアのニーズが広く知られてくることとなる。それに関連して、処遇・対人援助の現場における人のいのちと尊厳を守ること、またスピリチュアルな領域の持つ意味をあらためて問い直す必要も生じてきていると考えられる。 この研究系についての研究指導は、主として社会福祉におけるスピリチュアル・ウェルビーイング、ならびにいのち学、生命倫理について行う。

〈別表2〉

2019年度以降入学者 博士後期課程授業科目表

分野	授 業 科 目	配当 年次	単 位 数			開講 状況	担当教員
			必修	選択	自由		
専門 研究 指導 科目	社会福祉学専門研究指導Ⅰ	1	2			通年	市川、金子、福島、山口、 高山、原島、石居
	社会福祉学専門研究指導Ⅱ	2	2			通年	市川、金子、福島、山口、 高山、原島、石居
	社会福祉学専門研究指導Ⅲ	3	2			通年	市川、金子、福島、山口、 高山、原島、石居
演 習 科 研 目 究	社会福祉学専門研究演習Ⅰ	1	2			通年	市川、金子、福島、山口、 高山、原島、石居
	社会福祉学専門研究演習Ⅱ	2	2			通年	市川、金子、福島、山口、 高山、原島、石居
科 選 目 自 由	社会福祉学学生指導法(プレFD)	1・2・3			1	通年	市川、金子、福島、山口、 高山、原島
科 課 目 程 共 通	社会福祉調査法Ⅰ	1・2		2		通年	山口 麻衣
	社会福祉調査法Ⅱ	1・2		2		通年	浅野 貴博

図 博士後期課程 スケジュール

1年前期		
↓	4月	指導教員登録
	5月	第1次研究計画書提出
1年後期		
↓	10月	第2次研究計画書提出
	3月	年度末レポート提出
2年前期		
↓	4月	最終研究計画書提出
2年後期		
↓	10月	博士論文中間発表
	1月	博士論文提出資格試験申し込み
	2月	博士論文提出資格試験
	2-3月	博士論文提出資格試験合格発表
	3月	年度末レポート提出
3年前期		
↓	5月	博士論文提出
	9月	博士論文学内審査
3年後期		
↓	12-3月	博士論文口述試験
	12-3月	博士論文審査
	3月	修了(学位授与)
		〈後期提出の場合〉
	10月	博士論文提出(後期提出)
	1月	博士論文学内審査(後期提出の場合)
	4-7月	博士論文口述試験(後期提出の場合)
	4-7月	博士論文審査(後期提出の場合)
	9月	修了(学位授与)

*コースワークとリサーチワークにより指導

社会福祉学専門研究指導Ⅰ

2単位：通年

1年

市川 一宏、金子 和夫、福島 喜代子、山口 麻衣、
高山 由美子、原島 博、石居 基夫

〔到達目標〕

社会福祉学分野における研究者として自立して研究活動を実施し、また、指導的な高度の専門業務に従事できるようになる。

〔履修の条件〕

ソーシャルワークの領域における研究に関心があり、社会科学的手法による研究を、自立した研究者として、自ら計画、推進し、主査や副査の指導を受けて完成させていきたいという姿勢を有する者。

〔講義概要〕

ソーシャルワークの領域における研究について、研究テーマに基づき、網羅的に、関係する概念と先行研究をまとめ、リサーチクエスチョンや仮説をたて、調査の計画をたて、推進し、結果を分析し、考察していく。その過程において、指導を受ける。

■授業計画

第1回	ソーシャルワークと社会科学、研究の背景と意義
第2回	網羅的な先行研究のまとめⅠ（対象者）
第3回	網羅的な先行研究のまとめⅡ（制度・政策）
第4回	網羅的な先行研究のまとめⅢ（ソーシャルワーク）
第5回	概念 概念整理
第6回	研究の目的、リサーチクエスチョンや仮説
第7回	調査の計画Ⅰ 方法、対象 サンプリング、倫理的配慮
第8回	調査の計画Ⅱ 質問 質問紙 尺度
第9回	調査の計画Ⅲ 分析方法
第10回	調査結果と分析Ⅰ（量的調査）
第11回	調査結果と分析Ⅱ（質的調査）
第12回	考察（調査結果についての分析、考察、解説）
第13回	考察（先行研究との比較、調査の限界と課題）
第14回	考察（ソーシャルワークへの示唆）
第15回	—
第16回	—
第17回	—
第18回	—
第19回	—
第20回	—
第21回	—
第22回	—
第23回	—
第24回	—
第25回	—
第26回	—
第27回	—
第28回	—
第29回	—
第30回	—
第31回	—
第32回	—

〔成績評価〕

試験（0%）、レポート（0%）、小テスト（0%）、課題提出（50%）、その他の評価方法（50%）

〔成績評価（備考）〕

自立した研究者として、自ら計画、推進し、指導を受けていく姿勢と、博士論文に向けての執筆状況、研究の推進状況を評価する。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

本科目では各授業回あたりおよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。自立した研究者として、研究テーマに基づき、網羅的に、関係する概念と先行研究をまとめ、リサーチクエスチョンや仮説をたて、調査の計画をたて、推進し、結果を分析し、考察していく。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

個別指導の内容をもとに、博士論文を仕上げていく。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

ディプロマポリシーの「研究者として自立して活動し、あるいは指導的な高度の専門業務に従事するために必要な能力や知識を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会福祉学分野における研究者として自立して活動し、あるいは指導的な高度の専門業務に従事できるための能力と知識がつくことになる。

〔テキスト〕

適宜紹介をしていく。

〔参考文献〕

適宜紹介をしていく。

社会福祉学専門研究指導Ⅱ

2単位：通年

2年

市川 一宏、金子 和夫、福島 喜代子、山口 麻衣、
高山 由美子、原島 博、石居 基夫

〔到達目標〕

社会福祉学分野における研究者として自立して研究活動を実施し、また、指導的な高度の専門業務に従事できるようになる。

〔履修の条件〕

ソーシャルワークの領域における研究に関心があり、社会科学的手法による研究を、自立した研究者として、自ら計画、推進し、主査や副査の指導を受けて完成させていきたいという姿勢を有する者。

〔講義概要〕

ソーシャルワークの領域における研究について、研究テーマに基づき、網羅的に、関係する概念と先行研究をまとめ、リサーチクエスチョンや仮説をたて、調査の計画をたて、推進し、結果を分析し、考察していく。その過程において、指導を受ける。

■授業計画

第1回	ソーシャルワークと社会科学、研究の背景と意義
第2回	網羅的な先行研究のまとめⅠ（対象者）
第3回	網羅的な先行研究のまとめⅡ（制度・政策）
第4回	網羅的な先行研究のまとめⅢ（ソーシャルワーク）
第5回	概念 概念整理
第6回	研究の目的、リサーチエスチョンや仮説
第7回	調査の計画Ⅰ 方法、対象 サンプルング、倫理的配慮
第8回	調査の計画Ⅱ 質問 質問紙 尺度
第9回	調査の計画Ⅲ 分析方法
第10回	調査結果と分析Ⅰ（量的調査）
第11回	調査結果と分析Ⅱ（質的調査）
第12回	考察（調査結果についての分析、考察、解説）
第13回	考察（先行研究との比較、調査の限界と課題）
第14回	考察（ソーシャルワークへの示唆）
第15回	—
第16回	—
第17回	—
第18回	—
第19回	—
第20回	—
第21回	—
第22回	—
第23回	—
第24回	—
第25回	—
第26回	—
第27回	—
第28回	—
第29回	—
第30回	—
第31回	—
第32回	—

〔成績評価〕

試験（0%）、レポート（0%）、小テスト（0%）、課題提出（50%）、その他の評価方法（50%）

〔成績評価（備考）〕

自立した研究者として、自ら計画、推進し、指導を受けていく姿勢と、博士論文に向けての執筆状況、研究の推進状況を評価する。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

本科目では各授業回あたりおよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。自立した研究者として、研究テーマに基づき、網羅的に、関係する概念と先行研究をまとめ、リサーチエスチョンや仮説をたて、調査の計画をたて、推進し、結果を分析し、考察していく。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

個別指導の内容をもとに、博士論文を仕上げていく。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

ディプロマポリシーの「研究者として自立して活動し、あるいは

指導的な高度の専門業務に従事するために必要な能力や知識を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会福祉学分野における研究者として自立して活動し、あるいは指導的な高度の専門業務に従事できるための能力と知識がつくことになる。

〔テキスト〕

適宜紹介をしていく。

〔参考文献〕

適宜紹介をしていく。

社会福祉学専門研究指導Ⅲ

2単位：通年

3年

市川 一宏、金子 和夫、福島 喜代子、山口 麻衣、高山 由美子、原島 博、石居 基夫

〔到達目標〕

社会福祉学分野における研究者として自立して研究活動を実施し、また、指導的な高度の専門業務に従事できるようになる。

〔履修の条件〕

ソーシャルワークの領域における研究に関心があり、社会科学的手法による研究を、自立した研究者として、自ら計画、推進し、主査や副査の指導を受けて完成させていきたいという姿勢を有する者。

〔講義概要〕

ソーシャルワークの領域における研究について、研究テーマに基づき、網羅的に、関係する概念と先行研究をまとめ、リサーチエスチョンや仮説をたて、調査の計画をたて、推進し、結果を分析し、考察していく。その過程において、指導を受ける。

■授業計画

第1回	ソーシャルワークと社会科学、研究の背景と意義
第2回	網羅的な先行研究のまとめⅠ（対象者）
第3回	網羅的な先行研究のまとめⅡ（制度・政策）
第4回	網羅的な先行研究のまとめⅢ（ソーシャルワーク）
第5回	概念 概念整理
第6回	研究の目的、リサーチエスチョンや仮説
第7回	調査の計画Ⅰ 方法、対象 サンプルング、倫理的配慮
第8回	調査の計画Ⅱ 質問 質問紙 尺度
第9回	調査の計画Ⅲ 分析方法
第10回	調査結果と分析Ⅰ（量的調査）
第11回	調査結果と分析Ⅱ（質的調査）
第12回	考察（調査結果についての分析、考察、解説）
第13回	考察（先行研究との比較、調査の限界と課題）
第14回	考察（ソーシャルワークへの示唆）
第15回	—
第16回	—
第17回	—
第18回	—
第19回	—

- 第20回 —
- 第21回 —
- 第22回 —
- 第23回 —
- 第24回 —
- 第25回 —
- 第26回 —
- 第27回 —
- 第28回 —
- 第29回 —
- 第30回 —
- 第31回 —
- 第32回 —

【成績評価】

試験 (0%)、レポート (0%)、小テスト (0%)、課題提出 (50%)、その他の評価方法 (50%)

【成績評価（備考）】

自立した研究者として、自ら計画、推進し、指導を受けていく姿勢と、博士論文に向けての執筆状況、研究の推進状況を評価する。

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

本科目では各授業回あたりおよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。自立した研究者として、研究テーマに基づき、網羅的に、関係する概念と先行研究をまとめ、リサーチクエスチョンや仮説をたて、調査の計画をたて、推進し、結果を分析し、考察していく。

【試験・レポート等のフィードバック】

個別指導の内容をもとに、博士論文を仕上げていく。

【ディプロマポリシーとの関連性】

ディプロマポリシーの「研究者として自立して活動し、あるいは指導的な高度の専門業務に従事するために必要な能力や知識を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会福祉学分野における研究者として自立して活動し、あるいは指導的な高度の専門業務に従事できるための能力と知識がつくことになる。

【テキスト】

適宜紹介をしていく。

【参考文献】

適宜紹介をしていく。

務に従事するために必要な能力や知識を身につける。社会福祉学分野における研究者として自立して研究活動を実施し、また、指導的な高度の専門業務に従事できるようになる。

【履修の条件】

ソーシャルワークの領域における研究に関心があり、社会科学的手法による研究を、自立した研究者として、自ら計画、推進し、指導を受けて完成させていきたいという姿勢を有する者。前期・後期にそれぞれ1度は発表を行うこととする。また、授業に参加し、他の者の研究の発表を聴き、討議に参加し、その理解と考察を深める必要がある。

【講義概要】

ソーシャルワークの領域における研究について、研究テーマに基づき、網羅的に、関係する概念と先行研究をまとめ、リサーチクエスチョンや仮説をたて、調査の計画をたて、推進し、結果を分析し、考察していく。その過程において発表する。また、授業に参加し、他の者の研究の発表を聴き、討議に参加し、その理解と考察を深める必要がある。

■授業計画

- 第1回 ソーシャルワークと社会科学
- 第2回 先行研究のまとめ1（対象者）
- 第3回 先行研究のまとめ2（制度・政策、あるいは概念）
- 第4回 先行研究のまとめ3（ソーシャルワーク実践）
- 第5回 研究の計画（量的調査）
- 第6回 研究の計画（質的調査）
- 第7回 調査設計 【調査対象 質問項目 質問紙 研究倫理】
- 第8回 リサーチクエスチョンや仮説
- 第9回 調査の分析方法（量的調査）（質的調査）
- 第10回 調査の結果（量的調査）
- 第11回 調査の結果（質的調査）
- 第12回 考察 調査結果の分析、解析、解説
- 第13回 考察 先行研究との比較
- 第14回 考察 研究の限界と課題 ソーシャルワークへの示唆
- 第15回 —
- 第16回 —
- 第17回 —
- 第18回 —
- 第19回 —
- 第20回 —
- 第21回 —
- 第22回 —
- 第23回 —
- 第24回 —
- 第25回 —
- 第26回 —
- 第27回 —
- 第28回 —
- 第29回 —
- 第30回 —
- 第31回 —
- 第32回 —

社会福祉学専門研究演習Ⅰ

2単位：通年

1年

市川 一宏、金子 和夫、福島 喜代子、山口 麻衣、
高山 由美子、原島 博、石居 基夫

【到達目標】

研究者として自立して活動し、あるいは指導的な高度の専門業

〔成績評価〕

試験 (0%)、レポート (0%)、小テスト (0%)、課題提出 (50%)、その他の評価方法 (50%)

〔成績評価 (備考)〕

発表と、討議への参加による授業への貢献度を評価する。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

本科目では各授業回あたりおよそ200分の準備学習 (予習・復習等) を必要とする。自立した研究者として、研究テーマに基づき、網羅的に、関係する概念と先行研究をまとめ、リサーチクエスチョンや仮説をたて、調査の計画をたて、推進し、結果を分析し、考察していく。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

発表時の資料について、発表の事前事後にコメントを行う。授業時のコメントと、個別指導の内容をもとに、博士論文を仕上げていく。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

ディプロマポリシーの「研究者として自立して活動し、あるいは指導的な高度の専門業務に従事するために必要な能力や知識を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会福祉学分野における研究者として自立して活動し、あるいは指導的な高度の専門業務に従事できるための能力と知識がつくことになる。

〔テキスト〕

適宜紹介をしていく。

〔参考文献〕

適宜紹介をしていく。

社会福祉学専門研究演習Ⅱ

2単位：通年

2年

市川 一宏、金子 和夫、福島 喜代子、山口 麻衣、
高山 由美子、原島 博、石居 基夫

〔到達目標〕

研究者として自立して活動し、あるいは指導的な高度の専門業務に従事するために必要な能力や知識を身につける。社会福祉学分野における研究者として自立して研究活動を実施し、また、指導的な高度の専門業務に従事できるようになる。

〔履修の条件〕

ソーシャルワークの領域における研究に関心があり、社会科学的手法による研究を、自立した研究者として、自ら計画、推進し、指導を受けて完成させていきたいという姿勢を有する者。前期・後期にそれぞれ1度は発表を行うこととする。また、授業に参加し、他の者の研究の発表を聴き、討議に参加し、その理解と考察を深める必要がある。

〔講義概要〕

ソーシャルワークの領域における研究について、研究テーマに

基づき、網羅的に、関係する概念と先行研究をまとめ、リサーチクエスチョンや仮説をたて、調査の計画をたて、推進し、結果を分析し、考察していく。その過程において発表する。また、授業に参加し、他の者の研究の発表を聴き、討議に参加し、その理解と考察を深める必要がある。

■授業計画

第1回	ソーシャルワークと社会科学
第2回	先行研究のまとめ1 (対象者)
第3回	先行研究のまとめ2 (制度・政策、あるいは概念)
第4回	先行研究のまとめ3 (ソーシャルワーク実践)
第5回	研究の計画 (量的調査)
第6回	研究の計画 (質的調査)
第7回	調査設計 【調査対象 質問項目 質問紙 研究倫理】
第8回	リサーチクエスチョンや仮説
第9回	調査の分析方法 (量的調査) (質的調査)
第10回	調査の結果 (量的調査)
第11回	調査の結果 (質的調査)
第12回	考察 調査結果の分析、解析、解説
第13回	考察 先行研究との比較
第14回	考察 研究の限界と課題 ソーシャルワークへの示唆
第15回	—
第16回	—
第17回	—
第18回	—
第19回	—
第20回	—
第21回	—
第22回	—
第23回	—
第24回	—
第25回	—
第26回	—
第27回	—
第28回	—
第29回	—
第30回	—
第31回	—
第32回	—

〔成績評価〕

試験 (0%)、レポート (0%)、小テスト (0%)、課題提出 (50%)、その他の評価方法 (50%)

〔成績評価 (備考)〕

発表と、討議への参加による授業への貢献度を評価する。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

本科目では各授業回あたりおよそ200分の準備学習 (予習・復習等) を必要とする。自立した研究者として、研究テーマに基づき、網羅的に、関係する概念と先行研究をまとめ、リサーチクエスチョンや仮説をたて、調査の計画をたて、推進し、結果を分析し、考察していく。

【試験・レポート等のフィードバック】

発表時の資料について、発表の事前事後にコメントを行う。授業時のコメントと、個別指導の内容をもとに、博士論文を仕上げていく。

【ディプロマポリシーとの関連性】

ディプロマポリシーの「研究者として自立して活動し、あるいは指導的な高度の専門業務に従事するために必要な能力や知識を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会福祉学分野における研究者として自立して活動し、あるいは指導的な高度の専門業務に従事できるための能力と知識がつくことになる。

【テキスト】

適宜紹介をしていく。

【参考文献】

適宜紹介をしていく。

社会福祉学学生指導法（プレFD）

1単位：通年	1～3年
市川 一宏、金子 和夫、福島 喜代子、山口 麻衣、高山 由美子、原島 博	

【到達目標】

社会福祉学分野における学識を教授するために必要な能力を培うための機会の設定し、その機会に関する情報を提供することにより、博士後期課程修了後、自らが有する学識を教授することができるようになる。

【履修の条件】

これまで高等教育機関で教員等として従事した経験がない者で、将来、高等教育機関において学識を教授することを希望する、本学博士後期課程在籍者。本学学部授業の授業日（平日）に、本学において演習授業への参加（約2回）及び講義のコマ（約1回）担当をすることができること。本授業に関して、指導教員の指導を受けることができること。

【講義概要】

社会福祉学分野における学識を教授するために必要な能力を培うための機会を設定する。また、その機会に関する情報を提供する。①学生の指導方法、②教材の作成・活用方法について、指導教員からの指導を受ける。また、自らの専門領域の授業の1コマについて、授業を計画し、授業の開催を行い、指導教員と振り返りを行う。

■授業計画

第1回	社会福祉学分野における学生の指導方法、教材の作成・活用方法
第2回	ソーシャルワーク演習への参加（教員補助及び学生指導）
第3回	ソーシャルワーク実習指導への参加（教員補助及び学生指導）
第4回	演習、実習指導授業の指導の仕方、振り返り

第5回 授業計画づくり（課題として提出）

第6回 講義科目の授業を1コマ担当

第7回 講義授業における指導の仕方、振り返り

第8回 —

【成績評価】

試験（0%）、レポート（0%）、小テスト（0%）、課題提出（50%）、その他の評価方法（50%）

【成績評価（備考）】

学生が有する学識を教授するために、講義授業を計画し、教材を作成、準備したこと、及び、自ら演習授業に参加し、学生の指導を行ったことについて、振り返り、評価を行う。

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

本科目では各授業回あたりおよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。自らが有する学識を教授するために、授業を計画、実施、振り返りする。

【試験・レポート等のフィードバック】

授業計画と、実際の授業の内容・方法について、個別に指導教員からフィードバックを行う。

【ディプロマポリシーとの関連性】

ディプロマポリシーの「研究者として自立して活動し、あるいは指導的な高度の専門業務に従事するために必要な能力や知識を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、社会福祉学分野における研究者として自立して活動し、あるいは指導的な高度の専門業務に従事できるための能力と知識がつくことになる。

【テキスト】

適宜紹介をしていく。

【参考文献】

適宜紹介をしていく。

社会福祉調査法Ⅰ

2単位：通年	1～2年
山口 麻衣	

【科目補足情報】

前期と後期の開講時間が異なる。

【到達目標】

- ①多様な社会福祉調査の方法や分析に関する知識を高める。
- ②量的な調査の多様な方法や分析について学び、分析手法スキルを高める。
- ③ソーシャルワーク実践に役立つ調査研究方法（実践の効果測定、プログラム評価、実践研究、サービス評価の考え方と方法について、理解し、説明できる。

【履修の条件】

条件は特にないが、受講者はⅠとⅡの両方を履修が望ましい。

【講義概要】

社会福祉調査の方法や分析に関する知識を高め、社会福祉調査を理解し、実際に調査を担えるソーシャルワーク専門職となるための基礎を養うこととする。社会福祉調査法について体系的に学び、社会福祉調査を行う上での量的調査と質的調査の活用可能性と限界やミックス法を理解する。主に量的調査の学びを深め、統計解析ソフト（SPSS）を用いた分析方法や多変量解析の方法を学ぶ。さらに、ソーシャルワーク実践に役立つ実践の効果測定、実践研究、ニーズ分析、評価研究、サービス評価、プログラム評価の考え方と方法を学ぶ。

■授業計画

第1回	社会福祉調査の概要 調査方法（量的調査・質的調査）とミックス法、社会福祉調査の目的・意義・課題、アクションリサーチ、エビデンス・ベースド・プラクティス（EBP）と社会福祉調査の関連について学ぶ。
第2回	実践効果測定、実践研究、ニーズ分析、実践評価、社会福祉実践と調査研究について学ぶ。集団比較実験計画法、単一事例実験計画法について学ぶ。
第3回	評価研究・サービスの質の評価、プログラム評価（構造、プロセス、アウトカムの評価）について学ぶ。
第4回	量的調査における仮説構築と検証、統計的検定・サンプリング、測定、変数と尺度、質問紙作成について学ぶ。
第5回	統計ソフトの活用方法と実際について学ぶ。一変数の分析（単純集計、記述統計）について学ぶ。
第6回	二変数の分析（クロス集計 χ^2 検定）について学ぶ。
第7回	二変数の分析（平均の差t検定、一元配置分散分析F検定）について学ぶ。
第8回	二変数の分析（相関分析・単回帰分析）について学ぶ。
第9回	多変量解析方法の概要、重回帰分析について学ぶ。
第10回	ロジスティック回帰分析について学ぶ。
第11回	因子分析について学ぶ。
第12回	その他の多変量解析（分散共分散分析など）について学ぶ。
第13回	その他の多変量解析（クラスター分析、テキストマイニングなど）について学ぶ。
第14回	その他の多変量解析（共分散構造分析など）と多変量解析まとめについて学ぶ。
第15回	レポート提出
第16回	—

【成績評価】

試験（0%）、レポート（50%）、小テスト（0%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（50%）

【成績評価（備考）】

レポートは調査研究計画・データ分析・研究課題を学期末にまとめる。その他の評価はリーディング課題/担当分の報告・レジュメ提出、毎回のフィードバック、授業の積極的な参加。面接授業の出席100%。やむを得ず欠席の場合はレポートで代替できる（3回まで）。30分を過ぎた遅刻は欠席（遅刻3回で欠席1回）とする。

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

リーディング課題は全員、事前に読む。テキストの予習・復習、統計分析の自習や統計個別指導の活用を薦める。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

リアクションペーパーに対するフィードバックを次の講義において行う。課題レポートについては、レポート返却時に個別にコメントを行う。

【ディプロマポリシーとの関連性】

ディプロマポリシーの「高度な専門的知識や技術を備える」に該当する。この科目を履修することで、研究するうえで不可欠な社会福祉調査法に関する、高度な専門的知識や技術を身につけることとなる。

【テキスト】

テキストは指定しない。

【参考文献】

浦上昌則・脇田貴文（2008）『心理学・社会科学研究のための調査系論文の読み方』東京図書、2,940円。
村瀬洋一・高田洋・廣瀬毅士編（2007）『SPSSによる多変量解析』オーム社、2,940円、笠原千絵・永田祐編著（2013）『地域の〈実践〉を変える社会福祉調査入門』春秋社、2625円、その他の参考文献は授業で紹介する。

【備考】

担当部分のレジュメ作成・発表を求める。

社会福祉調査法Ⅱ

2単位：通年

1～2年

浅野 貴博

【到達目標】

- ①社会福祉調査法の基礎を学び、研究計画書の作成に向けて各自の研究デザインを描けるようになる。
- ②修士論文の作成に向けて、論文の書き方等の基礎的な知識と技術を習得する。

【履修の条件】

本講義はⅠとⅡに分かれているが、実際は通年科目と同様であるため、ⅠとⅡの双方を履修すること。

【講義概要】

社会福祉調査法について体系的に学び、実際に調査を担えるソーシャルワーク専門職となるための基礎を養うこととする。社会福祉調査法における質的調査について、その前提の考え方をきちんと踏まえた上で、質的調査の様々なアプローチの概要を学ぶ。

■授業計画

第1回 研究の“問い”を育む

- 第2回 質的調査法とは?
- 第3回 質的データの集め方①
- 第4回 質的データの集め方②
- 第5回 質的データの集め方③
- 第6回 質的データの分析①
- 第7回 質的データの分析②
- 第8回 質的データの分析③
- 第9回 質的調査法のアプローチ①
- 第10回 質的調査法のアプローチ②
- 第11回 質的調査法のアプローチ③
- 第12回 質的調査の評価
- 第13回 研究の倫理・ルール
- 第14回 研究発表・報告の仕方
- 第15回 —
- 第16回 —

〔成績評価〕

試験 (0%)、レポート (0%)、小テスト (0%)、課題提出 (50%)、その他の評価方法 (50%)

〔成績評価（備考）〕

研究計画書の作成に向けて、授業の進行に沿って課題を課す。
詳しくは授業時に説明する。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。参考文献の読み込み等、各自で主体的に学びを進めることが期待される。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

課題に対するフィードバックは授業時に行う。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

ディプロマポリシーの「高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。この科目を履修することで、研究する上で不可欠な社会福祉調査法に関する高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけることとなる。

〔テキスト〕

特定のテキストは使用しない。必要に応じてレジュメおよび資料を配布する。

〔参考文献〕

・日本ソーシャルワーク学会監修（2019）『ソーシャルワーカーのための研究ガイドブック』中央法規出版
・笠原千絵・永田祐編（2013）『地域の〈実践〉を変える社会福祉調査入門』春秋社
・ウヴェ・フリック（2011）『新版 質的研究入門』春秋社
※その他の参考文献は授業で紹介する。

臨床心理学専攻

修士課程

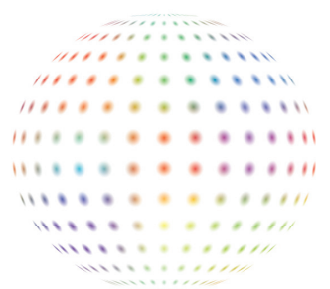


表2-1 総合人間学研究科臨床心理学専攻 修士課程(2022年度)

授 業 科 目 の 名 称		担 当 教 員	配当 年次	単位数又は時間数			開講 状況
				必修	選択	自由	
基礎 研 究 科 目	臨床心理学特論Ⅰ	加 藤 純	1・2	2			前期1
	臨床心理学特論Ⅱ	植 松 晃 子	1・2	2			後期1
	臨床心理面接特論Ⅰ(心理支援に関する理論と実践)	石 川 与志也	1・2	2			後期1
	臨床心理面接特論Ⅱ	田 副 真 美	1・2	2			後期1
	臨床心理査定演習Ⅰ(心理的アセスメントに関する理論と実践)	田 副 真 美	1・2	2			前期1
	臨床心理査定演習Ⅱ	植 松 晃 子	1・2	2			前期1
実 習	臨床心理基礎実習Ⅰ	※1	1	1			通年1
	臨床心理基礎実習Ⅱ	※1	1	1			通年1
	臨床心理実習Ⅰ(心理実践実習)	※2	2		1		通年1
	臨床心理実習Ⅱ	※2	2		1		通年1
研 究 別	特別研究A(臨床心理援助方法研究)	加藤 純/谷井淳一/田副真美/ 植松晃子/石川与志也/高城絵里子	1・2	4			通年1
	特別研究B(キリスト教と臨床心理学)	ジェームス・サック	1・2	4			通年1
専 門 科 目	心理学研究法特論	北 村 英 哉	1・2		2		前期1
	心理統計法特論Ⅰ	谷 井 淳 一	1・2		2		前期1
	心理統計法特論Ⅱ	谷 井 淳 一	1・2		2		後期1
	臨床心理学研究法特論	荘 島 幸 子	1・2		2		前期
	発達心理学特論	高 城 絵里子	2		2		後期1
	教育心理学特論	北 村 英 哉	1・2		2		前期1
	司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開	室 城 隆 之	1・2		2		集中
	家族心理学特論(家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践)	福 山 和 女	1・2		2		後期1
	精神医学特論	倉 本 英 彦	1・2		2		前期1
	心身医学特論(保健医療分野に関する理論と支援の展開)	中 島 享	1・2		2		集中
	心理療法特論Ⅰ(交流分析)	白 井 幸 子	1・2		2		前期1
	心理療法特論Ⅱ(児童臨床心理)	高 城 絵里子	1・2		2		前期1
	投映法特論	分 島 芳 子	1・2		2		後期1
	サイコドラマ特論	谷 井 淳 一	1・2		2		後期1
	心理療法スーパービジョン特論	福 山 和 女	1・2		2		前期1
	福祉分野に関する理論と支援の展開	加 藤 純	1・2		2		後期1
	学校臨床心理学特論(教育分野に関する理論と支援の展開)	菊 池 知 美	1・2		2		前期1
	産業・労働分野に関する理論と支援の展開	中 村 洸 太	1・2		2		前期1
	心の健康教育に関する理論と実践	田 副 真 美	1・2		2		前期1
	臨床心理学研究領域と						
	キリスト教倫理学特論	石 居 基 夫	1・2		2		前期1
	牧会カウンセリング特論	ジェームス・サック	1		2		後期1
	臨床死生学特論	白 井 幸 子	1・2		2		後期1

※1 植松晃子、加藤純、谷井淳一

※2 田副真美、高城絵里子、石川与志也

	日本語論文の書き方(留学生対象)		1・2	2※			通年1
--	------------------	--	-----	----	--	--	-----

※留学生のみ必修 卒業要件単位には含まれない

臨床心理学特論Ⅰ

2単位：前期1コマ

1～2年 必修

加藤 純

【到達目標】

高度専門職としての臨床心理士に必要な倫理性、社会性、臨床心理学の基礎知識と技法を学ぶことを目的とする。

【履修の条件】

臨床心理学専攻修士課程必修。また、臨床心理士受験資格の取得に必修（公認心理師科目ではない）。

本学大学院総合人間学研究科・臨床心理学専攻修士課程に正規に在学する院生のみが履修できる。原則として1年次前期に履修する。

【講義概要】

臨床心理学を広く包括的な視野から学ぶ。

現代の臨床心理学は、障害や苦痛の低減を目的とするだけでなく、より豊かな人間の一生の幸福と創造性の追究を目的とするものへと発展してきている。臨床心理学の歴史と今日的課題、主要理論、方法、対象及び社会的意義についての基礎知識を学ぶと同時に、臨床心理学の人間観・人間理解の方法を検討・考察する。

■授業計画

第1回	各自が目指す臨床心理士像。大学院での学習目標
第2回	臨床心理職の役割と専門性と資格の関係。 受験資格を得るための条件、養成校での学習内容。
第3回	臨床心理による支援の目標（こころの健康と異常心理学）
第4回	アセスメント：人のこころをどのように見立てるか（診断基準）
第5回	面接技法 1) マイクロ・カウンセリングによる面接技法の体系 2) 「反映・明確化・探索」×「出来事・感情・思考・価値」の2次元による面接技法の整理
第6回	臨床心理の歴史と主要理論の系譜
第7回	様々な臨床心理援助（1）精神分析の人間観と理論・実践例
第8回	様々な臨床心理援助（2）クライエント中心療法の人間観と理論・実践例
第9回	様々な臨床心理援助（3）論理情動療法の人間観と理論・実践例
第10回	様々な臨床心理援助（4）認知行動療法の理論と技法
第11回	様々な臨床心理援助（5）分析心理学。アドラー心理学
第12回	様々な臨床心理援助（6）ブリーフセラピーの理論と実践例
第13回	専門職倫理（1）倫理規程とは何か（日本臨床心理士資格認定協会、日本臨床心理士会などの規程を調べる）
第14回	専門職倫理（2）倫理規程と実践での課題（守秘義務、多重関係に関する討議・ロールプレイ）
第15回	—

第16回 —

【成績評価】

試験（0%）、レポート（70%）、小テスト（0%）、課題提出（15%）、その他の評価方法（15%）

【成績評価（備考）】

その他の評価方法は、ディスカッションなど授業への参加度。原則として全ての回に出席すること。

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

参考文献を積極的に読んでください。関心を持ったアプローチに関する有名な原著（翻訳で可）に触れることをお勧めします。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とします。

【試験・レポート等のフィードバック】

期末レポートはメールにより提出してください。提出されたレポートにオンラインでコメントします。

【ディプロマポリシーとの関連性】

この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とします。特に、臨床心理士に必要な「臨床心理の専門職としての使命と社会的責任」「クライアントを尊重する姿勢と倫理の理解と遵守」「クライアントへの臨床的支援能力」の修得を目指します。

【テキスト】

特定の教科書は使いません。下記の参考文献を適宜、読んでください。

【参考文献】

日本臨床心理士資格認定協会『新・臨床心理士になるためには』最新版（毎年8月頃発行）
下山晴彦（2001）『講座臨床心理学』東京大学出版会
下山晴彦（2009）『よくわかる臨床心理学』ミネルヴァ書房
G. Egan（鳴澤實他訳1998）『熟練カウンセラーをめざすカウンセリング・テキスト』創元社
R. R. Carkhuff（日本産業カウンセラー協会訳1992）『ヘルピングの心理学』講談社現代新書
A. E. Ivey（福原真知子他訳1985）『マイクロカウンセリング』川島書店
宮井研治『子ども・家族支援に役立つ面接の技とコツ』明石書店
国分康孝（1980）『カウンセリングの理論』誠信書房
津川秀夫・大野裕史（2014）『認知行動療法とブリーフセラピーの接点』日本評論社
精神療法編集部（2014）『先達から学ぶ精神療法の世界：著者との対話への招待』精神療法増刊第1号

臨床心理学特論Ⅱ

2単位：後期1コマ

1～2年 必修

植松 晃子

【到達目標】

臨床心理の専門家に必要な理論、アセスメントについての理解を進めながら、心理療法についてさらに深く理解する。

【履修の条件】

当大学院、臨床心理学専攻に正規に在籍する学生のみ履修できる。臨床心理学専攻の必修科目である。原則として全ての授業に出席することが履修条件となる。

【講義概要】

臨床心理学特論Ⅰで学んだ基礎の上に立って、各自が関心を持つ臨床心理の現場を意識しつつ、心理療法の中でどのようにケース理解を進めていくのか、アセスメントについて学びます。テキストを担当制で読み進めます。シラバスは適宜変更されます。

■授業計画

第1回	オリエンテーション・事例理解の視点
第2回	事例の理解の視点1アセスメントと心理療法の関係
第3回	事例の理解の視点2アセスメントの基本的視点
第4回	事例の理解の視点3アセスメントの基本的視点
第5回	事例の理解の視点4アセスメントの基本的視点
第6回	事例の理解の視点5アセスメントの理論的背景
第7回	事例の理解の視点6アセスメントの理論的背景
第8回	事例の理解の視点7アセスメントの理論的背景
第9回	事例の理解の視点8人格の発達水準と病理
第10回	事例の理解の視点9人格の発達水準と病理
第11回	事例の理解の視点10人格の発達水準と病理
第12回	事例の理解の視点11一次的防衛機制の理解
第13回	事例の理解の視点12二次的防衛機制の理解
第14回	事例の理解の視点13事例による総合的理解
第15回	—
第16回	—

【成績評価】

試験(0%)、レポート(0%)、小テスト(0%)、課題提出(70%)、その他の評価方法(30%)

【成績評価(備考)】

その他の評価方法としては、授業への積極的な参加を評価する。

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

各自の専門性探求の場として、積極的な参加を求める。自分がまとめを担当した箇所だけでなく事前に資料には目を通し、ディスカッションに積極的に参加すること。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習(予習・復習等)を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

授業中にフィードバック、コメントを行う。

【ディプロマポリシーとの関連性】

この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、臨床心理士と公認心理師に必要な「臨床心理の専門職としての使命と社会的責任」「クライアントを尊重する姿勢と倫理の理解と遵守」「クライアントへの臨床的支援能力」の修得を目指す。

【テキスト】

主なテキストは以下の通りだが、必要に応じて変更されることもある。

- ・ナンシー・マックウィリアムズ「パーソナリティ障害の治療と診断」創元社
- ・ナンシー・マックウィリアムズ「ケースの見方・考え方」創元社
- ・ナンシー・マックウィリアムズ「精神分析的な心理療法」金剛出版

【参考文献】

適宜紹介する

【備考】

*課題提出：授業時の課題発表

臨床心理面接特論Ⅰ(心理支援に関する理論と実践)

2単位：後期1コマ

1～2年 必修

石川 与志也

【到達目標】

ガイダンス／コンサルテーション、カウンセリング、心理療法の基礎技法としての臨床心理面接法の基礎理論および基本的態度を理解すること。精神分析、来談者中心療法、認知行動療法の理論を踏まえ、特に、精神分析的な心理療法の基本的態度と技法の基礎理論の理解を中心において、臨床心理面接の基礎を学ぶ

【履修の条件】

本学大学院総合人間学研究科・臨床心理学専攻修士課程に正規に在学する院生のみが履修できる。毎回出席すること。原則として欠席が3回を超えた場合は不可とする。また、遅刻二回で欠席一回換算とする。遅刻が授業時間の半分を超えた場合は欠席とする。

【講義概要】

臨床の実際におけるガイダンス、カウンセリング、心理療法の基礎技法としての臨床心理面接法の基礎理論の理解を進め、その関連諸科学との関係、技法構成上の基本原理の検討を行う。講義内容は、以下の内容を含む。

1. 力動論に基づく心理療法の理論と方法
2. 行動論・認知論に基づく心理療法の理論と方法
3. その他の心理療法の理論と方法
4. 心理に関する相談、助言、指導等への上記1～3の応用
5. 心理に関する支援を要する者の特性や状況に応じた適切な支援方法の選択・調整

なお、基本的にはシラバスに沿って進めるが、授業計画は適宜変更することがある。

■授業計画

第1回	オリエンテーション：授業の進め方、臨床心理面接法とは何か
第2回	心理療法の歴史
第3回	心理療法の理論と方法：三大学派の基礎
第4回	心的変化のプロセス
第5回	臨床的態度
第6回	クライアントになる
第7回	心理療法装置：治療場の生成と発展
第8回	面接技法の基礎：患者／クライアントから学ぶための準備
第9回	心の中のスーパーヴァイザーを育てること
第10回	相互作用のコミュニケーションの形態：転移と逆転移
第11回	心理療法におけるコンテインメントとホールディング
第12回	心理療法の手続きとプロセス
第13回	臨床心理査定に応じた臨床心理学的処方：ケースフォーミュレーションと介入
第14回	心理療法家の専門性と倫理
第15回	レポート
第16回	-----

【成績評価】

試験（0%）、レポート（40%）、小テスト（0%）、課題提出（30%）、その他の評価方法（30%）

【成績評価（備考）】

ディスカッションへの主体的な取り組みを評価する。

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

テキストおよび配布文献の指定箇所を事前に読んでおくことが課せられる。

また、参考文献を読み進め、基礎理論の理解を深めていくこと。本科目では各授業回に200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

・提出された課題に対するフィードバックを次の講義内容において行う。

・期末レポートの評価について個別のフィードバックが必要な場合は、個別に対応するので教員にアポイントメントを取ること。

【ディプロマポリシーとの関連性】

この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、臨床心理士・公認心理師に必要な「臨床心理の専門職としての使命と社会的責任」「クライアントを尊重する姿勢と倫理の理解と遵守」「クライアントへの臨床的支援能力」の修得を目指す。

【テキスト】

特に指定しない。随時、文献を配布する。

【参考文献】

土居健郎（1961）精神療法と精神分析。金子書房。

土居健郎（1992）新訂 方法としての面接—臨床家のために。医学書院。

小谷英文編著（2010）現代心理療法入門。PAS心理教育研究所出版部。

アーロン・T・ベック（大野裕翻訳）（1990）認知療法。岩崎学術出版社。

Casement, P. J. (1985). On learning from the patient. London: Routledge.（松本邦裕訳（1991）患者から学ぶ—ウィニコットとビオンの臨床応用。岩崎学術出版社）

Fromm-Reichmann, F. (1950). Principles of intensive psychotherapy. Chicago: University of Chicago Press.

Gabbard, G.O. (2010). Long-term Psychodynamic Psychotherapy: A Basic Text, Second Edition. Washington D.C.: American Psychiatric Publishing Inc.（狩野力八郎監訳（2012）精神力動的な精神療法：基本テキスト。岩崎学術出版社）

Lemma, A. (2016). Introduction to the Practice of Psychoanalytic Psychotherapy. Second edition. West Sussex: John Wiley & Sons.

Rogers, C.R. (1942) Counseling and Psychotherapy. Boston: Houghton Mifflin Company.（末武康弘・諸富祥彦訳（2005）カウンセリングと心理療法。岩崎学術出版社）

Sandler, J., Dare, C., Holder, A. (1992). The patient and the analyst [2nd edition]. London: Karnac.（藤山直樹・北山修監訳（2008）患者と分析者〔第2版〕。誠信書房）

Sullivan, H. S. (1954). The Psychiatric interview. New York: Norton.（中井久夫他訳（1986）精神医学的面接。みすず書房。）

【備考】

担当教員は、臨床心理士／公認心理師としての臨床現場における実務経験を活かし、臨床心理面接の基礎について講義と指導を行う。

臨床心理面接特論Ⅱ

2単位：後期1コマ

1～2年 必修

田副 真美

【到達目標】

自律訓練法および認知行動療法についての理論、実際に学び臨床現場におけるその有用性を理解する。自律訓練法および認知行動療法の体験を通し、心身相関や自己理解を深める。

【履修の条件】

本学大学院総合人間学研究科・臨床心理学専攻修士課程に正規に在学する院生のみが履修できる。

臨床心理学専攻1年後期の必修科目である。

【講義概要】

認知行動療法および自律訓練法を取り上げ、その理論、実際について講義する。また、ロールプレイや体験を通して実際の技法を学ぶ。後半では、主に医療領域における心理臨床に

ついて講義し、事例を提示しグループによる検討や発表の時間も設ける予定である。ゲストスピーカーを招き、心理臨床の現場の実施を講義して頂く予定である。

■授業計画

第1回	オリエンテーション 授業のねらい 心理支援とは 自律訓練法とは 認知行動療法とは
第2回	自律訓練法とは 自律訓練法の標準公式の説明と体験 ① 背景公式 ② 第1公式 四肢重感練習 ③ 第2公式 四肢温感練習
第3回	自律訓練法の標準公式の説明と体験 ④ 第3公式 心臓調整練習 ⑤ 第4公式 呼吸調整練習 ⑥ 第5公式 腹部温感練習 ⑦ 第6公式 額部涼感練習
第4回	自律訓練法の実際
第5回	認知行動療法の概要
第6回	認知行動療法の体験と解説：アセスメント①
第7回	認知行動療法の体験と解説：アセスメント②
第8回	認知行動療法の体験と解説：アセスメント③
第9回	認知行動療法の体験と解説：認知再構成法①
第10回	認知行動療法の体験と解説：認知再構成法②
第11回	認知行動療法の体験と解説：問題解決法①
第12回	認知行動療法の体験と解説：問題解決法②
第13回	認知行動療法の体験と解説：ゲストスピーカーによる講義
第14回	認知行動療法の実際 まとめ
第15回	期末レポート
第16回	—

【成績評価】

試験 (0%)、レポート (40%)、小テスト (0%)、課題提出 (40%)、その他の評価方法 (20%)

【成績評価(備考)】

授業中のディスカッションやロールプレイングにおける態度、授業内の課レポート、試験レポートで評価する。

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

自律訓練法を講義以外の時間にも実施し、訓練記録を記入する。

認知行動療法の体験では、毎回ホームワークを出し、自宅で実施してもらい、その報告をする。

本科目では各授業回におよそ200分の準備学習(予習・復習等)を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

リアクションペーパーに対するフィードバックを次の講義内容にて行う。

発表やレポートについて、授業内に適宜口頭でコメントする。

【ディプロマポリシーとの関連性】

この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、臨床心理士に必要な「臨床心理の専門職としての使命と社会的責任」「クライアントを尊重する姿勢と倫理の理解と遵守」「クライアントへの臨床的支援能力」「他職種の専門家と連携する能力」の修得を目指す。

【テキスト】

必要な資料を適宜配布する。

【参考文献】

松岡洋一、松岡素子 「自律訓練法」日本評論社 2,730円
伊藤絵美「認知療法・認知行動療法カウンセリング初級ワーク ショップ—CBTカウンセリング」星和書店 2,520円
伊藤絵美・石垣琢磨(監)「認知行動療法を身につける」金剛出版 2,800円

【備考】

体験型の授業のため、遅刻や欠席をしないよう心掛けてほしい。「実務経験のある教員による科目」医療領域等における心理臨床経験を活かして心理臨床の指導を行う。

臨床心理査定演習Ⅰ(心理的アセスメントに関する理論と実践)

2単位：前期1コマ

1～2年 必修

田副 真美

【科目補足情報】

公認心理師指定科目である。

【到達目標】

1. 心理的アセスメントの目的及び倫理を理解する。
2. 心理臨床現場で使用頻度の高い心理検査について、検査者および被検査者を体験し、各テストの内容および実施における倫理上の問題について十分理解できるようにする。
3. アセスメントレポートを作成し、自己理解を深める。
4. 講義を通して、実践的な力を身につける。

【履修の条件】

本学大学院、臨床心理学専攻修士課程に正規に在学する院生のみが履修できる。

臨床心理学専攻科1年前期の必修科目である。

心理検査の基礎的な知識があること。

【講義概要】

心理的アセスメントの目的及び倫理、心理アセスメントの方法について講義する。

心理臨床現場で実施されている主要な心理検査についての理論・実施方法・採点法・解釈法について講義する。また、実際に学生同士で相互に実施し合い、その結果をアセスメントレポートを学生自身が作成する。臨床現場における心理アセスメントの実践についても講義する。

■授業計画

第1回	オリエンテーション 心理的アセスメントの目的及び倫理 臨床現場や対象による心理検査の実施の仕方
第2回	心理的アセスメントの方法（観察、面接及び心理検査）
第3回	心理検査について（質問紙法、投映法）
第4回	質問紙法（STAI, SDS, CMI, POMSなど）：事例と所見の書き方
第5回	質問紙法（STAI, SDS, CMI, POMSなど）：事例と所見の書き方
第6回	P-Fスタディ：理論、実施法、採点と解釈②
第7回	P-Fスタディ：事例と所見の書き方
第8回	SCT：理論、実施法、採点と解釈
第9回	バウムテスト：理論、実施法、採点と解釈①
第10回	バウムテスト：理論、実施法、採点と解釈②
第11回	バウムテスト：事例と所見の書き方
第12回	HTP法（ゲストスピーカー）：理論、実施法、採点と解釈
第13回	風景構成法：理論、実施法、採点と解釈
第14回	総合アセスメント：テストバッテリー、事例提示 報告書の書き方
第15回	期末レポート
第16回	—

【成績評価】

試験（0%）、レポート（50%）、小テスト（0%）、課題提出（30%）、その他の評価方法（20%）

【成績評価（備考）】

授業への積極的な取組姿勢、授業に実施した課題レポートおよび試験レポートで評価する。

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

連続した授業が多いため、必ず実施、採点、解釈の仕方について復習することが望ましい。
本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

リアクションペーパーに対するフィードバックを次の講義内容に行う。
発表やレポートについて、授業内に適宜口頭でコメントする。

【ディプロマポリシーとの関連性】

この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、公認心理師/臨床心理士に必要な「臨床心理の専門職としての使命と社会的責任」「クライアントを尊重する姿勢と倫理の理解と遵守」「クライアントへの臨床的支援能力」「他職種の専門家と連携する能力」の修得を目指す。

【テキスト】

必要な資料を適宜配布する。P-Fスタディ、バウムテスト、HTPに関するテキストは、大学から貸し出しをする。

【参考文献】

小山充道「臨床心理アセスメント」金剛出版
沼 初枝「臨床心理アセスメントの基礎」沼 初枝 ナカニシ出版
カール・コッホ（著）岸本寛史、中島ナオミ、宮崎忠男（訳）
「バウムテスト [第3版] - 心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究 -」誠心書房

【備考】

「実務経験のある教員による科目」公認心理師および臨床心理士として、特に医療領域等における心理臨床経験を活かして心理検査の実施、解釈、アセスメント、フィードバック方法の指導を行う。

臨床心理査定演習 II

2単位：前期1コマ	1～2年 必修
植松 晃子	

【到達目標】

臨床心理の現場で利用されることが多い知能検査について、査定者及び被査定者を体験しながら、各検査の内容および実施における倫理上の問題について、十分理解できるようにする。

【履修の条件】

当大学院、臨床心理学専攻に在籍する正規の学生のみ履修できる。臨床心理学専攻の必修科目である。原則的に全ての授業に出席することが履修条件となる。

【講義概要】

各検査の理論的説明の後、実際に体験学習をし、その結果をアセスメントレポートを作成することにより、授業で扱う心理検査を総合的に理解する。基本的に授業計画に沿って進めるが、適宜変更することもある。

■授業計画

第1回	一般的な知能検査プロセスの理解
第2回	知能検査：田中ビネー V 理論
第3回	知能検査：田中ビネー V 演習1
第4回	知能検査：田中ビネー V 採点・解釈法・所見レポート
第5回	知能検査：WISC-IV 理論
第6回	知能検査：WISC-IV 演習1
第7回	知能検査：WISC-IV 演習2
第8回	知能検査：WISC-IV 採点方法の理解
第9回	知能検査：WISC-IV 解釈・所見
第10回	知能検査：WAIS-IV 理論
第11回	知能検査：WAIS-IV 演習1
第12回	知能検査：WAIS-IV 演習2
第13回	知能検査：WAIS-IV 採点方法の理解
第14回	知能検査：WAIS-IV 解釈法・所見レポート
第15回	—
第16回	—

【成績評価】

試験（0%）、レポート（0%）、小テスト（0%）、課題提出

(80%)、その他の評価方法 (20%)

〔成績評価（備考）〕

授業への参加態度を評価する。提出するレポートとして所見に求められる基準を満たすこと。体験学習の前にしっかりマニュアルを読み真剣に取り組むこと。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

心理検査は、検査内容を理解したうえで実施することが必須になるため、マニュアルを熟読しておくことを求める。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

所見レポートは授業中にコメント・評価を付けて返却する。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、臨床心理士と公認心理師に必要な「臨床心理の専門職としての使命と社会的責任」「クライアントを尊重する姿勢と倫理の理解と遵守」「クライアントへの臨床的支援能力」の修得を目指す。

〔テキスト〕

適宜資料を配布する

〔参考文献〕

基礎知識として、知能検査関連の文献に目を通しておくとうまいでしょう。

参考資料は適宜紹介します。

・願興寺礼子・吉住隆弘「心理検査の実施の初歩」ナカニシヤ出版

臨床心理基礎実習Ⅰ	
1単位：通年	1年 必修
植松 晃子、加藤 純、谷井 淳一	

〔到達目標〕

2年次の臨床心理実習に備えるため、面接を中心とした臨床心理的実践の基礎を作る。面接についての基本的な知識とともに、臨床家として必要な態度と技法、技術を学ぶ。さらに自己体験をリフレクティブにし、自己の強みおよび課題を明確にすることを目標にする。

〔履修の条件〕

本大学院、臨床心理学専攻に正規に在籍する学生のみ履修できる。臨床心理学専攻1年生の必修科目である。毎回出席すること。原則として欠席が三回を超えた場合は不可とする。遅刻が授業時間の半分を超えた場合は欠席とする。

〔講義概要〕

講義およびワークショップ、ロールプレイ等の演習を通じて、上記の到達目標の実現に向けた訓練を行う。なお、体験型のクラ

スなので、履修者の人数、展開によってはシラバスの内容が前後したり、変更されることがある。

■授業計画

第1回	オリエンテーション
第2回	専門的態度1：内的世界への関心+ワークショップ
第3回	専門的態度2：純粋性+ワークショップ
第4回	専門的態度3：臨床的態度+ワークショップ
第5回	CLの心の機能（アセスメントの観点）+ワークショップ
第6回	事例性の観点+ワークショップ
第7回	面接の場にある者（まとめ）+ワークショップ
第8回	心理療法のプロセス展開の理解1：インテーク
第9回	心理療法のプロセス展開の理解2：開始・同盟過程
第10回	心理療法のプロセス展開の理解3：展開過程
第11回	心理療法のプロセス展開の理解4：終結過程
第12回	ロールプレイ演習1：治療的環境を作る
第13回	ロールプレイ演習2：治療的環境を作る
第14回	ロールプレイ演習3：治療的環境を作る
第15回	前期のまとめ
第16回	後期オリエンテーション：出発点の確認
第17回	専門的態度：CL理解と自己体験の整理1
第18回	専門的態度：CL理解と自己体験の整理2
第19回	専門的態度：CL理解と自己体験の整理3
第20回	心理療法の技術1：理解を共有する技術1
第21回	心理療法の技術2：理解を共有する技術2
第22回	心理療法の技術3：CLの自己理解を促進する1
第23回	心理療法の技術4：CLの自己理解を促進する2
第24回	心理療法の技術5：CLの自己理解を促進する3
第25回	ロールプレイ演習4：インテーク
第26回	ロールプレイ演習5：同盟形成
第27回	ロールプレイ演習6：共同作業
第28回	ロールプレイ演習7：初期の面接展開
第29回	ロールプレイ演習8：葛藤場面
第30回	後期のまとめ
第31回	—
第32回	—

〔成績評価〕

試験 (0%)、レポート (50%)、小テスト (0%)、課題提出 (0%)、その他の評価方法 (50%)

〔成績評価（備考）〕

その他の評価方法として、ディスカッションやワークショップ、ロールプレイ等への主体的な取り組みを評価する。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

各自、授業前後に自分の課題や気づきをまとめる臨床ノートを作ること。自分が掴みたいことや取り組みたいことを明確にしながら授業に臨み、自らの体験を言葉にし、自己理解を進めていってほしい。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）が必要です。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

適宜、質問の時間を設ける。各自がそれぞれに。授業で掴んだこと、目標を自分で確かめながら進めて行く。

【ディプロマポリシーとの関連性】

この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うためのすぐれた能力」を身に付けることを目的とする。特に臨床心理士と公認心理師に必要な「臨床心理の専門家としての使命と社会的責任」、「クライアントを尊重する姿勢と倫理の理解と遵守」、「クライアントへの臨床的支援能力」の修得を目指す。

【テキスト】

授業時に適宜紹介する

【参考文献】

適宜紹介する

臨床心理基礎実習Ⅱ

1単位：通年

1年 必修

植松 晃子、加藤 純、谷井 淳一

【到達目標】

- カンファレンスにおいて実際の臨床事例に触れ、臨床心理の現場におけるケースマネジメント、心理査定、カウンセリング／心理療法の面接の進め方、臨床的な態度と倫理についての基本的理解を学ぶ。
- 自分自身の心的体験と臨床心理学の知を用い、臨床事例について考える力の基礎を身につける。

【履修の条件】

本学大学院総合人間学研究科・臨床心理学専攻修士課程に正規に在学する院生のみが履修できる。原則として毎回出席すること。

【講義概要】

修士課程2年の大学院生が学内の実習機関で担当する事例を発表し、その事例について検討することを通して、臨床心理査定および臨床心理面接の実際を学ぶ。

■授業計画

第1回	ケースカンファレンス・オリエンテーション カンファレンスの運営の仕方、諸注意についての説明
第2回	ケースカンファレンス (1)
第3回	ケースカンファレンス (2)
第4回	ケースカンファレンス (3)
第5回	ケースカンファレンス (4)
第6回	ケースカンファレンス (5)
第7回	ケースカンファレンス (6)
第8回	ケースカンファレンス (7)
第9回	ケースカンファレンス (8)
第10回	ケースカンファレンス (9)
第11回	ケースカンファレンス (10)
第12回	ケースカンファレンス (11)
第13回	ケースカンファレンス (12)
第14回	ケースカンファレンス (13)
第15回	前期ケースカンファレンスのまとめ
第16回	後期ケースカンファレンス (1)

第17回 ケースカンファレンス (2)

第18回 ケースカンファレンス (3)

第19回 ケースカンファレンス (4)

第20回 ケースカンファレンス (5)

第21回 ケースカンファレンス (6)

第22回 ケースカンファレンス (7)

第23回 ケースカンファレンス (8)

第24回 ケースカンファレンス (9)

第25回 ケースカンファレンス (10)

第26回 ケースカンファレンス (11)

第27回 学外実習オリエンテーション

修士課程2年生が学外実習のまとめとして報告を行う場に参加し、学外実習について理解を深めるとともに、学外実習の準備をする

第28回 学内実習事例発表・一年間のケースカンファレンスのまとめ

修士課程2年生が学内実習のまとめとして事例を発表する場に参加し、臨床事例についての学びを深めるとともに、修士課程2年の学内実習への準備をする。

第29回 —

第30回 —

第31回 —

第32回 —

【成績評価】

試験 (0%)、レポート (20%)、小テスト (0%)、課題提出 (0%)、その他の評価方法 (80%)

【成績評価（備考）】

ケースカンファレンスのディスカッションへの主体的参加および毎回のカンファレンス後に提出するレポートの内容を評価する。

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）が必要である。

毎回のカンファレンス後に、カンファレンスでの学びをまとめたレポートを作成し提出する。このレポートは文献を調べて行うのではなく、原則的にはカンファレンス中の自身の体験に基づく学びとそこから考えたことを中心に作成することが望ましい。

また、上記レポートとは別途に、カンファレンスの学びを深めるために、必要な文献を主体的に読むことが望ましい。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

原則として、カンファレンス内で必要なフィードバックを行う。

【ディプロマポリシーとの関連性】

この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身に付けることを目的とする。特に臨床心理士と公認心理師に必要な「臨床心理の専門家としての使命と社会的責任」、「クライアントを尊重する姿勢と倫理の理解と遵守」、「クライアントへの臨床的支援能力」の習得を目指す。

〔テキスト〕

特に指定しない。

〔参考文献〕

特に指定しない。

必要に応じて随時紹介する。

〔備考〕

担当教員は臨床心理士としての臨床現場における実務経験を活かし、カンファレンスでの助言や指導を行う。

臨床心理実習Ⅰ（心理実践実習）

1単位：通年	2年
田副 真美、高城 絵里子、石川 与志也	

〔到達目標〕

臨床心理の専門家として現場に立つ総仕上げの意味をもち、実際に現場での実習体験を通じて、その意義や限界、課題について学ぶ。

〔履修の条件〕

本大学院臨床心理学専攻に正規に在籍している学生のみが履修できる。

臨床心理士受験資格と公認心理師受験資格を取得するために必要な科目である。

臨床心理基礎実習で学んだ知識および体験学習が身についていることを履修の条件とする。

公認心理師に必要な実習時間に該当するため、全ての授業への出席を求める。

大学および実習先へ提出する誓約書の内容に違反した場合は、実習停止となることがある。

〔講義概要〕

講義および演習で学んだ臨床心理学の知識と技術を、学外実習という実際の臨床の場での経験を通して統合していく。毎週所定の日に指定された実習先機関で、公認心理師・臨床心理士の資格を有するスーパーバイザーからスーパーヴィジョンを受けながら実習する。陪席、観察、プログラムへの参加、心理査定などを経験し、記録のとり方や細かな配慮、施設内外での連携など心理臨床の実践について学ぶ。学生は授業の中でグループ・スーパーヴィジョンを受け、学外実習先での互いの経験を共有し、考察する。実習担当教員は実習先での実習評価を踏まえて、各学生の学習課題と共に、持ち味や長所を明確にし、専門職としての方向性を定めることを援助する。

■授業計画

第1回	オリエンテーション 外部施設実習に関する諸注意
第2回	実習準備 実習先での事前オリエンテーションと事前学習の情報をもとに、実習先の理解を深める
第3回	前期実習指導①（以下第14回までグループスーパーヴィジョン） 実習への動機と目標を定める

第4回	前期実習指導② 実習記録の役割について理解し、書き方を学ぶ
第5回	前期実習指導③ 実習におけるスーパーヴィジョンの役割と方法について理解する
第6回	前期実習指導④ 各実習先での経験を共有し、まずは実習先施設の理解を深める
第7回	前期実習指導⑤ 各実習先での経験を共有し、実習先利用者のニーズや社会的状況を理解する
第8回	前期実習指導⑥ 各実習先での経験を共有し、実習先の理念や目標を理解する
第9回	前期実習指導⑦ 各実習先での経験を共有し、実習先におけるプログラムの役割について考える
第10回	前期実習指導⑧ 各実習先での経験を共有し、実習先における心理士の役割と姿勢について考察する
第11回	前期実習指導⑨ 各実習先での経験を共有し、体験の中で生じる自身の感情に目を向け、内省を深める
第12回	前期実習指導⑩ 各実習先での経験を共有し、体験の中で生じる自身の感情に目を向け、内省を深める
第13回	前期実習指導⑪ 各実習先での経験を共有し、体験の中で生じる自身の特徴について気づきを得る
第14回	前期実習のまとめ 前期実習で得られた学びを振り返り、後期実習に向けての課題を明確にする
第15回	後期実習指導①（以下第27回までグループスーパーヴィジョン） 観察及び考察の対象を焦点化した上で、改めて実習目標を設定する
第16回	後期実習指導② 観察及び考察の対象を焦点化した上で、改めて実習目標を設定する
第17回	後期実習指導③ 各実習先での経験を共有し、心理的援助の基本である受容と共感について理解を深める
第18回	後期実習指導④ 各実習先での経験を共有し、心理的援助の基本である受容と共感について理解を深める
第19回	後期実習指導⑤ 各実習先での経験を共有し、体験に基づいた臨床心理アセスメントについて考え方や姿勢を学ぶ
第20回	後期実習指導⑥ 各実習先での経験を共有し、体験に基づいた臨床心理アセスメントについて考え方や姿勢を学ぶ
第21回	後期実習指導⑦ 各実習先での経験を共有し、陪席やプログラム参加などの体験を通して、対人援助の姿勢と方法を考察する
第22回	後期実習指導⑧

- 各実習先での経験を共有し、陪席やプログラム参加などの体験を通して、対人援助の姿勢と方法を考察する
- 第23回 後期実習指導⑨
各実習先での経験を共有し、実習先における心理職の役割と他職種との連携について理解を深める
- 第24回 後期実習指導⑩
各実習先での経験を共有し、実習先における心理職の役割と他職種との連携について理解を深める
- 第25回 後期実習指導⑪
各実習先での経験を共有し、体験の中で、アセスメントに基づいた対応を模索し実践する
- 第26回 後期実習指導⑫
各実習先での経験を共有し、体験の中で、アセスメントに基づいた対応を模索し実践する
- 第27回 後期実習のまとめ
後期実習を通して、また1年間の実習を経ての学びを振り返り、今後専門家になるにあたっての自己学習課題を考察する
- 第28回 学外実習発表会
専攻内で各自の実習先での体験と学びを発表する
- 第29回 —
- 第30回 —
- 第31回 —
- 第32回 —

〔成績評価〕

試験 (0%)、レポート (30%)、小テスト (0%)、課題提出 (20%)、その他の評価方法 (50%)

〔成績評価（備考）〕

学外実習の評価・実習記録・グループスーパーヴィジョンでの報告とその考察の内容により総合的に評価する。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

学外実習に臨む前に、実習先機関とその専門領域に関する事前学習を行うこと

実習を行う中で、不足している知識を随時文献や専門書において復習すること

本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする

〔試験・レポート等のフィードバック〕

毎回提出する実習記録については実習先担当教員および実習先スーパーバイザーによるフィードバックを行う。

グループ・スーパーヴィジョンでの発表については、授業内で教員が適宜コメントを行う。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、臨床心理士に必要な、「クライアントへの臨床的支援能力」の修得を目指す。

〔テキスト〕

特になし。

実習やカンファレンスに有用な文献やテキストは、適宜紹介する。

〔参考文献〕

鑑 幹八郎、名島潤慈「新版心理臨床家の手引き」誠信書房 3,800円

〔備考〕

「実務経験のある教員による科目」担当教員それぞれの臨床心理士／公認心理師としての心理臨床経験を活かして実習指導を行う。

臨床心理実習Ⅱ

1単位：通年	2年
田副 真美、高城 絵里子、石川 与志也	

〔到達目標〕

臨床心理の専門家として現場に立つ総仕上げの意味をもち、学内付属機関での実習体験を通じて、その意義や限界、課題、倫理的態度について学ぶ。

〔履修の条件〕

本大学院臨床心理学専攻に正規に在籍している学生のみが履修できる。

臨床心理士受験資格を取得するために必要な科目である。

臨床心理基礎実習で学んだ知識および体験学習が身につけていることを履修の条件とする。

〔講義概要〕

講義および演習で学んだ臨床心理学の知識・技術と、学内付属機関という実際の臨床の場での経験を統合していく。学内実習では、クライアントに対してインテーク面接、心理面接、各種心理査定を行い、さらには継続的な面接を担当する。担当した面接について、逐語録記録や面接記録を作成し、定期的に臨床心理士の資格を有するスーパーバイザーからスーパーヴィジョンを受ける。授業では、学生自身が担当した事例をケースレポートにまとめ、ケースカンファレンスにて発表、議論する。ケースカンファレンスで教員や院生の助言を受けることによって、ケース理解を深め今後の方向性の検討を行う。ケース発表を担当しない院生は、カンファレンスで他の院生の発表を聞き、議論に積極的に参加する。受講生は全員、カンファレンス終了後に毎回、当日の発表ケースに関する自身の考えや考察をレポートにまとめ、提出する。以上の取り組みを通して、院生が臨床家としての力量を高める機会とする。

■授業計画

- 第1回 ケースカンファレンスオリエンテーション
カンファレンスの運営の仕方、諸注意を学ぶ
- 第2回 ケースカンファレンス①
院生自身が担当した事例に関してケースレポートにまとめ発表し、ケースレポートのまとめ方や発表方法を学ぶ
ケースを多角的に検討することで、ケース理解を深め

- る
- 第3回 ケースカンファレンス②
- 第4回 ケースカンファレンス③
- 第5回 ケースカンファレンス④
- 第6回 ケースカンファレンス⑤
- 第7回 ケースカンファレンス⑥
- 第8回 ケースカンファレンス⑦
- 第9回 ケースカンファレンス⑧
- 第10回 ケースカンファレンス⑨
- 第11回 ケースカンファレンス⑩
- 第12回 ケースカンファレンス⑪
- 第13回 ケースカンファレンス⑫
- 第14回 前期ケースカンファレンスのまとめ
- 第15回 後期ケースカンファレンス①
- 院生自身が担当した事例に関してケースレポートにまとめ発表し、ケースレポートのまとめ方や発表方法を学ぶ
- ケースを多角的に検討することで、ケース理解を深める
- 第16回 ケースカンファレンス②
- 第17回 ケースカンファレンス③
- 第18回 ケースカンファレンス④
- 第19回 ケースカンファレンス⑤
- 第20回 ケースカンファレンス⑥
- 第21回 ケースカンファレンス⑦
- 第22回 ケースカンファレンス⑧
- 第23回 ケースカンファレンス⑨
- 第24回 ケースカンファレンス⑩
- 第25回 ケースカンファレンス⑪
- 第26回 ケースカンファレンス⑫
- 第27回 後期ケースカンファレンスのまとめ
- 第28回 学内実習発表会
- 2年生全員が、学内で自身が担当したケースのうち一つを選択し、専攻内の報告会で発表する
- 第29回 —
- 第30回 —
- 第31回 —
- 第32回 —

〔成績評価〕

試験 (0%)、レポート (30%)、小テスト (0%)、課題提出 (20%)、その他の評価方法 (50%)

〔成績評価(備考)〕

学内実習の評価・実習記録・ケースカンファレンスにおける事例報告とその考察の内容により総合的に評価する。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

学内実習およびケースカンファレンスについて、不足している知識を随時文献や専門書において復習することが望ましい。

ケースカンファレンス参加後、毎回その感想・考察レポートを発表者に提出すること。

本科目では各授業回におよそ200分の準備学習(予習・復習等)を必要とする。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

実習記録やスーパービジョン資料については、学内スーパーバイザーがスーパービジョンの中でフィードバックを行う。

ケースカンファレンスでの発表については、授業内で教員が適宜コメントを行う。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、臨床心理士に必要な、「クライアントへの臨床的支援能力」の修得を目指す。

〔テキスト〕

特になし。

実習やカンファレンスに有用な文献やテキストは、適宜紹介する。

〔参考文献〕

鎌 幹一郎、名島潤慈「新版心理臨床家の手引き」誠信書房 3,800円

〔備考〕

「実務経験のある教員による科目」担当教員それぞれの臨床心理士／公認心理師としての心理臨床経験を活かして実習指導を行う。

特別研究A(臨床心理援助方法研究)

4単位：通年

1～2年 必修

加藤 純、谷井 淳一、田副 真美、植松 晃子、
石川 与志也、高城 絵里子

〔到達目標〕

臨床心理に関する研究課題を設定できるようになる。

設定した研究課題に関する文献研究ができるようになる。

設定した研究課題に関する実証研究ができるようになる。

研究成果を論文にまとめられるようになる。

〔履修の条件〕

「特別研究」は臨床心理学専攻の必修科目である。特別研究AまたはBを選択して、通年4単位を2年間、合計8単位を履修する必要がある。

〔講義概要〕

大学院での個々の講義や演習および実習を通して学んだ臨床心理の理論と技法を統合するため、また臨床心理援助の対象となる課題に関する理解を深めるために、各自がテーマを定めて研究する。2年間を通じて、修士論文作成のための指導を行う(特別研究A・B共通)。

新入生に関しては各自の研究したいテーマや研究方法を考慮して指導担当教員の希望調査を提出する。希望調査を踏まえてゼミ配属が決定される。この後は、担当教員ごとにゼミ形式の授業が実施される。また、1年次に1回、2年次に2回の中間発表を行う。

ゼミでは、各自の進捗に合わせて、関心のあるテーマの選定、

研究課題としての具体化、文献研究の報告、量的研究方法や質的研究方法の紹介、研究計画書の作成、調査紙の作成、面接調査の練習、研究倫理委員会への提出書類作成、収集したデータの整理と報告、データの分析・考察などを進めていく。
※研究は個別に進むが、下記の講義概要では中間発表や提出物を含めた1, 2年ごとの進行状況が概観できるので、参考にしてください。

■授業計画

第1回	オリエンテーション。特別研究の目的、進め方、履修方法。 各ゼミの紹介。1～2年生の懇談。
第2回	各ゼミでのグループ形成。 1年関心テーマの紹介。 2年春休み中の研究活動の報告。
第3回	各ゼミでのグループ形成。 1年関心テーマの明確化。所属ゼミ希望調査。 2年実証研究実施状況の報告。
第4回	1年文献検索の計画。 2年データ分析の方針検討。
第5回	1年文献調査の報告。 2年中間報告発表資料の検討。
第6回	1年文献調査の報告。 2年中間報告発表資料の検討。
第7回	1年リサーチ・クエスションの検討。 2年中間報告発表資料の最終確認。
第8回	2年中間報告（2年次第1回＝通算第2回）
第9回	1年研究倫理に関する説明。 2年中間発表に基づくデータ分析方針の再検討。
第10回	1年研究方法の検討。 2年データ分析。
第11回	1年質問紙またはインタビューガイドの作成・検討。 2年データ分析。
第12回	1年調査対象者の検討。 2年データ分析。
第13回	1年質問紙などの作成・検討。 2年データ分析。
第14回	1年質問紙などの作成・検討。 2年データ分析。 夏休み中の研究活動の計画。
第15回	1年「研究倫理委員会申請書」等の検討。 2年分析結果に基づく仮説の考察。
第16回	1年「研究計画書」最終確認。 2年分析結果に基づく仮説の考察。
第17回	中間発表（1年次第1回＝通算第1回）
第18回	1年「研究倫理審査申請書」等の修正。 2年「中間発表資料」最終確認。
第19回	中間発表（2年次第2回＝通算第3回）
第20回	1年「研究倫理審査申請書」最終確認。 2年中間発表に基づく結果と考察の再検討。
第21回	1年実証研究の準備（面接調査の練習など）。 2年先行研究と関連つけた考察。
第22回	1年データ分析の練習。 2年各自の研究の臨床心理的意義の考察。
第23回	1年実証研究開始、データ分析の練習。 2年各自の研究の限界と今後の課題。

第24回	1年実証研究実施状況の報告。 2年修士論文最終稿ゼミ内で締め切り。
第25回	1年実証研究実施状況の報告。 2年修士論文最終稿の修正指示。
第26回	1年実証研究実施状況の報告。 2年修士論文提出原稿の確認。
第27回	1年春休み中の研究活動の計画。 2年最終発表・口述試験の準備。
第28回	2年最終発表会・口述試験
第29回	—
第30回	—
第31回	—
第32回	—

【成績評価】

試験（0%）、レポート（0%）、小テスト（0%）、課題提出（30%）、その他の評価方法（70%）

【成績評価（備考）】

授業への参加状況および研究への取り組み、中間発表、その他の課題、研究成果などにより総合的に評価する。

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

各自が研究課題を設定して文献研究・実証研究・論文執筆を進める。研究を進める際に必要となる研究計画書（中間発表資料を兼ねる）、研究倫理審査申請書、説明書や同意書などを作成する。
本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

毎回の授業で、研究の進捗状況と内容について院生各自からの報告を受け、院生同士で意見交換し、指導教員からコメントする。
研究計画書、研究倫理審査申請書、説明書・同意書、最終発表会配布資料など、院生が作成した原稿をゼミで検討し、必要に応じて面談またはメールなどで個別に修正方針を伝える。中間発表会に院生と教員が全員参加し質疑応答をする他、発表会後に個別にも助言する。
提出された修士論文に対し、口述試験の際に主査・副査から評価を伝え、修正箇所を指示する。評価表の自由記述部分を渡す。最終発表会に出席した教員も質疑応答に参加する。

【ディプロマポリシーとの関連性】

ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。

【テキスト】

特に定めない。

【参考文献】

研究内容に関する文献は各自が研究テーマに合わせて収集する。実証研究の方法やデータ分析に関する文献は各自の研究手法に合わせて収集する。論文の書き方に関して自分に合った文献を見つけて手許において参照することを勧める。

特別研究B(キリスト教と臨床心理学)

4単位：通年

1～2年 必修

ジェームス・サック

【科目補足情報】

—

【到達目標】

キリスト教を基礎におく臨床心理学は、その目標とアプローチ方法において、一般臨床心理学と多くの共通点を持つが、大きな違いは前者が心理学の背景に聖書の神の存在を認め、キリストの福音を基礎とする点である。人間の魂のケア、すなわち、癒しの領域に関わるキリスト教的アプローチを、神無き現代社会の深刻な諸問題にどのように対応させていくことができるか。そのことを学ぶことが本研究の中心的課題である。宗教と社会福祉と心理学が重なる領域にある臨床心理学を模索する。信仰をもっている人も、持たない人も受講できる。

【履修の条件】

キリスト教と臨床心理学の分野で修士論文を書く人・書いている人のための特別研究コース(ゼミ)です。「特別研究」は臨床心理学専攻の必修科目である。特別研究A またはBを選択して、通年4単位を2年間、合計8単位を履修 する必要がある。

【講義概要】

大学院での個々の講義や演習および実習を通して学んだ臨床心理の理論と技法を統合するため、また臨床心理援助の対象となる課題に関する理解を深めるために各自がテーマを定めて研究する。2年間を通じて、修士論文作成のための指導を行う(特別研究A・B共通)。

新入生に関しては各自の研究したいテーマや研究方法を考慮して指導担当教員の希望調査を提出する。希望調査を踏まえてゼミ配属が決定される。この後は、担当教員ごとにゼミ形式の授業が実施される。また、1年次に1回、2年次に2回の中間発表を行う。

ゼミでは、各自の進度に合わせて、関心のあるテーマの選定、研究課題としての具体化、文献研究の報告、量的研究方法や質的研究方法の紹介、研究計画書の作成、調査紙の作成、面接調査の練習、研究倫理委員会への提出書類作成、収集したデータの整理と報告、データの分析・考察などを進めていく。

■授業計画

第1回	オリエンテーション。特別研究の概要。各ゼミの紹介。1～2年生の懇談。
第2回	各ゼミでのグループ形成。関心テーマの紹介。2年春休み中の研究活動の報告。
第3回	1年関心テーマの明確化。2年実証研究実施状況の報告。
第4回	1年文献検索の報告。2年データ分析の方針検討。
第5回	1年文献調査の報告。2年中間報告発表資料の検討。
第6回	1年文献調査の報告。2年中間報告発表資料の最終確認。

第7回	2年中間報告(2年次第1回=通算第2回)
第8回	1年リサーチ・クエスチョンの検討。 2年中間発表に基づくデータ分析方針の再検討。
第9回	1年研究倫理に関する説明。 2年データ分析。
第10回	1年研究方法の検討。 2年データ分析。
第11回	1年質問紙またはインタビューガイドの作成・検査。 2年データ分析。
第12回	1年調査対象者の検討。 2年データ分析。
第13回	1年質問紙などの作成・検討。 2年データ分析。
第14回	1年質問紙などの作成・検討。 2年データ分析。
第15回	夏休み中の研究活動の計画。
第16回	1年「研究倫理委員会申請書」等の検討。 2年分析結果に基づく仮説の考察。
第17回	1年「研究計画書」最終確認。 2年分析結果に基づく仮説の考察。
第18回	中間発表(1年次第1回=通算第1回)
第19回	1年「研究倫理審査申請書」等の修正。 2年「中間発表資料」最終確認。
第20回	中間発表(2年次第2回=通算第3回)
第21回	1年「研究倫理審査申請書」最終確認。 2年中間発表に基づく結果と考察の再検討。
第22回	1年実証研究の準備(面接調査の練習など)。 2年先行研究と関連づけた考察。
第23回	1年実証研究の準備(面接調査の練習など)。 2年先行研究と関連づけた考察。
第24回	1年データ分析の練習。 2年各自の研究の臨床心理的意義。
第25回	1年実証研究開始、データ分析の練習。 2年各自の研究の限界と今後の課題。
第26回	1年実証研究実施状況の報告。 2年修士論文最終稿ゼミ内で締め切り。
第27回	1年実証研究実施状況の報告。 2年修士論文最終稿の修正指示。
第28回	1年春休み中の研究活動の計画。 2年最終発表・口述試験の準備。
第29回	2年最終発表会
第30回	2年口述試験
第31回	—
第32回	—

【成績評価】

試験(0%)、レポート(0%)、小テスト(0%)、課題提出(30%)、その他の評価方法(70%)

【成績評価(備考)】

授業への参加状況および研究への取り組み、中間発表、その他の課題、研究成果などにより総合的に評価する。

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

各自が研究課題を設定して文献研究・実証研究・論文執筆を進める。研究を進める際に必要となる研究計画書(中間発表

資料を兼ねる)、研究倫理審査申請書、説明書や同意書などを作成する。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習(予習・復習等)が必要。

【試験・レポート等のフィードバック】

毎回の授業で、研究の進捗状況と内容について院生各自からの報告を受け、院生同士で意見交換し、指導教員からコメントします。

研究計画書、研究倫理審査申請書、説明書・同意書、最終発表会配布資料など、院生が作成した原稿をゼミで検討し、必要に応じて面談またはメールなどで個別に修正方針を伝えます。

中間発表会に院生と教員が全員参加し質疑応答をする他、発表会後に個別にも助言をします。

提出された修士論文に対し、口述試験の際に主査・副査から評価を伝え、修正箇所を指示します。評価表の自由記述部分を渡します。最終発表会に出席した教員も質疑応答に参加します。

【ディプロマポリシーとの関連性】

ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。

【テキスト】

特に決めない。

【参考文献】

研究内容に関する文献は各自が研究テーマに合わせて収集する。実証研究の方法やデータ分析に関する文献は各自の研究方法に合わせて収集する。論文の書き方に関して自分に合った文献を見つけて手許において参照することを勧める。

【備考】

—

心理学研究法特論

2単位：前期1コマ

1～2年

北村 英哉

【到達目標】

心理学のさまざまな研究法を専門的に理解し、自分の研究計画に役立てられるようにすることを到達目標とする。これを通して、ディプロマポリシーにある広い学識と、研究遂行が可能な高度な専門知識や技術を備えさせる準備を行うことを目標とする。

【履修の条件】

特になし。心理学系の学部卒業でない者も十分理解できるように講義を行う。

【講義概要】

心理学の研究を一つの学問レベルで提示するには、結論の妥当性を保証する「研究方法」が必要になる。心理学の特徴はその方法にあると言っても過言ではなく、同じテーマであっても

心理学独自の取り扱い方はその方法を生かしたアプローチにあると言ってもよいだろう。この講義では、心理学の多様な方法論を学び、自らの研究にいかんにかそれを適用していくかを考え、実践していけるようになることをねらいとする。また、調査法、実験法、観察法、面接法など量的研究、質的研究のさまざまな方法の利点と欠点を広く知り、研究テーマや目的との整合性が考えられるように理解を深めていく。必要な範囲の統計的な説明も若干加えるつもりである。主として板書によって説明するが時にパワーポイントを用いることがある。また近年の動向に鑑み、専門的な調査や尺度運用ができるよう、また基礎的な統計解析についても必要に応じて補い、有用な情報を与える。授業のなかでも随時質問を受け付け、理解をより確実にするように配慮する。

■授業計画

第1回	心理学とその方法。科学的な実証とは。
第2回	調査法とその留意点。
第3回	尺度構成の実際1：尺度のつくり方
第4回	尺度構成の実際2：項目の構成
第5回	尺度構成の実際3：項目分析
第6回	尺度の信頼性と妥当性
第7回	相関研究と因果の研究：調査と因果
第8回	調査データと多変量解析、その運用
第9回	実験法の留意点
第10回	実験の論理と実際
第11回	面接法と観察法。量的データと質的データ。
第12回	フィールドワーク
第13回	ライフストーリーインタビュー
第14回	グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）およびその他
第15回	レポート
第16回	—

【成績評価】

試験（0%）、レポート（80%）、小テスト（0%）、課題提出（20%）、その他の評価方法（0%）

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。毎回リアクションペーパーを提出する。特に関心のある研究法については、紹介した文献で詳細を学習してよく理解を深めることを求む。

【試験・レポート等のフィードバック】

課題提出については個々にコメントをつける他、全体に対して回答をフィードバックすることもある。レポートについては参照できる情報を用意する。

【ディプロマポリシーとの関連性】

広い学識を身につけ、高度な専門的知識を身につける基本、土台となる方法論上の高度な専門的知識を学び、専門家としても自発的研究を維持することが可能な能力を身につける。

【テキスト】

村井潤一郎編著 2012『Progress & Application 2 心理学研究法』サイエンス社 2200円+税

【参考文献】

アン・サール著（宮本聡介・渡邊真由美訳）2005『心理学研究法入門』新曜社。高野陽太郎・岡隆（編）2004『心理学研究法－心を見つめる科学のまなざし』有斐閣。W.J.レイ 2003『エンサイクロペディア心理学研究方法論』北大路書房。杉山憲司・堀毛一也（編著）1999『性格研究の技法』福村出版。下山晴彦（編著）2000『臨床心理学研究の技法』福村出版。保坂亨他（編著）『心理学マニュアル 面接法』鎌原雅彦他（編著）『心理学マニュアル 質問紙法』中澤潤他（編著）『心理学マニュアル 観察法』北村英哉『なぜ心理学をするのか』以上4冊、北大路書房。

心理統計法特論Ⅰ

2単位：前期1コマ

1～2年

谷井 淳一

【科目補足情報】

対面授業のつもりで作成している。遠隔授業になった場合は、変更をメールにて連絡する予定である。

【到達目標】

- ①質問紙調査の方法を実習し理解する。
- ②因子分析の方法を体験的に学ぶ。

【履修の条件】

心理学を学部で学んでいない人もいるので、初歩的な内容から始めて、丁寧に講義し論文が書けるレベルまでを目指す。学部で習っていない人はあまり毛嫌いせずに体験的に学びを深めてほしい。

【講義概要】

質問紙調査の方法について体験的に学んでいく。グループで実際に調査票を作成し、調査実施する。得られたデータをパソコンを用いて入力しデータをチェックする方法を学ぶ。そののち、因子分析を用いて、項目内容を精選する。これら一連の流れを体験的に実習する。この授業を通じて言葉のセンスを磨いてほしい、特に、自分が作成した項目が、調査協力者にどのように受け取られ反応が返ってくるかを体得することが大切である。質問紙に記入している調査対象者がどのように応答しているかを想像できるようにデータを読み取る力をつけてほしい。質問紙を作るまでのプロセスは質的研究に近いものなので、自分は質的な研究をしたいと考えている人も、質問紙作成の体験は是非真剣に取り組んでほしい。

■授業計画

- | | |
|-----|--|
| 第1回 | 因子分析を用いた論文を探す
質問紙尺度を用いた研究事例 |
| 第2回 | 因子分析表の見方 |
| 第3回 | グループ分けと構成概念表の作成1
(グループごとに、論文を選び、その論文の因子分析結果を参考にしながら、質問紙尺度の改訂版、その概念表を作成する) |
| 第4回 | グループ分けと構成概念表の作成2 |
| 第5回 | 調査票の作成 |

- | | |
|------|---------------------------------|
| 第6回 | 尺度の水準とワーディング |
| 第7回 | Web調査の方法 |
| 第8回 | 調査の実施 |
| 第9回 | データ入力とデータチェック |
| 第10回 | 因子分析の方法 |
| 第11回 | 因子数の決定と因子の命名 |
| 第12回 | 因子分析表の整理 |
| 第13回 | 下位尺度別に男女別の平均値・標準偏差を算出し
検定の実施 |
| 第14回 | 相関の算出と表作成 |
| 第15回 | レポートの作成 |
| 第16回 | — |

【成績評価】

試験 (0%)、レポート (100%)、小テスト (0%)、課題提出 (0%)、その他の評価方法 (0%)

【成績評価（備考）】

質問紙調査実施から分析するまで、グループ作業として実施したことをレポートしてもらう。

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

復習を中心に定着を図ることが望まれる。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

各段階ごとに進行具合をチェックし、それに対して、フィードバックを行ってすすめていく。

【ディプロマポリシーとの関連性】

この科目はディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な学識を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につける」ことを目標とする。特に研究を企画・実施・分析するための方法の習得を目的とする。

【テキスト】

「新版要説心理統計法」山上暁・倉智佐一著 北大路書房
(この教科書でなくてもいいが、何か一つ統計の教科書を持っていたほしい)

【参考文献】

「社会心理学研究入門」末永俊郎編 東京大学出版会
「SPSSとAmosによる心理・調査データ解析」小塩真司著 東京書籍

【備考】

昨年作成した動画も適宜利用したいと考えている。

心理統計法特論Ⅱ

2単位：後期1コマ

1～2年

谷井 淳一

【到達目標】

- ①多変量解析の色々を理解し、適切に分析方法を選択できる

力をつけること。

②各自の研究目的に従って、どのような分析方法が望ましいかを判断し、適切な研究計画をたてる力を育成する。

【履修の条件】

心理統計法特論Ⅰを履修済みであることが必要。ただし、学部段階で心理統計法および質問紙法を履修し理解している場合は、後期から受講してもらってもよい。

【講義概要】

多変量解析の代表として重回帰分析について詳しく解説する。さらに、主成分分析、因子分析、判別分析、共分散構造分析などについてその違いを理解できるよう指導する。分散分析、とくに主効果や交互作用について詳しく学ぶ。最後に3時間程度、推測統計の基礎について講義する。

■授業計画

- 第1回 多変量解析について
- 第2回 重回帰分析をパソコンでやってみる
- 第3回 重回帰分析の理論的理解
- 第4回 色んな分析のパスモデルとしての表現
- 第5回 最小二乗基準と微分
- 第6回 共分散構造解析
- 第7回 主成分分析と固有値
- 第8回 因子分析と回転
- 第9回 判別分析とクラスター分析
- 第10回 ロジスティック回帰分析
- 第11回 1要因分散分析と多重比較
- 第12回 2要因分散分析と交互作用
- 第13回 下位検定のいろいろ
- 第14回 zの表の見方と1.96の意味
- 第15回 統計的検定について、z検定、t検定
- 第16回 —

【成績評価】

試験（0%）、レポート（100%）、小テスト（0%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（0%）

【成績評価（備考）】

統計法は結局実際に自分で調査して自分のデータをとって分析して初めて理解が深まる。そのための体験としてこの授業における実習が大切である。後期の授業はアラカルト的な授業なので、レポートはその体験の感想程度のものをA4判用紙で1枚程度書いてもらえばよい。

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

確実に復習して知識の定着をはかってほしい。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

各段階でチェックをしながら実施する。授業中に、必要に応じてフィードバックを行う。

【ディプロマポリシーとの関連性】

この科目は「広い学識と高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけること」

を目的にする。研究を企画・実施・分析に必要な方法について学習する。

【テキスト】

プリントを用意する。

【参考文献】

「心理統計学の基礎—統合的理解のために」南風原朝和著
有斐閣アルマ
「心理・教育のための多変量解析法入門—基礎編&事例編」
渡辺洋著 福村出版

臨床心理学研究法特論

2単位：前期

1～2年

荘島 幸子

【到達目標】

- ①質的研究法的基本的な考え方、各手法に関する基礎的な知識を得る。
- ②質的データの収集および分析に取り組み、質的研究法について実践的に理解する。

【履修の条件】

出席が全体の3分の2に満たない場合は、単位認定の対象とはしない。

【講義概要】

近年注目を集めている質的研究法について学習し、自らの研究基盤をつくることを本講義の目的とする。授業では、講義だけでなく、半数以上の回で実際の研究例を読み進めることで理解を深めていく。また、自分自身でもインタビューや観察を通じて、データ収集とその分析に取り組み、実践的に学んでいく。この授業は研究法（つまり、方法）を学ぶ授業であり、方法を実践する自分自身のスタイルを自覚する授業でもある。授業で課される宿題や、研究法の実践、分析プロセスを体験することを通じて、技法の獲得のみならず、自己への覚知を促していきたい。

■授業計画

- 第1回 オリエンテーション：質的研究とは
- 第2回 質的研究を読む（議論）
- 第3回 観察法の基礎
- 第4回 インタビュー法の基礎
- 第5回 インタビューガイドの作成（1）問いを立てる
- 第6回 インタビューガイドの作成（2）インタビューガイドの精緻化
- 第7回 インタビューの実施
- 第8回 トランスクリプトの作成
- 第9回 質的研究の実習（1）データの読み
- 第10回 質的研究の実習（2）データを分析する
- 第11回 質的分析の実習（3）モデルをまとめあげる
- 第12回 質的分析の様々な方法
- 第13回 質的研究の質
- 第14回 成果（分析結果）の発表およびレポート講評

第15回 —
第16回 —

〔成績評価〕

試験 (0%)、レポート (70%)、小テスト (0%)、課題提出 (20%)、その他の評価方法 (10%)

〔成績評価（備考）〕

「その他の評価方法」は授業内のプレゼンテーションによる。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

予習として、前授業の学習内容を振り返ってから授業に参加すること。また、論文を読む回には当該論文を読んだ上で参加すること。

提示された課題に取り組む上で、配布資料及び講義概要の復習は必須となる。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

授業では、その都度教員のコメントをフィードバックする。また事前に提出するレポートは添削を行うので、本レポート作成の際に参考にしてほしい。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。

〔テキスト〕

特に指定しない。講義用プリントを配布する。

〔参考文献〕

- ①能智正博 (2011)『質的研究法』東京大学出版会
- ②スタイナー・クヴァール (2016)『質的研究のための「インター・ビュー」』新曜社
- ③川喜田二郎 (1967)『発想法』(中公新書)
- ④無藤 隆・南 博文・麻生 武・やまだ ようこ・サトウ タツヤ (編) (2004) 質的心理学—創造的に活用するコツ (ワードマップ) 新曜社

発達心理学特論

2単位：後期1コマ

2年

高城 絵里子

〔到達目標〕

- ①人間の発達・成長についての心理機制を理解する。
- ②発達心理学的研究法と論文のスタイルを学び、自身の修士研究に役立てる。
- ③生涯発達の観点から人生の各段階の発達課題と心理的問題を理解し、自身の臨床実践や支援の可能性について考察を深める。

〔履修の条件〕

発表と討論を中心に進め、実習も行う授業であるため、履修者の積極的な参加と発言を求める。自らの修士研究や臨床実践

と発達心理学との関連を考察し、研究・実践に新たな展望を得る意欲のある学生を望む。

〔講義概要〕

テキスト講読では、ピアジェの理論とその後の発達心理学研究の動向を中心に扱う。各章ごとに担当者を決めて発表、内容についての討論、ビデオ学習および教員による補足講義を行う。発表者にはテキストの担当部分に加え、関連する理論や研究を調査した内容を含めた資料を作成すること、授業内で発表および討論の進行を務めることが求められる。文献講読を通して発達に関する問題とその支援方法を学び、最後に発達支援現場において実習を行うことによって、心理的支援の実践を理解する。

■授業計画

- | | |
|------|--|
| 第1回 | ガイダンス
修士研究と発達心理学との関連 |
| 第2回 | 文献講読発表①
発達心理学の歴史と代表的な研究者の概観 |
| 第3回 | 文献講読発表②
胎児期・新生児期を対象とした発達心理学理論、研究の概観 |
| 第4回 | 文献講読発表③
乳児期の知覚および運動発達 |
| 第5回 | 文献講読発表④
乳児期の認知的発達と愛着の形成
ピアジェの認知発達段階理論、ボウルビイの愛着理論を中心として |
| 第6回 | 文献講読発表⑤
幼児期の言語発達と描画
ピアジェとヴィゴツキーの理論を中心として |
| 第7回 | 文献講読発表⑥
幼児期の認知的発達
ピアジェの認知発達段階理論とその後の研究における反論 |
| 第8回 | 文献講読発表⑦
児童期の認知的発達
ピアジェの認知発達段階理論を中心として |
| 第9回 | 文献講読発表⑧
児童期の道徳観と学校教育の影響 |
| 第10回 | 文献講読発表⑨
思春期、青年期の発達
ピアジェによる説明と、フロイト派における考え方を中心に |
| 第11回 | 文献講読発表⑩
成人期・中年期・老年期の発達
生涯発達の視点とエリクソンの心理社会的発達理論を中心 |
| 第12回 | 発達の問題と支援
発達障害について概観し、支援の方法を学ぶ |
| 第13回 | 発達の問題と支援
実際の発達支援の現場に入り、支援の方法を体験的に学ぶ。 |
| 第14回 | 発達の問題と支援/本講のまとめ
見学を踏まえて、発達臨床の意義と今後の課題について議論する。 |

各自の研究の展望、臨床実践について最終討論を行う。

第15回 ー

第16回 ー

〔成績評価〕

試験 (0%)、レポート (0%)、小テスト (0%)、課題提出 (50%)、その他の評価方法 (50%)

〔成績評価（備考）〕

課題提出とは、発表原稿とフィードバック用紙の提出を指す。その他とは、授業への出席、発表の内容と授業における討論への参加態度を指す。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

本科目では各授業回におよそ200分の準備学習を必要とする。予習では、発達心理学の代表的な理論について各自あらかじめ復習しておくこと、また文献を熟読し疑問や考察を整理しておくこと、文献講読・論文講読発表担当部分についてレジュメ作成とプレゼンテーションの練習を十分にしておくことを求める。復習として各授業での討論を踏まえた考察を行うことを勧める。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

文献購読発表課題については、授業内で口頭でコメントを行う。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、臨床心理士と公認心理師に必要な、「クライアントへの臨床的支援能力」の修得を目指す。

〔テキスト〕

「発達心理学ガイドブックー子どもの発達理解のために」 マーガレット・ハリス／ガート・ウェスターマン 明石書店

〔参考文献〕

「心理臨床学研究」「発達心理学研究」 諸雑誌

〔備考〕

「実務経験のある教員による科目」 臨床心理士／公認心理師としての発達現場における臨床経験を踏まえて、発達支援に関する知識と技術を教示する。

教育心理学特論

2単位：前期1コマ

1～2年

北村 英哉

〔到達目標〕

臨床心理学、特に学校現場での心理臨床に役立つ教育心理学の基本概念と新たな動向を学習、修得し、その教育現場における有用性について心理学的立場から説明ができるようになること、ならびに教育事象に関わる児童・生徒の心理学的特質、教育現場の集団的ダイナミクスを社会・文化と関連づけて知る

ことを到達目標とする。

〔履修の条件〕

特になし。初心者にもわかりやすいように講義する。

〔講義概要〕

教育については、社会のなかで多くのことが多様な立場から語られている。しかし、そのほとんどは実証的なデータに基盤を置かない自身の個人的経験に過ぎない想い出とも言える妥当性を欠いた言述である。そもそも学校や社会について実証的、科学的にものを考えるとはどういったことであるのかを十分知り、心得た上で、教育事象に関わって戦後教育心理学が脈々と積み上げてきた科学的知識を習得し、現実 に即した立ち位置から学校現場に関わることはきわめて重要であろう。大切なのは個人的な経験などは取っ払い思い込みから脱したまなざしで現場と関わることである。教育を取り巻く状況はめまぐるしく変化し、自身の学校体験などを過度に参照することは危険でさえる。また人間の発達を知り、その文化・社会との相互作用を知れば、自分自身とは異なる時代、異なる社会状況のなかで育ちつつある児童・生徒がいかに自分とは異なる感性と考え方を持つものであるか目を開かれるだろう。教育に関わり、生徒に関わるものはこうした文化・社会の影響の実際に対してきわめてセンシティブな感性と理論的な分厚いバックグラウンドを持っていなければならない。

また、心理学は分野によってさまざまではあるが、理論と実証の緊密な関係が特徴である。さまざまな理論を学ぶことによって、調査を行ったり、フィールドに入って研究や臨床実践を行うに際し、「理論的感受性」は非常に大切であり、そうした準備を本講義は与える。修士論文の研究に際しても研究者は自らの理論的装備をもった上で研究にかからないと現象に対して素手で格闘することになってしまう。人間についての現象、行動を一步離れたところから概念化する作業に慣れておくことは重要であり、心理学は人間関係の学問であり、このような概念を多く提供している。その知見は学校生活や日常生活で行われている人間関係から得られているが、考え方をすることで、概念の切り出し方や目のつけ方などが自ずと学習され、視点が鍛えられる。また、社会・文化と発達・教育の関係を理論的にも深く知ることによって、異なる時代を生きる児童・生徒への深い理解や温かい共感的まなざしを獲得することもできる。自分と異なることを否定するのではなく、いかに人が成長し、生きていくかの理論と法則を客観的に知り、心得ておくことにより、学校臨床のあり方は大きな影響を受けるであろう。また、すべてを親子関係や家族関係に還元したり、人格障害や発達障害という個人差だけに着目するのではなく、幅広く柔軟な視野を養うことによって、現場や当事者に害をなす誤った臨床行為を防いでくれる。理論を知することは、自らの研究態度や臨床態度についても、いっそう公平な向き合い方、虚心な理解の仕方を形成していく役に立つだろう。講義は主に板書とパワーポイントを用いる。大学院の少人数のクラスであるから授業中にも随時質問を受け付け、対話的に進めていく。

■授業計画

- 第1回 教育と心理学、人間。教育とは何か。
- 第2回 発達の法則と人間。
- 第3回 遺伝と環境、その正しい理解。
- 第4回 知能と学業、学習行動。

- 第5回 認知と学習、記憶。
 第6回 学習方略。正しい学習の仕方とは。
 第7回 学習と動機づけ。目標の達成。
 第8回 学習と動機づけ。原因の推論、感情との関わり。
 第9回 がんばり (Grit)、粘り強さ、自己制御。
 第10回 文化と学習。何のための学習か。
 第11回 どうしたらほめられるのか、叱られるのか、制御焦点の問題。
 第12回 教室の暗黙裡のルール。
 第13回 市民教育とものの考え方、道徳の発達。
 第14回 教師-生徒関係。クラスの集団関係。グループダイナミクス。
 第15回 レポート
 第16回 —

【成績評価】

試験 (0%)、レポート (70%)、小テスト (0%)、課題提出 (20%)、その他の評価方法 (10%)

【成績評価 (備考)】

授業中における質問、理解を深める発言、教員の発問に対する応答など。

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

本科目では各授業回におよそ200分の準備学習 (予習・復習等) を必要とする。特に関心のあるテーマはそれ以上に積極的に参考文献、授業で紹介する文献で学習して欲しい。

【試験・レポート等のフィードバック】

課題提出については個々にコメントを付けるほかに全体に役立つ場合、全体へのフィードバックとして補足説明をすることがある。レポートについては事後に参照できるウェブサイトでフィードバックを与える。

【ディプロマポリシーとの関連性】

広い学識と高度な専門的知識を与える。学校臨床においては、生徒、クライアントの課題を査定・理解し、適切に目標を設定し、目標に向けて臨床的支援を行う理論的基盤や人間的基盤を培うことも含む。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献】

鎌原雅彦・竹綱誠一郎 2015『やさしい教育心理学』有斐閣 (¥2,052) 北村英哉・大坪庸介 2012『進化と感情から解き明かす社会心理学』有斐閣 (¥1,995) 中澤潤編 2008『よくわかる教育心理学』ミネルヴァ書房 北村英哉・木村晴 (編) 2006『感情研究の新展開』ナカニシヤ出版 下山晴彦編 1998『教育心理学2発達と臨床援助の心理学』東大出版会 シャンク&ジマーマン 2009『自己調整学習と動機づけ』北大路書房。

司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開

2単位：集中

1～2年

室城 隆之

【到達目標】

1. 司法・犯罪分野に関する理論的枠組みを身につける。
2. 司法・犯罪分野に関わる公認心理師の実践について理解する。

【履修の条件】

授業初回までにテキストを購入しておくこと。授業中は、グループ討議、発表、ロールプレイなどに積極的に参加すること。

【講義概要】

最初に、司法・犯罪分野に関する手続きの流れと犯罪心理学の理論的枠組みについて学習する。次に、司法・犯罪分野に関わる公認心理師の実践について、各実践領域別に学習する。最後に、司法・犯罪分野に関わる公認心理師の実践の課題と展望について検討する。テキストおよび講義資料を用いて、講義、グループ討議と発表、視聴覚教材の活用、ロールプレイなどを行う予定である。

■授業計画

- 第1回 犯罪・非行についての基本的知識
 第2回 成人犯罪者処遇の流れと少年保護事件手続
 第3回 犯罪・非行の理論
 第4回 犯罪・司法に関わる機関・施設における活動
 第5回 犯罪捜査と心理学・犯罪予防と心理学
 第6回 犯罪・非行の心理学的アセスメント
 小テスト
 第7回 児童相談所における非行への対応
 第8回 家庭裁判所における非行への対応と少年鑑別所
 第9回 保護観察所での犯罪・非行への対応と少年院での処遇
 第10回 少年事件の面接 (ロールプレイ)
 第11回 刑事施設における成人犯罪者への教育・処遇
 犯罪からの立ち直り
 第12回 家庭裁判所の家事事件についての基本的知識
 第13回 家事事件の面接 (ロールプレイ)
 第14回 犯罪被害についての基本的知識
 司法・犯罪分野に関わる公認心理師の実践の課題と展望
 小テスト
 第15回 —
 第16回 —

【成績評価】

試験 (0%)、レポート (20%)、小テスト (35%)、課題提出 (0%)、その他の評価方法 (45%)

【成績評価 (備考)】

2回の小テスト、レポートおよび毎回講義の終了時に提出してもらうアクション・ペーパーで評価する。

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

本科目では、予習においては、テキストの該当箇所を読んでおくこと。復習においては、講義資料、テキスト、必要に応じて参考文献を読んで、理解を定着させること。

【試験・レポート等のフィードバック】

毎回提出されるリアクションペーパーのフィードバックを講義時に行う。レポートに関する解説も授業内に実施する。また、小テストの解答・解説は、第14回の講義中に実施する。

【ディプロマポリシーとの関連性】

この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、臨床心理士と公認心理師に必要な「臨床心理の専門家としての使命と社会的責任」「クライアントを尊重する姿勢と倫理や法の理解と遵守」「クライアントの課題の査定・理解と目標に向けた臨床的支援を行う能力」「他職種の専門家と連携して、クライアントを支援すると共に、臨床心理の知見を地域社会に還元し、貢献する能力」の修得を目指す。

【テキスト】

- ・森丈弓ら著『司法・犯罪心理学』サイエンス社 3,080円
- ・その他、必要に応じてプリントを配布する。

【参考文献】

- ・大淵憲一著『犯罪心理学－犯罪の原因をどこに求めるのか』培風館 3,080円
- ・その他、必要に応じて講義内に指定する。

家族心理学特論(家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践)		
2単位：後期1コマ	1～2年	
福山 和女		

【到達目標】

家族関係・集団、地域社会における心理支援の各論理と実践を学習し、それに基づくスーパービジョンの方法と技術をも習得する。

【履修の条件】

本学大学院総合人間学研究科・臨床心理学専攻修士課程に正規に在学する院生のみが履修できる。
履修者の目標設定に基づく。参加型形式をとる。履修者が目標達成に積極的に取り組むことを要請する。
スーパービジョン体験が中心である。

【講義概要】

家族関係、集団の関係性に焦点を当てた心理支援の理論と方法に焦点を当て、理論の適用について考察し、また、各理論に基づくスーパービジョンの理論と方法を習得し、理論と平行して実践的な研究を進めていく。また、地域社会や集団・組織に働きかける心理学的援助に関する理論と方法について研究を進める。治療構造の計画を立てるなど、心理に関する相談、助言、指導などに、習得した理論や方法を適用し、応用力を

つける。専門家にとっては、自己の分析、自己評価、自己覚知を通して訓練することが必須条件である。本講義では、レーニング・プロセスにスーパービジョンの概念と方法を適用し、心理療法の養成プロセスを段階的に体験する学習方法を採用する。

■授業計画

第1回	スーパービジョンの歴史の変遷と日本におけるあゆみ
第2回	スーパービジョンの必要性と機能
第3回	組織、職位、職種からのスーパービジョンの貢献
第4回	心理療法面接の導入期
第5回	介入開始期
第6回	問題の変革期への働きかけ
第7回	心理支援の家族関係に焦点を当てた理論と方法－開始期を中心に
第8回	心理支援の集団関係に焦点を当てた理論と方法－安定期を中心に
第9回	心理支援の地域関係に焦点を当てた理論と方法－終結期を中心に
第10回	心理的社会的アプローチによるスーパービジョン
第11回	家族システムズ論によるスーパービジョン
第12回	組織管理論と心理支援との関係に焦点をあて、スーパービジョンに应用する。
第13回	2者関係に焦点を当てた心理支援と個人スーパービジョンとの関係
第14回	世代間スーパービジョン スーパービジョンの実施上の留意点
第15回	—
第16回	—

【成績評価】

試験 (20%)、レポート (30%)、小テスト (20%)、課題提出 (30%)、その他の評価方法 (0%)

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

テキストや参考文献から、該当する理論や技術について予習・復習することを薦める
各科目の授業に本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

レポートなどで、各授業のフィードバックをして、内容の積み上げを行う。

【ディプロマポリシーとの関連性】

ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。研究倫理の順守、心理支援や相談の対象者、集団、組織、地域などの尊厳の保持を原則として、専門家としての姿勢を保持しながら、研究に携わることを求める。

【テキスト】

福山和女編著 (2005) 『ソーシャルワークのスーパービジョン』ミネルヴァ書房 2,800 円+税

【参考文献】

中村伸一他『説き明かし・私の家族面接初回面接の実際』
[DVD] 2010 中島映像 46,000 円

【備考】

出席日数、レポート提出など総合的評価である。
参加態度、意見交換、フィードバックなどの質と量を加味する

精神医学特論

2単位：前期1コマ	1～2年
倉本 英彦	

【到達目標】

心理職・福祉職・医療職は協働することが多く、共通の専門的知識を有することが必要である。そのもっとも基礎となる知識体系である精神医学を学び、身体、精神、社会と文化という側面からの多角的なアプローチができるようにする。

【履修の条件】

臨床心理学専攻生・社会福祉学専攻生で、履修登録を行った者。

【講義概要】

精神医学とは何だろうか？臨床心理学や社会福祉学との関連から位置付けてみよう。精神医学の方法論は？生物、精神、心理、社会的次元から探ってみよう。精神科医療の現状とは？日本と世界の精神科医療の実際を知ろう。精神障害とは？異常と正常、病気と健康、精神の病とは何か。精神障害の歴史や概念、そして原因、症状、疫学、診断、治療、予後、リハビリテーションなど、個々の疾患の特徴を体系的に学ぼう。授業形態については、基本的に講義形式になるが、わかりやすいようにDVD映像を使用したり、トピックに沿った発表形式で行うことにする

■授業計画

第1回	オリエンテーション 精神医学入門
第2回	異常と正常、病気と健康、素質と環境
第3回	精神症状、状態像、症候群、精神障害の体系、精神疾患概念の歴史
第4回	心因によるもの（1）心身症、神経症とストレス関連障害
第5回	心因によるもの（2）睡眠・摂食・性関連障害
第6回	内因によるもの（1）統合失調症
第7回	内因によるもの（2）気分障害
第8回	器質因によるもの（1）脳の急性障害
第9回	器質因によるもの（2）脳の慢性障害
第10回	器質因によるもの（3）アルコール・薬物関連障害
第11回	児童・青年期精神医学（1）情緒と行動の問題
第12回	児童・青年期精神医学（2）発達障害
第13回	性格のかたより、パーソナリティ障害
第14回	精神保健福祉法 司法精神医学
第15回	－
第16回	－

【成績評価】

試験（0%）、レポート（40%）、小テスト（40%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（20%）

【成績評価（備考）】

臨床職に就くものとして適切で積極的な授業へのかかわりも考慮する

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

予習：シラバスに沿った箇所の教科書や文献をあらかじめ読んでおく

復習：講義内容や発表をよく振り返り、ノートにまとめる
本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。合計14回の授業で45時間となる。

【試験・レポート等のフィードバック】

講義内小テストの解答・解説は、テストが実施された当日か次回に行う。

発表やレポートについて、授業内に適宜口頭でコメントする。

【ディプロマポリシーとの関連性】

この科目を履修することにより、ディプロマポリシーにある、広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけることができる。なお、臨床心理士や公認心理師の資格を取得しようとする者には、「専門職としての使命と社会的責任」「倫理や法令の理解と順守」「クライアントへの臨床的支援能力」「他職種の専門家と連携する能力」の修得を目指す。

【テキスト】

山下格著『精神医学ハンドブッカー医学・保健・福祉の基礎知識 第7版』日本評論社 2,300円

【参考文献】

倉本英彦著『思春期のこころの問題と予後』ナカニシヤ出版、2,600円
倉本英彦著『つまずく若者たちー思春期臨床の現場から』日本評論社 1,600円

【備考】

毎回、テキストと各自用意した本科目専用ノートを持参すること

心身医学特論（保健医療分野に関する理論と支援の展開）

2単位：集中	1～2年
中島 亨	

【到達目標】

精神医学や精神医療は他の医療分野と大きく異なり、異質な分野とされることは少なくない。この原因として、病態を定義する用語に冗長性があること、脳という臓器が複雑であり、他の臓器の疾患と異なり病因と症状が一一対応していないこと、脳と精神の病態に見られる問題解決についても多次元、多面からのアプローチが可能であって治療の標準化が行いにくいこと、などがあげられる。この講義を聴講される方はこのようなことを

理解したうえで、少なくとも心理学や精神医学における用語を適切に操れるようになり、実際の症例について症状を把握し、どのような症状が実生活にどのような影響を及ぼすのかを理解し、どのような対処法が存在するかを説明できるようになることを目標とする。

〔履修の条件〕

履修にあたっては、他者の置かれている環境に自己を置いてみた場合、自分がどのような心的状態になるかを想像する能力が存在することが必要である。我々は相手の立場に立った場合、“おそらく心の働きは相手も自分も同じであろう”との憶測に基づいて相手の心の状態を想像し、あとから検証して修正を行う。このようにして他人の気持ちを推し量る能力が成長する。しかし、このような能力に秀でておらずとも、多数の臨床例を経験すれば徐々に相手の心の状態を想像することは可能となっていくので、不得手な方でも日常生活の諸場面においてこのようなことを練習しておきたい。

〔講義概要〕

国内外の精神医療・医学がどのような経緯で現在の精神医療・医学に変容してきたかを学習して精神医学についてのイメージを描いていただくことに始まり、精神医学で用いられる用語の厳密な定義、行われる心理的・生理的な諸検査についての理解、治療や対応の方法についての知識の獲得、医療資源や社会資源の利用などを目標として、臨床現場の臨場感を伝達するとともに、各疾患について操作的診断基準と典型例を解説しながら講義を進める。原則としてパワーポイントを用いた講義になる。

■授業計画

- 第1回 精神医療の歴史、精神症候と疾患分類
- 第2回 統合失調症の理解とその支援
- 第3回 うつ病の理解とその支援
- 第4回 双極性障害の理解とその支援
- 第5回 神経症性障害の理解とその支援
- 第6回 転換性障害・解離性障害の理解とその支援
- 第7回 人格障害の理解とその支援
- 第8回 依存症の理解とその支援
- 第9回 てんかんの理解とその支援
- 第10回 発達障害と小児思春期の問題の理解とその支援
- 第11回 器質性・症状性精神障害の理解とその支援
- 第12回 老年期精神障害の理解とその支援
- 第13回 睡眠障害の理解とその支援
- 第14回 摂食障害の理解とその支援／試験

〔成績評価〕

試験（100%）、レポート（0%）、小テスト（0%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（0%）
集中講義であるので、評価は試験のみとなる。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

予習すべき資料はないので、当日の講義内容を復習して学習すること。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

試験は採点后に返却する。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

この講義を受講することにより、社会福祉学専攻の博士前期課程にあっては、広い学識と高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業担うための優れた能力を身につけることができる。社会福祉学専攻の博士後期課程にあっては、指導的な高度の専門業務に従事するために必要な能力や知識を身につけることができる。臨床心理学専攻の修士課程にあっては、広い学識と高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけることができる。また、心理専門職に必要な「臨床心理の専門職としての使命と社会的責任」「クライアントを尊重する姿勢と倫理の理解と遵守」「クライアントへの臨床的支援能力」「他職種の専門家と連携する能力」の修得を目指す。

〔テキスト〕

原則として使用しない、推奨書籍については授業内で紹介する。

心理療法特論Ⅰ（交流分析）

2単位：前期1コマ

1～2年

白井 幸子

〔到達目標〕

「交流分析」はフロイトの精神分析理論を背景にもち、それを具体的に分かりやすい日常語を使って表現した人間の心と行動に関するパーソナリティ理論です。6つの基本理論より成り立っており、これらの基本理論を学ぶことによって客観的な自己理解・他者理解が得られます。さらに、V.Joines、I.Stewartによって創始された「交流分析による人格適応論」も学びます。乳幼児期の親子関係がその後の人格形成、行動様式、適応スタイルにどのような影響を及ぼすかなどについての理解を得ます。自分の適応スタイルを知り、自分とは異なる適応スタイルを持つ人と望ましい関係性を築くことによって人間関係をストレスの少ない、楽しく意味あるものにしたいと願っています。

〔履修の条件〕

本大学院に正規に在籍している臨床心理学専攻の院生のみが履修できます。

〔講義概要〕

交流分析は以下の6つの基本理論より成り立っています。

Ⅰ．交流分析について

- 1) 自我状態の分析
- 2) やりとりの分析
- 3) ストロールへの欲求とデイスカウト
- 4) 心理的ゲームの分析
- 5) 人生における基本的構え
- 6) 人生脚本の分析

上記の6つの基本理論は1) パーソナリティ理論、2) コミュニケーション理論、3) 発達心理学、4) 精神病理学などの領域を含み、人間の心と行動を分析します。交流分析の基本理論に基づいて開発されたのが「交流分析による人格適応論」です。望ましい人間関係を築く方法を学びます。

Ⅱ．交流分析による人格適応論について

- 1) 親の養育スタイルとこどもの人格適応スタイルについて

- 2) 自分の適応スタイルを知る
- 3) 人間関係に人格適応論を用いる

■授業計画

第1回	第1回授業へのオリエンテーション: 1) 交流分析とは 2) 自己紹介 3) この授業より望むもの
第2回	自我状態の分析 (その1) 「エゴグラム」を通して自己理解をする
第3回	自我状態の分析 (その2) 1) 自我状態の汚染の問題、2) 望ましい自我状態のあり方、3) 臨床の現場での応用
第4回	やりとりの分析 (1) やりとり3つのタイプ: 1) 相補的やりとり、2) 交差的やりとり、3) 隠されたやりとり (2) 望ましいやりとりのあり方: 1) 他の人との望ましいやりとりとは 2) 他の人との望ましいやりとりとは
第5回	ストロークへの欲求とディスカント (その1) 1) ストロークとは 2) ストローク経済の法則
第6回	ストロークの欲求とディスカント (その2) 1) 各発達段階に必要なストローク 2) ストロークの体験学習
第7回	心理的ゲームの分析 (その1) 1) 心理的ゲームとは 2) 心理的ゲームの種類
第8回	心理的ゲームの分析 (その2) 1) なぜ心理的ゲームを行うのか 2) 心理的ゲームをやめるには
第9回	人生における基本的構え: 1) 私もあなたもOK、2) あなたはOK、私はOKではない、3) 私はOK、あなたはOKではない、4) 私もあなたもOKではない。
第10回	人生脚本の分析 (その1) (1) 人生脚本とは (2) 人生脚本構成要素: 1) 禁止令、2) 拮抗禁止令、3) 行動のプログラム
第11回	人生脚本の分析 (その2) 1) 自分の脚本テーマを知る 2) 脚本の種類 (プロセス脚本)
第12回	「幼児決断」から「再決断」へ 再決断療法の実践を通して学ぶ
第13回	交流分析による「人格適応論」(その1) 「人格適応論とは」 親の養育スタイルと6つの人格適応タイプ
第14回	交流分析による「人格適応論」(その2) 1) 各適応タイプの特徴 2) 質問紙を用いて自分の適応タイプを知る
第15回	レポート
第16回	—

【成績評価】

試験 (0%)、レポート (50%)、小テスト (0%)、課題提出 (25%)、その他の評価方法 (25%)

【成績評価 (備考)】

- 1) 授業への参加度
- 2) 毎回授業内容についての感想を提出する

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

授業前にその日の講義内容をテキストを通して理解しておくことと授業が分かりやすく、より興味深いものになる。「エゴグラム」(TEG3)と「ジョインズによる人格適応質問紙」(JPAQ)などは授業前記入しておくことが望ましい。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習 (予習・復習等) を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

フィードバックについてのディスカッションは次の授業でおこなう。毎回学生が提出する小レポート、感想文を話し合う。

【ディプロマポリシーとの関連性】

この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、臨床心理士に必要な「臨床心理の専門職としての使命と社会的責任」「クライアントを尊重する姿勢と倫理の理解と遵守」「クライアントへの臨床的支援能力」の修得を目指す。

【テキスト】

- 1) 白井 幸子. 臨床にいかす心理療法. 医学書院、2004. ¥2,310
- 2) 必要に応じてプリントを配布する。テキストは個人で購入すること。

【参考文献】

ジョインズ、スチュアート (白井、繁田監訳) 交流分析による人格適応論. 誠信書房、2007. ¥6,090.
ジョインズ、スチュアート (深沢 道子監訳) TA TODAY 最新交流分析入門、実務教育出版. 1991. ¥4,500
白井 幸子. 看護にいかす交流分析. 医学書院. 1983. ¥2,200
エリック・バーン 著 (江花 昭一 監修、翻訳). 人生脚本のすべて、人の運命の心理学——「こんにちは」の後に、あなたは何かと言いますか? 星和書店. 2018. ¥3,600
エリック・バーン 著 (深沢道子監訳)

【備考】

成績評価の「その他」は以下の内容を含みます。

- 1) 体験学習への参加
- 2) ディスカッションへの参加
- 3) 講義セッションの感想提出

心理療法特論Ⅱ (児童臨床心理)

2単位: 前期1コマ

1～2年

高城 絵里子

【到達目標】

- ①子どもと家族を対象としたアセスメントと臨床の基本姿勢を学ぶ。
- ②遊戯療法を中心とした子どもと家族の支援技法を学び、実習による実践的な理解を深める。

【履修の条件】

- ①臨床心理士受験資格を取得するために必要なE群の科目である。
- ②本大学院総合人間学研究科臨床心理学専攻に正規に在籍している院生のみ履修することができる。
- ③講読発表と討論、現場での実習を中心に進める授業である。履修者の積極的な参加と発言を求める。

【講義概要】

テキスト講読では、基本的な遊戯療法と親子合同面接の技法、子どものトラウマ治療、発達障害の療育技法を取り上げる予定である。各章ごとに担当者を決めて発表、内容についての討論、ビデオ学習および教員による補足講義を行う。発表者にはテキストの担当部分に加え、関連する理論や研究を含めた資料を作成すること、授業内での講読発表および討論の進行を務めることが求められる。最後に、子ども現場での実習によって、子どもとの関係形成および遊戯療法の姿勢を体験的に理解する。

■授業計画

第1回	ガイダンス 本授業の概要説明 子どものアセスメントおよび子ども臨床の特徴
第2回	文献講読発表① 子どものアセスメント（発達）
第3回	文献講読発表② 子どものアセスメント（情緒・精神病理）
第4回	文献講読発表③ 遊戯療法の基本姿勢 大人との違い、アクスラインを中心として
第5回	文献講読発表④ 遊戯療法の実際 事例検討を踏まえて
第6回	文献講読発表⑤ 親子合同面接の基本技法、基本姿勢
第7回	文献講読発表⑥ 親子の関係調整の技法
第8回	文献講読発表⑦ 子どものトラウマ（トラウマの心身への影響とアセスメント）
第9回	文献講読発表⑧ 子どものトラウマ（トラウマへの心理的支援）
第10回	文献講読発表⑨ 発達障害の療育（発達アセスメントと応用行動分析）
第11回	文献講読発表⑩ 発達障害に関する保護者・支援者支援（ペアレントレーニング）
第12回	保育所実習① 子ども集団に入り、遊びを通じた関係形成に取り組む
第13回	保育所実習② 子どもとの関係を通して自己理解を深める
第14回	保育所実習③ 子どもとのかかわりを通して、適切な支援の方法を理解する
第15回	レポート
第16回	－

【成績評価】

試験（0%）、レポート（50%）、小テスト（0%）、課題提出

（20%）、その他の評価方法（30%）

【成績評価（備考）】

レポートとは、最終レポートの提出を指す。

課題提出とは、講読発表原稿の提出を指す。

その他とは、授業への出席、発表の内容と授業における討論への参加態度を指す。

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

本科目では各授業回におよそ200分の準備学習を必要とする。予習では、各回で取り上げる内容について各自あらかじめ自主学習しておくこと、また文献を熟読し疑問や考察を整理しておくこと、文献講読・論文講読発表担当部分についてレジュメ作成とプレゼンテーションの練習を十分にしておくことを求める。また、復習として各授業での討論を踏まえた考察を行うことを勧める。

【試験・レポート等のフィードバック】

文献講読発表課題については、授業内で口頭でコメントを行う。最終レポートについては、コメントを付して返却する。

【ディプロマポリシーとの関連性】

この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、臨床心理士と公認心理師に必要な、「クライアントへの臨床的支援能力」の修得を目指す。

【テキスト】

- ・プレイセラピーへの手引き―関係の綾をどう読み取るか―田中千穂子著 日本評論社
- ・プレイセラピー入門 丹明彦著 遠見書房 他、適宜講義内で指示する。

【参考文献】

- ・開かれた小さな扉 ある自閉症児をめぐる愛の記録 アクスライン著 日本エディタースクール出版部

【備考】

「実務経験のある教員による科目」 臨床心理士／公認心理師としての発達現場における臨床経験を踏まえて、発達支援に関する知識と技術を教示する。

投映法特論

2単位：後期1コマ

1～2年

分島 芳子

【科目補足情報】

ロールシャッハテストを学ぶ。

【到達目標】

投映法検査の中でロールシャッハテストを取り上げて、その基礎理論及び技法を理解し臨床場面で適切に施行し活用できる力をつける。量的分析・記号化法は片口法を用いる。その上で

精神分析理論を基礎に継起分析を試み、投映法における人間理解の手法を身につける。心理的アセスメントに関する知識と技能を深める。

〔履修の条件〕

本大学院総合人間学研究科・臨床心理学専攻に正規に在籍している院生のみが履修できる。

学内実習施設での心理実践実習での心理アセスメント時に必要な知識・技能の一つとなり、支援計画の作成に必要となる。

第2回授業時までにはテキストは各自購入が望ましいが、大学より貸し出すことも出来る。授業には必ずテキストを持参すること。

〔講義概要〕

適切な施行、スコアリング、数量分析、継起分析、解釈について学ぶ。

様々な検査事例を通して臨床への適応を学ぶ。

心理に関する支援を要する者等に関する心理アセスメントの知識及び技能を投映法を用いることでさらに深めることを目標とする。

■授業計画

第1回	オリエンテーション 投映法の概要。ロールシャッハテストの特徴と基礎知識
第2回	施行法① 検査状況の調整、教示、質問の仕方、記録等
第3回	施行法② スコアリング
第4回	施行法③ 数量化
第5回	ロールシャッハテスト演習① 受講者相互にテスト体験。記録作成 (遠隔授業の場合は、事例による報告書作成演習)
第6回	ロールシャッハテスト演習② 受講者相互にテスト体験。記録作成 (遠隔授業の場合は、事例による報告書作成演習)
第7回	解釈法① 数量分析による解釈
第8回	解釈法② 継起分析による解釈i
第9回	解釈法③ 継起分析による解釈ii
第10回	解釈法④ 継起分析による解釈iii・総合解釈
第11回	報告の仕方 他のアセスメント情報との統合 小テスト
第12回	事例検討① 健康者等
第13回	事例検討② 神経症水準・境界性水準
第14回	事例検討③ 精神病水準
第15回	レポート テスト演習①②での自己検査データの解析と解釈 (遠隔授業の場合は、事例検討レポート課題)

第16回 ―

〔成績評価〕

試験 (0%)、レポート (50%)、小テスト (50%)、課題提出 (0%)、その他の評価方法 (0%)

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

毎回授業後に講義時の配布資料およびテキストを読み込み、知識を整理してほしい。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習(予習・復習等)を必要とする。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

講義内小テストの解答・解説はテストが実施された翌週に行う。期末レポートの評価について個別のフィードバックが必要な場合は、個別に対応するので教員にアポイントメントをとること。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

この科目はディプロマポリシーに定める「高度な専門的な知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身に付けることを目的とする。特に、公認心理師、臨床心理士に必要な「心理に関する支援を要する者の心理状態を観察し、その結果を分析すること。」の習得を目指す。

〔テキスト〕

改訂 新・心理診断法―ロールシャッハ・テストの解説と研究
片口安史著 金子書房 9,550円+税 (各自購入が望ましい)
改訂版でない初版本が中古としてあつかわれていることがあります。間違えて購入しないよう気を付けてください。

〔参考文献〕

ロールシャッハ・テストの学習―片口法スコアリング入門
藤岡信治・松岡正明著 金子書房 4,550円
改訂ロールシャッハ法と精神分析―継起分析入門
馬場禮子著 岩崎学術出版 3,200円

〔備考〕

授業第2回より毎回、テキスト、ロールシャッハ・テスト図版(第1回授業時に受講者には貸し出す)の2点を持参すること。

サイコドラマ特論

2単位：後期1コマ

1～2年

谷井 淳一

〔科目補足情報〕

ある程度の人数が必要なので、院生の受講者が少ない場合は学部のサイコドラマⅢの授業と合同で行う(月曜3時間目)。受講者が多い場合は授業時間を月曜4時間目に移動して、大学院独自の授業として実施する

〔到達目標〕

- ①集団心理療法の1つであるサイコドラマを体験し、その目的を理解する。
- ②主役や補助自我および観客役割を経験することにより、自己理解や他者理解をすすめる機会とする。

- ③他者に対する共感性を高め、安心感のあるグループを形成し、癒しの体験を共有する。
- ④サイコドラマの監督として、サイコドラマを実施する方法を学び、集団に対してのセラピストの立ち位置を学ぶ。

〔履修の条件〕

サイコドラマは集団心理療法の一つで、セラピーの実際をグループで体験できる良さがある。臨床心理士を目指して学習する上で、1年生の前期にこの授業の中で主役や監督体験をすることは、個人治療としてのクライエント体験やセラピスト体験につながる大きな経験となる。是非1年生でこの授業を通じて、自己理解や他者理解を深めて欲しい。勿論2年生での履修も歓迎する。

〔講義概要〕

(1) サイコドラマの目的

サイコドラマは、即興的なドラマ表現を媒介として、個人に自己理解あるいは自己洞察をもたらすことを期待した心理療法である。臨床心理学を学ぶものとして、個人を対象にした技法とともに集団を対象としたスキルを身につけることも将来的に必要となる。そこで、集団心理療法の1つである「サイコドラマ」を体験的に学習する。

(2) サイコドラマの構成

サイコドラマは、集団のウォームアップ、個人のウォームアップ、主役の選択、ドラマ化、シェアリングという一連の流れをもっている。これらの流れを理解し体験的に学ぶ。

(3) サイコドラマの要素

サイコドラマは、主役、補助自我、観客などの要素からなり、主役の世界を立体的に表現していく。そのために、ダブルやロールリバーサル、ミラー、などの技法を駆使する。その技法について体験的に理解をはかる。

(4) 将来、病院でのデイケアなどの仕事に就く場合、グループを対象とした活動を実施する場合がある。その方法の一つとして、サイコドラマは非常に役に立つ技法である。グループワークの一つとして、自分が癒される体験をするともに、監督としてサイコドラマを実施するためのスキルを学ぶ。

■授業計画

第1回	サイコドラマの構成と5つの要素。ダブル、ミラー、役割交換の理解。サイコドラマのシナリオを読み合わせをする（ロールプレイ）。このことにより、サイコドラマの限界や注意点についても理解をはかる。
第2回	ウォーミングアップの実際。「忘れられない思い出」をテーマにしたドラマ体験
第3回	「エンプティチュア」をテーマにしたドラマ体験
第4回	「カードからメッセージをもらう」をテーマにしたドラマ体験
第5回	監督体験をするにあたっての理論的理解「ウォーミングアップ、ドラマ化、シェアリングの役割」
第6回	ロールリバーサルの使い方
第7回	主役選択の方法とファストインタビュー
第8回	ファストシーンを創る
第9回	セカンドシーンを探す
第10回	総合的監督体験とレビュー1
第11回	総合的監督体験とレビュー2
第12回	総合的監督体験とレビュー3
第13回	総合的監督体験とレビュー4

第14回 総合的監督体験とレビュー5

第15回 —

第16回 —

〔成績評価〕

試験 (0%)、レポート (70%)、小テスト (0%)、課題提出 (0%)、その他の評価方法 (30%)

〔成績評価（備考）〕

授業への積極的参加を期待しています。色んな役割を自発的にとってください。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

以下の内容をレポートにしておいてください。その日の役割やその日感じたことメモしておいてください。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。

(1) 各回ごとにどんな役割（主役・補助自我・観客）をして、何を感じたか。

(2) サイコドラマの体験が、自分の日常に影響を与えたか。

(3) 自分の課題に気づいたことがあったか。何らかの課題解決に役立ったか。

(4) 監督体験はどうであったか、何か感じたことがあったか。

以上のような観点で、主役体験・監督体験についてA4用紙で2枚程度、合計4枚程度でレポートできるようにしておいて下さい

〔試験・レポート等のフィードバック〕

毎時間、シェアリングとレビューを行い、各授業のポイントを解説し、フィードバックを行う。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

この科目はディプロマポリシーに定める「広い学識と高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に主役のテーマを的確に把握して適切なドラマを進行する方法を学習する。

〔テキスト〕

とくになし、必要があれば参考文献を参照してください。

〔参考文献〕

谷井淳一著「自己成長のためのサイコドラマ入門」（日本評論社）
高良聖著「サイコドラマの技法」（岩崎学術出版）
磯田雄二郎著「サイコドラマの理論と実践」（誠信書房）

〔備考〕

—

心理療法スーパービジョン特論

2単位：前期1コマ

1～2年

福山 和女

〔到達目標〕

心理療法の各論理に基づくスーパービジョンについてその方法と技術を習得する。

〔履修の条件〕

本学大学院総合人間学研究科・臨床心理学専攻修士課程に正規に在学する院生のみが履修できる。

履修者の目標設定に基づく。参加型形式をとる。履修者が目標達成に積極的に取り組むことを要請する。

スーパービジョン体験が中心である。

〔講義概要〕

対人援助、特に心理療法に焦点を当て、スーパービジョンについて、理論と平行して実践的な研究を進めていく。臨床現場では、心理療法家はクライアントの的確な見立てが実践できるように、いくつかの方法論を適用し、治療構造の計画を立て、心理療法が実践できることを求められている。専門家にとっては、自己の分析、自己評価、自己覚知を通して訓練することが必須条件である。本講義では、レーニング・プロセスにスーパービジョンの概念と方法を適用し、心理療法家の養成プロセスを段階的に体験する学習方法を採用する。

■授業計画

第1回	スーパービジョンの歴史の変遷と日本におけるあゆみ
第2回	スーパービジョンの必要性と機能
第3回	組織、職位、職種からのスーパービジョンの貢献
第4回	心理療法の初心者に対するスーパービジョンの理論と方法
第5回	介入開始期の中堅援助者に対するスーパービジョンの理論と方法
第6回	問題の変革期への働きかけー組織レベルでの対応ースタッフ関係に焦点を当てる。
第7回	心理支援の変革期におけるスーパーバイザー初心者の視点に焦点を当てる。
第8回	心理支援の安定期における中堅のスーパーバイザーの視点に焦点を当てる。
第9回	心理支援の終結期における中堅のスーパーバイザーの視点に焦点を当てる。
第10回	心理的社会的アプローチによるスーパービジョン
第11回	家族システムズ論によるスーパービジョン
第12回	集団支援におけるスーパービジョン
第13回	地域支援におけるスーパービジョン
第14回	家族・世代間スーパービジョン スーパービジョンの実施上の留意点
第15回	—
第16回	—

〔成績評価〕

試験(20%)、レポート(30%)、小テスト(20%)、課題提出(30%)、その他の評価方法(0%)

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

テキストや参考文献から、該当する理論や技術について予習・復習することを薦める。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習(予習・復習等)を必要とする。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

レポートなどで、習得した内容についての確認を行い、適宜に追加、補足を行う。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、臨床心理士に必要な「臨床心理の専門職としての使命と社会的責任」「クライアントを尊重する姿勢と倫理の理解と遵守」「クライアントへの臨床的支援能力」の修得を目指す。1. 臨床心理の専門家としての使命、社会的責任を自覚、生涯にわたる研鑽の必要性を遵守し、心理支援を研究する姿勢を醸成する。

〔テキスト〕

福山和女編著(2005)『ソーシャルワークのスーパービジョン』ミネルヴァ書房 2,800円+税

〔参考文献〕

中村伸一他『説き明かし・私の家族面接初回面接の実際』[DVD] 2010 中島映像 46,000円

〔備考〕

出席日数、レポート提出など総合的評価である。

参加態度、意見交換、フィードバックなどの質と量を加味する

福祉分野に関する理論と支援の展開

2単位：後期1コマ

1～2年

加藤 純

〔到達目標〕

福祉分野の理論と支援アプローチの成り立ちと主要概念について説明する力を養う。

福祉分野の理論と支援アプローチを自身の実践に結び付け省察・評価する力を養い、実践の改善課題について説明できるようになる。

福祉分野で支援を必要とするクライアントが直面する多様な課題を捉え、アセスメントし、支援計画を立てられるようになる。

〔履修の条件〕

公認心理師に必要な科目です。公認心理師の受験資格取得を目指す人は必ず履修してください。

〔講義概要〕

福祉分野で支援を必要とするクライアントが直面する多様な課題と、課題解決のために必要な心理およびソーシャルワークの理論と支援を学び、実践に活用できるようになることを目指します。講義と事例検討を中心に進めます。

■授業計画

第1回	福祉分野におけるニーズの把握と理解 (1): 課題発生 の機序に関する心理と福祉の視点 (バイオサイコ ソーシャルアプローチ)
第2回	福祉分野におけるニーズの把握と理解 (2): 家族シ ステム論・ニーズ論・役割理論
第3回	福祉分野におけるアセスメント (1): 社会問題の社会 的構築 (児童虐待概念の成立過程を例に)
第4回	福祉分野におけるアセスメント (2): 事例の社会的構

- 築。生活課題の総合的理解
- 第5回 福祉分野における法律の重要性（行政機関の法的権限と介入過程）
- 第6回 相談機関におけるコンサルテーション（体罰のある家庭への児童相談所による支援）
- 第7回 家族システム論と家族療法の主要理論
- 第8回 入所施設での家族支援の理念と実際（解決志向アプローチ）
- 第9回 入所施設での生活支援の意義と方法（生活場面面接）
入所施設での多職種連携（コンサルテーション）
- 第10回 入所施設における治療的支援の事例（ナラティブ・アプローチ）
- 第11回 家族支援におけるアセスメントと支援計画策定（リスク理論）
- 第12回 福祉分野におけるリスクアセスメントとリスクマネジメント
- 第13回 福祉分野における支援方法の評価と改善（プログラム評価）
- 第14回 児童家庭福祉の課題と各自の実践や研究の関わり（まとめ）
- 第15回 —
- 第16回 —

【成績評価】

試験（0%）、レポート（70%）、小テスト（0%）、課題提出（0%）、その他の評価方法（30%）

【成績評価（備考）】

授業には全て出席すること。最終レポートを提出し合格すること。欠席が4コマを越えた場合、単位は取得できません。

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

授業中に事例についてグループディスカッションをするので、事前に事例を読んできてください。また、参考文献を積極的に読んでください。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とします。

【試験・レポート等のフィードバック】

期末レポートはメールにより提出してください。提出されたレポートにオンラインでコメントします。

【ディプロマポリシーとの関連性】

この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とします。特に、公認心理師に必要な「クライアントへの臨床的支援能力」「他職種の専門家と連携する能力」の修得を目指します。

【テキスト】

授業中に資料を配布。授業では、下記の参考文献の内容を紹介します。

【参考文献】

上野加代子・野村知二（2003）『〈児童虐待〉の構築』世界思想社教学社

中河伸俊他（2001）『社会構築主義のスペクトラム』ナカニシヤ出版

衣斐哲臣（1997）「体罰習慣がある家族に対する助言指導と保母・教師へのコンサルテーション」『家族療法研究』14巻2号

M. Durrant (1991) "Residential Treatment" W. W. Norton. 関連して、下記の文献もぜひお読みください。

Berg, I. K.（磯貝希久子監訳、1997）『家族支援ハンドブック』金剛出版

A. Turnell, & S. Edwards（白木孝二他訳、2004）『安全のサインを求めて』金剛出版

ロッシ他（2004=大島巖他訳2005）『プログラム評価の理論と方法』日本評論社

W. K. Kellogg Foundation（2001=農林水産政策情報センター2003訳）『ロジックモデル策定ガイド』

学校臨床心理学特論(教育分野に関する理論と支援の展開)

2単位：前期1コマ

1～2年

菊池 知美

【到達目標】

スクールカウンセラーとして学校や地域・保護者などからなる子どもを育てるシステムを理解し、自分の立ち位置を理解する。また、教育現場において生じる問題及びその背景、教育現場における心理社会的課題及び必要な支援について高度な専門的知識や技術の習得、職業を担うための優れた能力を身につけることを目的とする。

【履修の条件】

本学大学院総合人間学研究科・臨床心理学専攻修士課程に正規に在学する院生のみが履修できる。

学校臨床を目指す大学院生、および公認心理師・臨床心理士の基礎的な知識として学校臨床を学ぼうと志す大学院生。

【講義概要】

スクールカウンセラーという立場から見える学校のシステム・校務・地域連携・教職員の役割などについて確認していく。さらにスクールカウンセラーにはどのようなアプローチをとることが要求されているのか不登校・いじめ・家庭の問題・発達障害などの事例についてディスカッションを通し学習する。

■授業計画

- | | | |
|-----|-----------|---------------------|
| 第1回 | オリエンテーション | 授業の進め方
学校臨床心理学とは |
| 第2回 | 学校臨床心理学 | 理論①
講義とディスカッション |
| 第3回 | 学校臨床心理学 | 理論②
講義とディスカッション |
| 第4回 | 学校臨床心理学 | 理論③
講義とディスカッション |
| 第5回 | 学校臨床心理学 | 理論④
講義とディスカッション |
| 第6回 | 学校臨床心理学 | 理論⑤
講義とディスカッション |

- 第7回 学校臨床事例研究①
ディスカッション
- 第8回 学校臨床事例研究②
ディスカッション
- 第9回 学校臨床事例研究③
ディスカッション
- 第10回 学校臨床事例研究④
ディスカッション
- 第11回 学校臨床事例研究⑤
ディスカッション
- 第12回 グループワーク
- 第13回 グループワーク
- 第14回 まとめ
- 第15回 レポート
- 第16回 —

【成績評価】

試験 (0%)、レポート (50%)、小テスト (0%)、課題提出 (30%)、その他の評価方法 (20%)

【成績評価 (備考)】

各自担当した理論・事例についてレジュメを作成してもらいます。レジュメ発表とディスカッション等への参与の程度、リアクションペーパーなどを総合的に評価します。

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

自分の担当以外の事例についても授業当日までに目を通し、自分のコメントを用意して下さい。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

発表等について、授業内に適宜口頭にてコメントする。

【ディプロマポリシーとの関連性】

この科目はディプロマポリシーに定める「広い学識と高度な専門的知識や技術を備え専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。

【テキスト】

『スクールカウンセリングと発達支援』 宮川充司・津村俊充・中西由里・大野木裕明編 ナカニシヤ出版 2018

【参考文献】

『学校現場に役立つ臨床心理学—事例から学ぶ』 菅佐和子 木之下隆夫日本評論社 2001
『AIに負けない子育て』 内田伸子 ジアース教育新社 2020

【備考】

第1回目の授業までにテキストをご用意下さい。

産業・労働分野に関する理論と支援の展開

2単位：前期1コマ

1～2年

中村 洸太

【到達目標】

産業社会の激変やグローバル化の進展、ニューノーマルそして新型コロナウイルス感染症拡大など、社会の有様は大きく変化しています。加えて超少子高齢化時代となり、多様化が叫ばれる時代に個人の価値観も大きく変化しています。こうした背景をもとに、産業・労働分野に関する理論と支援についての知識と考え方を学び、働く人のストレスの増大からくる心の健康問題、人間関係の希薄さなどによる職場の状況と企業の課題について、講義と演習を交えて理解を深め広い学識を身につけます。そのうえで、より良い職業人生を送るためのメンタルヘルス対策、キャリア開発、良好なコミュニケーションづくりについて学習することを目的とします。この目的を達成するために、集団・組織や職場・職業に関わる心理学の理論から、個人が組織によって規定される諸影響を学習したうえで、専門とする支援の対象者との良好な関係性を構築できる知識や態度を学びます。

【履修の条件】

他者の話に興味・感心をもって他者理解することと、情報や気持ちを聴く一方で、自身の考えや思いを発信する自己表現のための双方向のコミュニケーション・スキルは、実践して身に付くものです。授業内で実施する話し合いは、事例検討やワークコミュニケーション能力を養うことを目的とすることを理解しましょう。

【講義概要】

前半は、レジメを中心に講義スタイルで、職場における問題（キャリア形成に関することを含む）に対して必要な心理に関する支援や、組織における人の行動に関することを講義します。後半は、事例演習など、実際の心理支援に関する内容を行なっていきます。授業計画については社会情勢や進行に応じて順番が前後することや、その時期に応じた内容に変更する可能性があることをご容赦ください。

■授業計画

- 第1回 オリエンテーション、産業領域における心理臨床活動（オリエンテーション）
- 第2回 組織と個人
- 第3回 集団とモチベーション
- 第4回 組織とコミュニケーション
- 第5回 ストレス
- 第6回 仕事の安全と職場におけるストレス・ダイバーシティ
- 第7回 キャリア発達とその支援
- 第8回 リーダーシップ
- 第9回 ハラスメント
- 第10回 産業・組織分野の制度と法律
- 第11回 産業領域における心理臨床活動（EAPなど）
- 第12回 ストレスチェック制度
- 第13回 休職・復職
- 第14回 職場における連携
- 第15回 最終レポート
- 第16回 —

〔成績評価〕

試験 (0%)、レポート (40%)、小テスト (0%)、課題提出 (40%)、その他の評価方法 (20%)

〔成績評価 (備考)〕

2回のレポート (第7回時と最終レポート) と毎回の確認テスト (小テスト) による評価に加え、課題に対する評価を加えます。欠席3分の1を超えた場合 (5回以上) は受験資格を失います。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

講義に対する予習は、授業計画の各項目を自習しておきましょう。復習は、講義配布レジュメやノートを整理しておきます。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習 (予習・復習等) を必要とします。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

毎授業のフィードバックやレポートのフィードバックは、講義内にておいて行うことを基本としますが、ときには、数回まとめることもあります。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

他者の思いや考えの理解と抱えている問題への共感、自己の思索の深化と思いの言語化、人間関係の構築、意見の交換、社会への考えの表明などを、状況に応じて適切に行うことができるようになることを研鑽することを心がけましょう。専門家としての資格を取得しようとする者は、専門家として、支援する対象者を尊重する姿勢を有し、倫理や法を理解し、遵守姿勢と遵守に必要な実践能力を有することを目指すために、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけましょう。

〔テキスト〕

毎回、下記参考文献に基づいたレジュメを配布します。

〔参考文献〕

・平木 典子 (著, 編集), 松本 桂樹 (著, 編集), 野島 一彦 (監修) 「産業・労働分野: 理論と支援の展開 (公認心理師分野別テキスト5)」2,592円 (創元社) ISBN-13: 978-4422116952
・高橋浩・中嶋励子・渡邊祐子 (著)・高橋修 (編著) 「社会人のための産業・組織心理学入門」(産業能率大学出版部) 2,592円 ISBN-13: 978-4382056961
その他適宜、授業で紹介します。

〔備考〕

毎回、前回のレジュメを参照すること。

心の健康教育に関する理論と実践

2単位：前期1コマ

1～2年

田副 真美

〔科目補足情報〕

公認心理師指定科目である。

〔到達目標〕

1. 精神疾患および身体疾患、各発達段階に発現する心理的

問題の理解

2. 具体的なアセスメント心理支援の理解

3. チーム医療の理解

4. 他職種共同の理解

5. 医療・保健、教育、産業・労働、福祉、司法・犯罪の5領域に加え災害における心の健康の理論と実践について理解する。

〔履修の条件〕

本学大学院、臨床心理専攻に正規に在学する学生のみ履修できる。

〔講義概要〕

1. 心理職が医療および様々な領域で働くために必要な健康・医療心理学の概要と心理支援について扱う。
2. 各講義ごとに到達目標を決め、医療・保健、教育、産業・労働、福祉、司法・犯罪の5領域と災害における心の健康教育と理論と実践について院生が担当し発表し、その内容についてディスカッションを行う。
3. 小児科医による医療現場における心の健康教育の実践についての講義を予定している。

■授業計画

第1回	オリエンテーション 心の健康とは
第2回	健康心理学とは 健康心理学のセサメントと支援①
第3回	健康心理学のセサメントと支援②
第4回	健康心理学のセサメントと支援③
第5回	ストレスとストレスマネジメント
第6回	心身症概論
第7回	他職種共同と連携
第8回	グループ発表 心の健康教育が求められる領域：医療・保険領域における実践
第9回	グループ発表 心の健康教育が求められる領域：学校教育域における実践
第10回	グループ発表 心の健康教育が求められる領域：産業・労働領域における実践
第11回	グループ発表 心の健康教育が求められる領域：福祉領域における実践
第12回	グループ発表 心の健康教育が求められる領域：司法・犯罪領域における実践
第13回	グループ発表 心の健康教育が求められる領域：災害と心の健康教育
第14回	心の健康教育の実際 (ゲストスピーカー) まとめ
第15回	期末レポート
第16回	—

【成績評価】

試験 (0%)、レポート (20%)、小テスト (0%)、課題提出 (10%)、その他の評価方法 (70%)

【成績評価 (備考)】

授業への積極的な態度

グループ発表の資料およびプレゼンテーションの内容

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

本科目では各授業回におよそ200分の準備学習 (予習・復習等) を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

発表やレポートについて、授業内で適宜口頭でコメントする

【ディプロマポリシーとの関連性】

この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。特に、公認心理師/臨床心理士に必要な「臨床心理の専門職としての使命と社会的責任」「クライアントを尊重する姿勢と倫理の理解と遵守」「クライアントへの臨床的支援能力」「他職種の専門家と連携する能力」の修得を目指す。

【テキスト】

必要な資料を適宜配布する

【参考文献】

岸太一、藤野秀美 (編) 「健康・医療心理学」ナカニシヤ出版 3,200円

宮脇稔他 (編) 「健康・医療心理学」医歯薬出版株式会社 3,000円

【備考】

「実践経験のある教員による科目」公認心理師および臨床心理士として、特に医療領域等における心理臨床経験を活かして心の健康教育に関する実践について指導する。

キリスト教倫理学特論

2単位：前期1コマ

1～2年

石居 基夫

【科目補足情報】

キリスト教福祉といのちの倫理

【到達目標】

聖書とキリスト教の福祉的働きの実践と研究し、対人援助の専門職に必要な人間理解と倫理の基本、特に、いのちと尊厳を守るための包括的な人間理解におけるスピリチュアルな視点について学ぶ。

【履修の条件】

とくになし

【講義概要】

キリスト教の人間理解の本質、特に対人援助に必要な包括的な人間理解におけるスピリチュアリティについて、聖書と福祉的働きの実践や思想の歴史に学んでいく。

■授業計画

第1回	イントロダクション
第2回	キリスト教の人間理解の基礎
第3回	聖書における対人援助
第4回	キリスト教と対人援助 (実践と思想) ①
第5回	キリスト教と対人援助 (実践と思想) ②
第6回	いのちの倫理①
第7回	いのちの倫理②
第8回	いのちの倫理③
第9回	いのちの倫理④
第10回	実践研究①
第11回	実践研究②
第12回	実践研究③
第13回	実践研究④
第14回	まとめ
第15回	—
第16回	—

【成績評価】

試験 (0%)、レポート (100%)、小テスト (0%)、課題提出 (0%)、その他の評価方法 (0%)

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

課題となる聖書や文献について事前に学び、一人ひとりが関係する対人援助の現場での実践と経験に基づいてテーマについての予習・復習を行い、授業参加に備える。本科目では各授業回におよそ200分の準備学習 (予習・復習等) を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

各授業においてのフィードバックを行う。

【ディプロマポリシーとの関連性】

ディプロマポリシーの「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を身につけている」に該当する。本学の「建学の精神」に基づき、ホーリスティックな人間理解、特にスピリチュアル・ニーズを持つ実存についての理解を深め、対人援助の専門性を養うことが期待される。

【テキスト】

藤井美和他編著『生命倫理における宗教とスピリチュアリティ』見洋書房

【参考文献】

その都度、授業内で紹介するが、たとえば阿部志郎『福祉の哲学』(誠信書房)、糸賀一雄『福祉の思想』(NHK出版)、熊澤義宣『キリスト教死生学論集』(教文館) など。

牧会カウンセリング特論

2単位：後期1コマ

1年

ジェームス・サック

〔科目補足情報〕

—

〔到達目標〕

臨床の場においてケアを必要とするクライアントへの過程や原則を考察します。

〔履修の条件〕

M1生がやりやすいが、M2生でも履修出来ます。

〔講義概要〕

特に、スピリチュアリティ、スピリチュアル・ニーズ、スピリチュアル・ペインなどに対応するための専門的知識や技法を学ぶ。牧会カウンセリングの立場から精神的な査定を考慮する。様々な臨床の場での自分自身の経験を分かち合い、その時の個人的なニーズについて討議する。それによって他の人たちが必要とするニーズについて洞察を受ける。苦しみや痛みの中に神様の存在は何なのか考える。スピリチュアリティと宗教の関係は何だろうか。

■授業計画

- | | |
|------|--|
| 第1回 | オリエンテーション：講義の進め方、授業に使用するテキストや参考文献を紹介する。 |
| 第2回 | 「生と死の選択」：ある病院のビデオを見てから、延命治療や倫理の事について意見を交換する。 |
| 第3回 | 牧会カウンセリング概念（I）：講義と体験学習を通して勉強する。 |
| 第4回 | 牧会カウンセリング概念（II）：講義と体験学習を通して勉強する。 |
| 第5回 | 「夢」を考える：ユングの理論に基づいている勉強と体験学習をする。 |
| 第6回 | Book Report：全員が一冊の本を読んで、授業で感想を発表する。 |
| 第7回 | スピリチュアルな痛みの導入：スピリチュアル・ペインの概念を紹介する。 |
| 第8回 | スピリチュアルな痛み（I）：具体的に意味のペインを学ぶ。 |
| 第9回 | スピリチュアルな痛み（II）：具体的にゆるしのペインを学ぶ。 |
| 第10回 | スピリチュアルな痛み（III）：具体的に関係性のペインを学ぶ。 |
| 第11回 | スピリチュアルな痛み（IV）：具体的に絶望のペインを学ぶ。 |
| 第12回 | 援助の技法の発表（I）：院生が一つのカウンセリングの技法を調べてからクラスに教える。 |
| 第13回 | 援助の技法の発表（II）：院生が一つのカウンセリングの技法を調べてからクラスに教える。 |
| 第14回 | 援助の技法の発表（III）：院生が一つのカウンセリングの技法を調べてからクラスに教える。 |
| 第15回 | まとめ：学期の学ぶことをまとめると発表のレポートを提出する。 |

第16回 —

〔成績評価〕

試験（0%）、レポート（50%）、小テスト（0%）、課題提出（50%）、その他の評価方法（0%）

〔成績評価（備考）〕

授業への積極的な態度。

〔予習・復習の内容及びそれに必要な時間〕

牧会カウンセリング特論では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。配布された資料を読む。授業前にレポートや発表を準備しておく。

〔試験・レポート等のフィードバック〕

レポートに対するフィードバックを次の授業内容において行なう。

〔ディプロマポリシーとの関連性〕

この科目は「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。

〔テキスト〕

特定のテキストは用いません。教室で資料を多数配布します。

〔参考文献〕

特定のテキストは用いません。教室で資料を多数配布します。
The American Book of Dying,
Richard F. Groves
実践：スピリチュアルケア、リチャード・グローヴス、西野 洋訳

臨床死生学特論

2単位：後期1コマ

1～2年

白井 幸子

〔到達目標〕

人間の生と死について様々な側面を学ぶ。

特にホスピスや緩和ケア病棟など、末期医療の現場で働いている医療スタッフ、また、もし許されるなら、死に直面している患者さんとの出会いを通して、人間の生と死についての様々な課題について考える。

「より良い生」があるように「より良い死」があるとシュナイドマンは述べているが（1980）、本特論は「より良い生」と「より良い死」を探求すること、また、自分がどのように生き、どのような死を迎えたいのかを考えることを目的とする。

〔履修の条件〕

本大学大学院に在籍している1, 2年生のみ履修出来る。

〔講義概要〕

死生学は学際的な領域の課題を扱うが、本特論は臨床の現場で直面する課題、臨床心理学の領域に関係する死生学の課題に焦点を当てて学んでいく。末期医療の現場を訪問すること、文献を通して学ぶこと、課題に取り組み、グループで発表、討

議などを通して講義を進めたい。

ホスピス病棟、緩和ケア病棟、国立療養所多磨全生園記念館の訪問、新生会榛名荘老人ホームでの見学・研修も予定している。日程に関しては実習先と受講生の日程を調整して決定する。

■授業計画

第1回	オリエンテーション：授業概略、自己紹介、本講義より望むもの、レポート担当課題の決定。人間の生と死について
第2回	人間の生と死：死生学とは（その1） 1) キリスト教の視点より
第3回	人間の生と死：死生学とは（その2） 2) 仏教の視点より
第4回	人間の生と死：死生学とは（その3） 3) 実存主義の視点より
第5回	人間の生と死：死生学とは（その4） 4) ギリシャ神話に見る生と死
第6回	良き生とは、良き死とは
第7回	人生の様々な問題： 1) 出生前の問題（先天性の疾患など） 2) 出生時の問題
第8回	心身の病について（その1）
第9回	心身の病について（その2）
第10回	終末期医療について： 緩和ケア病棟・ホスピス病棟について
第11回	高齢期における問題 高齢者が直面する問題とその対策
第12回	自殺と自殺予防について（その1） 1) 人はなぜ自殺をするのか：日本における自殺の現状
第13回	自殺と自殺予防について（その2） 2) 自殺を予防するには
第14回	「私にとって生と死とは」（受講者のレポート発表と討議） 1) 人生の価値の抽出（受講生のレポート発表と討議）（その1） 2) 人生の価値の抽出（受講生のレポート発表と討議）（その2）
第15回	レポート、その他
第16回	—

【成績評価】

試験（0%）、レポート（50%）、小テスト（0%）、課題提出（50%）、その他の評価方法（0%）

【成績評価（備考）】

- 1) 上記の課題から2つ選んで研究発表をする
- 2) グループ討議へ参加度
- 3) ホスピス病棟訪問、新生会榛名荘老人ホームでの研究会などへの参加

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

- 1) 上記の課題から1題、または、2題選びクラスで発表するのでその準備をすること。
- 2) テキスト・参考図書を熟読すること。

本科目では各授業回におよそ200分の準備学習（予習・復習等）を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

フィードバックについてのディスカッションを次の授業でおこなう。

【ディプロマポリシーとの関連性】

この科目は、ディプロマポリシーに定める「広い学識と、高度な専門的知識や技術を備え、専門性を必要とする職業を担うための優れた能力」を身につけることを目的とする。

【テキスト】

シュナイドマン著 自殺とは何か。誠信書房、1993、¥2,650.+税
フランクル、V.E.（山田邦男・松田美佳訳）それでも人生にイエスと言う。春秋社、1993、¥1,780

【参考文献】

河合隼雄（1989）生と死の接点 岩波書店 ¥1700
神谷美恵子（2004）生きがいについて みすず書房 ¥1,600+税
シュナイドマン.E. S.（白井徳満・白井幸子訳）。死にゆく時そして残されるもの。誠信書房、1980.¥2,000
シュナイドマン.E. S.（白井徳満・白井幸子訳）。自殺者のこころ、そして生きのびる道。誠信書房、2001. ¥2,310
袖井孝子編著。死の人間学。金子書房、2007、¥3,150
森 幹郎。老いと死を考える。教文館、2007、¥1,770。
デーケン、アルフォンス。良く生き よく笑い よき死と出会う。新潮社、2003、¥1,470。
アルフォンス・デーケン著 死とどう向き合うか NHKライブラリー 1996、¥1,068+税
課題ごとに参考となる資料を提供する。

日本語論文の書き方(留学生対象)

2単位：通年

1～2年

ドイル 綾子

【到達目標】

- ①日本語の学術的文章作成に必要な技能、知識を習得する。
- ②自分や他者の文章を批判的に読む力をつける。

【履修の条件】

これから修士論文や博士論文を執筆する予定であること。

【講義概要】

本授業では、日本語で学術的文章を書く上で必要な技能を、講義と演習によって身につけていきます。毎週、授業で扱う技能を使って小論文を書く課題が出されます。対面授業の場合には、翌週の授業において、課題文章を他の受講生と検討し合います。遠隔授業になった場合には、講師が提出された文章に対してコメントを入れ、返却します。対面授業であれ遠隔授業であれ、「書く」課題と授業への積極的な取り組みを期待します。

■授業計画

第1回	ガイダンス 講義の進め方、授業で使用するテキストや参考文献の紹介 学術的文章とは何か
第2回	学術的文章にふさわしい日本語—講義—
第3回	学術的文章にふさわしい日本語—文章検討—
第4回	一文一義で書く—講義—
第5回	一文一義で書く—文章検討—
第6回	文と文の関係を明示する—講義—
第7回	文と文の関係を明示する—文章検討—
第8回	明確な語句を使う—講義—
第9回	明確な語句を使う—文章検討—
第10回	「マップ」を使って書く—講義—
第11回	「マップ」を使って書く—文章検討—
第12回	全体を構成する—講義—
第13回	全体を構成する—文章検討—
第14回	全体を構成する—文章検討—
第15回	論点を整理して書く—講義—
第16回	論点を整理して書く—文章検討—
第17回	数え上げて書く—講義—
第18回	数え上げて書く—文章検討—
第19回	パラグラフを作る—講義—
第20回	パラグラフを作る—文章検討—
第21回	抽象度を調節する—講義—
第22回	抽象度を調節する—文章検討—
第23回	参考文献を示す—講義—
第24回	参考文献を示す—参考文献リスト検討—
第25回	ブロック引用をする—講義—
第26回	ブロック引用をする—文章検討—
第27回	要約引用をする—講義—
第28回	要約引用をする—文章検討—
第29回	—
第30回	—
第31回	—
第32回	—

【成績評価】

試験 (0%)、レポート (0%)、小テスト (0%)、課題提出 (100%)、その他の評価方法 (0%)

【予習・復習の内容及びそれに必要な時間】

テキストの指定箇所を読む。

毎週習った技能を意識し、文章を作成する。

本科目では各授業回に約50分の準備学習を必要とする。

【試験・レポート等のフィードバック】

対面授業の場合→対話によって文章を検討しながら行う。

遠隔授業の場合→講師が文章にコメントを入れ、返却する。

【ディプロマポリシーとの関連性】

4. 他者理解と自己表現のためのコミュニケーション能力に該当する。

学術的文章の書き方を学ぶことを通して、自己の考えを深化し、その考えを他者に端的に伝えることができる能力の獲得を目指す。

【テキスト】

佐渡島紗織・吉野亜矢子（2008）『これから研究を書くひとのためのガイドブック—ライティングの挑戦15週間』ひつじ書房 2160円

【参考文献】

浜田麻里・平尾得子・由井紀久子（1997）『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版 2700円